

Title	日本語数量詞の諸相 : 数量詞の位置と意味の関係を 中心に
Author(s)	岩田, 一成
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1839
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

目次

第1章 論を始めるにあたって	1
1. 本研究の考察対象について	1
1. 1. 考察対象	1
1. 2. 考察対象から外れるもの	2
1. 3. 研究の進め方	3
2. 用語・記号の規定	4
2. 1. 数量表現一般に関する基本的な用語	4
2. 2. 数量表現の形式に関する用語	4
2. 3. 例文に付加する記号の意味	5
第2章 数量詞研究における先行研究の流れ	6
1. 数量詞の品詞論	6
2. 数量詞移動	8
3. 通時的研究	9
4. 助数詞の意味論	10
5. 数量詞の形式と意味	13
第3章 助数詞の種類と属性 Q	14
1. 本章の目的	14
2. 助数詞の分類	16
3. 個体・連続体の区分と助数詞	17
3. 1. 英語における可算・不可算	17
3. 2. 日本語における助数詞	18
3. 2. 1. 連続体の個体化	18
3. 2. 2. 個体の連続体化	19
4. 考察：属性 Q	21
4. 1. マッチング原則違反	21
4. 2. 属性 Q の解釈	22
4. 3. もう一つのマッチング原則違反	24
5. 個体と連続体の認識	24
5. 1. 英語話者・日本語話者の認識	25
5. 2. 中国語の数量表現と中国語話者の認識	27
6. おわりに	29
第4章 NCQ 型数量表現	30
1. 先行研究	30
1. 1. NCQ 型数量表現は基本か派生か	30
1. 1. 1. NCQ 型が基本形であるとする見方	30
1. 1. 2. NCQ 型は派生形であるとする見方：数量詞遊離	31
1. 2. NCQ 型の成立条件	32

1. 3. 本研究の立場と本章の目的	32
2. 「英語標準説」と数量詞研究	33
2. 1. NCQ 型を派生と考える理由	33
2. 2. 英語の影響とその問題点	34
3. 数量詞類別型言語	35
3. 1. 朝鮮語	35
3. 2. インドネシア語	36
3. 3. ベトナム語	38
3. 4. 中国語・タイ語	39
3. 5. まとめ	40
4. NCQ という語順に関する考察	41
4. 2. 焦点化による説明	42
4. 3. 考察と仮説	43
5. NCQ 型の成立条件に関する考察～格助詞の制限	43
5. 1. 平行する現象	44
5. 2. 無標のフォーカス	45
5. 3. 仮説(改)	46
6. おわりに	47
第 5 章 Q の NC 型数量表現	48
I 部 現代における Q の NC 型	48
1. 先行研究	48
1. 1. 定 (definite) ・不定, 特定 (specific) ・不特定による説明	49
1. 1. 1. 日本語における定・不定, 特定・不特定	49
1. 1. 2. 定・不定, 特定・不特定で説明する先行研究	51
1. 2. 全体・部分による説明	52
1. 3. 集合・離散による説明	53
1. 4. 先行研究のまとめ	55
2. 非制限的連体修飾による説明	55
2. 1. Q の NC 型における修飾関係	55
2. 2. 仮説をとることによる利点	57
2. 3. Q の NC 型, NCQ 型の比較	59
3. Q の NC 型が非制限的修飾になる条件	60
3. 1. 一般的知識による理解	61
3. 2. 直示的な理解	62
3. 3. 文脈による理解	62
3. 4. 旧情報である N による理解	63
3. 5. 他の修飾句があることによる理解	65
3. 6. 本節のまとめ	66
4. 周辺の例	67
4. 1. 眼前描写の表現～空間的なまとまり	67
4. 2. 時間的なまとまり	68
5. まとめ	69

II部 通時的考察	71
1. 先行研究.....	71
2. 仮説.....	71
3. 明治時代の作品.....	72
3. 1. 直示的な理解.....	73
3. 2. 文脈による理解.....	73
3. 3. 旧情報であるNによる理解.....	74
3. 4. 他の修飾句があることによる理解.....	75
3. 5. その他の例.....	75
4. 江戸時代の作品.....	77
4. 1. 非制限的連体修飾の例.....	78
4. 2. その他の例.....	79
5. まとめ.....	79
第6章 NQC型数量表現.....	81
1. 先行研究と本章の目的.....	81
2. NQC型数量表現の特徴.....	84
2. 1. 仮説.....	84
2. 2. Downing (1996) 再考.....	86
3. さまざまな使用例.....	87
3. 1. 実例: その1.....	87
3. 2. 実例: その2~新聞.....	89
3. 3. 実例: その3~目録としてのNQC型.....	91
4. 名詞としての数量詞.....	93
5. 重点について.....	94
6. まとめ.....	95
第7章 NのQC型数量表現.....	96
1. 先行研究.....	96
1. 1. 慣用的なNのQC型.....	97
1. 2. 部分数を表すNのQC型.....	97
1. 3. 付加的同格 (summative appositive)	98
2. NのQC型の数量表現.....	99
2. 1. Nが固有名詞などでQの内訳を説明するもの(タイプ1).....	99
2. 2. NがQの属性的に解釈できるもの(タイプ2).....	100
2. 3. 定のNの部分数をQが表すもの: Nの中のQ(タイプ3).....	101
2. 4. 連体修飾としてのNのQC型.....	102
3. 日本語の連体修飾における意味構造とNのQC型.....	103
3. 1. 日本語における2タイプの連体修飾.....	103
3. 2. 底としてのQ.....	104
3. 3. NのQC型と外の関係の共通性及び仮説.....	105
4. 考察.....	106
5. 内・外関係と制限・非制限的連体修飾.....	108
6. まとめ.....	108

第 8 章 名詞句内数量詞の位置と意味	109
1. 名詞句内数量詞	109
1. 1. 名詞句内数量詞とは	109
1. 2. 名詞句内数量詞用法の共通点と本章の目的	110
2. 先行研究	111
3. 考察	112
3. 1. 名詞句内数量詞用法の修飾関係	112
3. 2. Q の NC 型と NQC 型	113
3. 2. 1. 固有名詞とその他からなる集合物	114
3. 2. 2. さまざまな構成要素からなる集合物	115
3. 3. N の QC 型	116
3. 4. 仮説	116
3. 5. 考察のまとめ	117
4. 表現の使い分け	118
5. おわりに	119
第 9 章 代名詞的用法	121
I 部 日本語数量詞の代名詞的用法	121
1 はじめに	121
1. 1. 数量詞の代名詞的用法とは	121
1. 2. 数量詞単独使用と代名詞的用法	123
1. 3. 先行研究と本章 I 部の目的	124
2. 数量詞代名詞的用法に関わる制約	124
2. 1. 数詞に関わる制約	125
2. 2. 助数詞に関わる制約	126
3. 数量詞が代名詞的機能を持つプロセス	127
3. 1. 数量詞の抽象性	127
3. 2. 数量詞代名詞的用法の間接性と仮説	129
4. 人称代名詞と数量詞代名詞的用法	130
4. 1. 照応表現	130
4. 2. 直示表現～ 2 人称	132
5. まとめ	134
II 部 日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語	135
1 はじめに	135
1. 1. 指示物の個性	135
1. 2. 代名詞的用法と場指示語	135
1. 3. 本章 II 部の目的と仮説	137
1. 4. 場指示語について	138
2. 指示詞による取り立て	140
2. 1. 人間名詞以外の指示物	140
2. 2. 現場に存在しない指示物	141
2. 3. 役割指示	142
2. 4. 未知の指示物	143
2. 5. 個性性との関係	145
3. 人称代名詞による取り立て	145
3. 1. 人称代名詞の使用	145

3. 2. 範囲指定による取り立て.....	147
3. 3. 個性性との関係.....	150
4. 「指示詞＋名詞」について.....	150
5. まとめ.....	151
第10章 数詞‘一’に関する一考察.....	152
1. 数詞‘一’について.....	152
2. 先行研究と本章の目的.....	153
3. ‘一’と‘二以上’の違い.....	155
3. 1. (1Q)のNC型.....	156
3. 1. 1. 不定を表す数詞‘一’.....	156
3. 1. 2. 個体の全体性を表す数詞‘一’.....	157
3. 1. 3. 共有の意味を表す数詞‘一’.....	158
3. 2. Nの(1Q)C型.....	160
3. 3. N(1Q)C型.....	161
3. 4. 代名詞的用法.....	163
4. ‘一’の概念の成立.....	165
5. 考察.....	167
5. 1. 要素取り出し型.....	167
5. 1. 1. (1Q)のNC型の不定用法.....	167
5. 1. 2. Nの(1Q)C型:「Nの中のQ」という意味.....	168
5. 1. 3. N(1Q)C型:「ただそれだけ」という意味.....	168
5. 1. 4. 不定代名詞的用法.....	168
5. 2. 要素包含型.....	169
5. 2. 1. 個体の全体性を表す用法.....	169
5. 2. 2. 共有の意味を表す用法.....	170
6. 追加例:数詞‘一’を含む熟語.....	171
6. 1. 要素取り出し型.....	172
6. 2. 要素包含型.....	172
6. 3. その他.....	172
7. まとめ.....	173
第11章 結論.....	174
1. 日本語数量詞:位置と意味の関係について.....	174
2. 日本語数量詞:数量表現以外の使用.....	175
3. 名詞が担う情報の普遍性解明に向けて.....	176
用例出典.....	179
参考文献.....	180

第1章 論を始めるにあたって

本章では、本研究で扱う現象についての簡単な解説と用語の説明を行う。

1. 本研究の考察対象について

1. 1. 考察対象

本論文は日本語数量詞の使用状況や機能を記述することを目的とする。よって考察対象は数量詞を使用しているあらゆる表現である。記述が目的であるが、言語表現を人間がどのような状況で発するのか、どのように解釈するのかという視点で分析を行なう。また、言語表現には人間の経験やものごとの捉え方が反映されていると考える。いわゆる機能的・認知的アプローチをとる。本論文で扱う、数量詞を使用した表現とは、数量表現と数量表現以外に分けられる。以後この順で考察対象を具体的に見ていく。

まず、数量表現について見ていく。日本語の数量表現に様々な形式があることはよく知られている。『日本語百科大事典』(大修館書店：1988)の「数量の表現」という項(担当：矢澤真人)を見ると、述部以外の数量数詞¹の出現位置として、以下の四タイプがあげられている。

- | | |
|--------------------|---------|
| ① 3人ノ 学生ガ 反対シタ | (QノNC型) |
| ② 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ | (NノQC型) |
| ③ 学生ガ 3人 反対シタ | (NCQ型) |
| ④ 学生3人ガ 反対シタ | (NQC型) |

これらの使い分けに説明を与えるのが博士論文の中心テーマである。数量詞の研究である以上、数量表現を研究の中心に据えるべきであると考え。一体こんなにたくさんある数量表現を日本人は何に基づいて使い分けるのであろうか。このテーマは、本論文の第4章、5章、6章、7章、8章で詳しく論じる。

実際に使用例を集めてみると、数量表現以外にも更なる対象が浮かんでくる。それは以

¹ 本研究では、数量数詞という用語を使わずに、数量詞と呼ぶ。数量詞とは、〔1, 2, 3 …〕などの数詞と〔本, 冊, 人〕などの助数詞を足したものである。

下に挙げるようなものである。

- ⑤ 77キロノ学生ガ転ンダ (属性 Q)
- ⑥ アルトコロニ一人ノ若者ガオッタ (不定マーカ―)
- ⑦ (山本, 須田, 岩田) アノ三人ハドコヘイッタ? (代名詞的用法)

⑤, ⑥は形式上① (Q ノ NC 型) と同じ形式をしている。しかし, ⑤のような例は, 「体重が 77 キロの学生」という意味であり, ①タイプの表現とは違う。一般に属性 Q と呼ばれている²ものであるが, 同じ形式でも数量表現になったり, 属性 Q になったりするのはどうしてだろうか。また, ⑥のように数詞が ‘一’ のときは, 不定マーカ―としての読みなどが出てくる³。⑦のように代名詞として数量詞が使われている例も非常に目に付く。これらは, 数量詞を用いているにもかかわらず, 数量表現ではない。一見周縁的と見られがちであるが, これらの表現は日本語における数量詞の使用の大きな部分を占めている。⑤⑥⑦のタイプは, それぞれ第 3 章, 9 章, 10 章で論じる。

①②③④に関する議論は, 数量詞の位置と意味の関係を議論するものであるが, ⑤⑥⑦に関するものは数量詞機能の多様性や数に関する議論である。よって, それらさまざまな議論を含んでいることが, 『数量詞の諸相』というやや大きなタイトルをつけたゆえんである。詳しくは 2 節で説明するが, 以後の議論では引用するときを除き例文・表現形式をひらがなで表記する。

1. 2. 考察対象から外れるもの

数量表現である①②③④のタイプ, 数量表現以外の⑤⑥⑦タイプ, これらを順に紹介してきた。後者の数量表現以外については各章で対象を明らかにするが, ここでは前者の数量表現に関して, 考察対象を絞りたい。一言で数量表現と言っても様々なものが含まれるからである。

「N についてその数とカテゴリー情報を Q が表すもの」が本研究の対象となる数量表現である。「学生が二人…」という場合は, 学生の数に ‘二’ が表し, 学生は ‘人’ というカテゴリーに含まれると考える。このように数量詞と名詞が互いに参照 (refer) しているものを数量表現としたい。よって, 以下のようなものは対象には含めない。

² 奥津 (1983・1989・1996b) 参照, 詳しくは第 3 章で論じる。

³ Downing (1996), 加藤[美](2003)参照, 詳しくは第 10 章で論じる。

- (1) 二人の世界が広がる。
- (2) ジャージの二人が現れた。
- (3) 負傷三名が確認された。

これらの例はすべて N を Q が参照していない。‘世界’の数は‘一人’‘二人’とは数えないし、‘ジャージ’や‘負傷’の場合も同様である。

また以下のような数量詞も、対象からはずしたい。川端（1967）では度数詞と呼んでおり、北原（1996）では頻度数量詞と呼んで他の数量詞と区別している数量詞である。

- (4) 今年は東京へ3回行った。
- (5) 彼には3度会ったことがある。

このような数量詞は、基本的に NCQ 型しかないので、本研究の対象からはずしたい。本研究の数量表現を扱う章においては、数量詞の位置と意味の関係を論じるものであり、位置の変化がないこれらの助数詞は対象に入れない。

また、本研究で扱う数量詞は「数詞+助数詞」で構成されるものに限定する。よって‘たくさん’‘すべて’などの数量表現は扱わない。

- (6) a. たくさんの本を買った。 Q の NC 型
- b. *本のたくさんを買った。 N の QC 型
- c. 本をたくさん買った。 NCQ 型
- d. *本たくさんを買った。 NQC 型

これも理由は上と同じで、位置の変化にかなり制限があることによる。

1. 3. 研究の進め方

いかなる科学でも、それがわれわれをめぐる自然界の理法にたいする、人間の知恵による探求という知的作業であるかぎり、問題となる事象が、いかに (how) あり、なにゆえに (why) そうあるかということが、ふつう、この順序で、とわれなければならないであろう。(橋本 1978a:2)

これは、言語研究に取り組むに当たって本研究がとる進め方である。まずは言語事実をしっかりと記述する。できるだけ様々なジャンルから言語事実を収集し、その後でどうしてそうなるのかという (why) を問う。この順序で論を進める。章によっては先行研究が多く、

それらをまとめることに議論の大半を割くこともありうるが、収集した言語データを基に議論を進めるのを基本的なスタンスとしたい。

2. 用語・記号の規定

議論に入る前に、本研究で用いる用語や記号について簡単な説明を行う。

2. 1. 数量表現一般に関する基本的な用語

奥津（1986）他現在の慣例に従って、用語は以下のように規定する。ただし、数詞という用語には注意が必要である。国語学の伝統では、本稿でいう数量詞の意味で数詞という用語が用いられている。誤解を避けるためにも、引用の際その都度注釈をつける。助数詞については、類別的なもの（匹、冊・・・）と度量衡の単位（kg, cm・・・）とに分ける立場がある。しかし中国語と異なり、日本語においてはその位置と意味機能の関係を見るに当たって特に異なった振る舞いをするわけではない。よって、議論の展開上必要なとき以外は基本的にそれらを区別せずに用いるが、全く同質のものであると主張するつもりはない。本論に入る前に、第3章ではこれらの区別を議論したい。

<u>数詞</u>	1, 2, 3, …
<u>助数詞</u>	匹, 冊, kg, cm ……
<u>数量詞</u>	数詞プラス助数詞

2. 2. 数量表現の形式に関する用語

本研究で考察の対象となる形式を以後、以下のように呼ぶ。それぞれの形式をバラバラに扱うときは、NCQ型、QのNC型、NQC型、NのQC型を用いるが、QのNC型とNQC型、NのQC型をまとめて扱うときは、名詞句内数量詞用法という用語を用いる。これら、QのNC型とNQC型、NのQC型を同じタイプだとする根拠は第8章で述べる。冒頭で挙げた例のように、‘QノNC’のようなカタカナ表記を用いている先行研究もあるが、本論文では引用するときを除いて‘QのNC’というひらがな表記を用いる。なお、N・C・Qという表記はNoun「名詞」、Case「格助詞」、Quantifier「数量詞」を表すものとする。

<u>NCQ 型</u>	「ワインを 3 本」のように名詞，助詞，数量詞の順で並ぶタイプ
<u>Q の NC 型</u>	「3 本のワインを」のように数量詞＋の，名詞，助詞の順で並ぶタイプ
<u>NQC 型</u>	「ワイン 3 本を」のように名詞，数量詞，助詞の順で並ぶタイプ
<u>N の QC 型</u>	「ワインの 3 本を」のように名詞＋の，数量詞，助詞の順で並ぶタイプ

名詞句内数量詞用法 Q の NC 型，NQC 型，N の QC 型を含んだもの

2. 3. 例文に付加する記号の意味

<u>*</u>	文法的に非文であること
<u>?</u>	非文とは言い切れないが，少しすわりが悪い文であること →?の数が増えるほどすわりが悪くなることを表す
<u>#</u>	当該の文脈では意味が合わないこと

第2章 数量詞研究における先行研究の流れ

ここでは数量詞研究がいままでどういった視点で行われてきたかを概観する。本論文で扱う数量詞は数詞と助数詞からなるもので、これまで様々な研究がなされている。それらの研究を概観することで、数量詞に対する興味のあり方を明らかにする。また、先行研究を紹介しながら本論文の立場を明らかにし、研究の中での位置づけを行いたい。

1. 数量詞の品詞論

数量詞の品詞を決定しようとする議論は多くの研究者の興味の対象となってきた。第4章での議論とも関わるので、ここではそれらの研究の流れを詳細に紹介したい。論点は、数量詞を名詞に含めてよいのかということである。数量詞は、基本的に一般の名詞と異なるところがないのだが、「学生ガ3人反対シタ」のように副詞的な用法を持つ点が特徴である。このように、数量詞には名詞性と副詞性の二面があるという指摘がなされている（森重 1958, 堀川 2000）。この副詞的な用法をめぐっては様々な議論が出ているが、本論文では第4章で詳しく論じる。ここでは品詞論に関わる議論だけをまとめたい。副詞性を取り上げる主張、名詞であるという主張、の順番で以後見ていく。

山田（1908・1936）、佐久間（1936）、木枝（1937）では数量詞を形式体言としながらも、その副詞性を重視して、名詞とは別に扱うべきだと述べている。特に様々な議論において、数量詞を一品詞として扱う山田の名前はよく出てくる。副詞としての性質を重視している研究者には、三上（1953）、川端（1967）のように数量詞の本籍を副詞に入れているものもある。

数詞はむろん名詞としても使われる。算術の授業時間には名詞としての数詞から出発するかもしれないが、普通の談話では副詞的用法が先であろう。英語の数詞がまず形容詞、次いで名詞（または代名詞）であるように、我が数詞⁴は本籍を副詞、寄留地を名詞とするのが適当であろう。（三上 1953 : 54）

⁴ 本稿でいう数量詞の意味である。

数詞⁵もまた、有属文から系列的に連続し、直接には程度・陳述副詞の時空体系に沿った外面化として、そう言ってよいならばやはり副詞なのである。(川端 1967 : 27)

また、数量詞だけが副詞性を持つわけではなく、時を表す名詞も副詞性を持つことから、数量詞と時の名詞との比較をしている論文があり(佐治 1991)、そこから時数詞という用語も使われることがある。外国人に日本語を教えるという実用面からも、数量詞と時を表す名詞は同様に扱うべきだと述べ、時数詞を立てている研究(江副 1987)もあり、比較的新しい研究では、数量詞という名前の一品詞を他から独立して立てるべきだという議論も出ている(宇都宮 1995b)。ここまでは、数量詞の副詞性に注目する研究である。

一方、数量詞を名詞の一種と考える研究がある。橋本(1948)では、数量詞を名詞に含めている。数量詞が副詞性を持つのは、数量数詞の場合だけであり、序数詞「第一、第二章、三つめ、四番、五番」などは副詞的には使われないことや、時を表す名詞「きのう、あした」なども副詞的な用法があるのだから数量詞も名詞に含めてかまわないというのがこの立場である。加藤(1972)、宮地(1972)も同様の指摘をしている。中には数量詞の副詞性を全く考慮せず、そのまま名詞に分類しているもの(鈴木 1997)もあるが、橋本(1938)では、以下のように述べている。

『ひとつ』『五足』『八尾』など普通の数詞は数の名を表すもので、数えて名づけた名であるという事の特徴であります。これ等は文法上の性質は、一般の名詞と何等異なるところがありませんから、名詞の中にいれてよいものです。ただこの類の語を別に言う必要のあるときに限って『数詞』⁶の語を用いるに過ぎません。(橋本 1938 : 45)

以上の流れを見ると、ほとんどの研究において数量詞の副詞性は認めながらも、それを中心とみるか周辺的な現象と見るかで意見が分かれているといえる。全体を概観すると、品詞論の流れにおいては数量詞を名詞に含める立場が通説となり落ち着いているようである(池上 1971b, 宮地 1972)。

⁵ 本稿でいう数量詞の意味。

⁶ 本稿でいう数量詞の意味。

数量詞を名詞の一種と考える流れの背景には、英語の影響も強いと考えられる。英語では numerals が一般的に noun の前に位置する。明治初期は日本語の数量詞を ‘quantitative adjectives’ や ‘numeral adjectives’ などといった英語学の用語を持ち込み、形容詞として扱う文献も見られることが池上（1971b）、宮地（1972）で指摘されている。つまり、数量詞は名詞を修飾するものであるという考え方が明治初期に見られており、この考え方は現在も根強く残っていると考えられる。Martin（1975）でも、数量表現の様々なタイプを紹介する際に、Q の NC 型を ‘Basic’ としている。

Basic 二枚の色紙をとった

Adverbialization 色紙を二枚とった (Martin1975 : 原典はローマ字表記)

ここでは、他のタイプも紹介されているが、上の二つだけを紹介しておく。こういった日本語数量詞に対する見方は、以後様々な形で議論と関わってくる。例えば数量詞が移動するなどという議論が出てきたのもまさにこの数量詞は名詞を修飾するべきものであるという考え方が背景にあることは間違いない。数量詞移動については次節で詳しく述べる。また、数量詞研究における英語の影響については第4章で詳しく論じる。

本稿の立場としては、数量詞の品詞論には関わらないが、様々な位置をとることで、名詞的になったり副詞的になったりすると考える。具体的には第4章で扱うタイプにおいては副詞的であり、5章～8章で扱うタイプにおいては名詞的であり、9章では、代名詞的になるという立場である。副詞的とは、日本語の副詞と同じ位置に出現するという程度の意味であり、数量詞の品詞を決定する必要はないと考える。数量詞は品詞を決定することができないものであり、それが数量詞研究のおもしろさでもある。ただし、多くの研究で指摘されているように日本語として自然な言い方は副詞的な用法であるとする⁷。

2. 数量詞移動

移動の議論では、Q の NC 型や NQC 型が基底構造となって NCQ 型が派生されると考えられていた。そういった議論から遊離数量詞や数量詞遊離構文といった用語で NCQ 型を呼ぶようになったのである。NCQ 型を遊離したものと考え、その基底形をめぐって様々な議論が出ている。柴谷（1978）は Q の NC 型の構造に近いものが深層構造であり、そこから数量表現が遊離することによって NCQ 型が現れるとしている。以後同じ立場の研究者に NCQ 型は数量詞遊離 (quantifier floating) 構文と呼ばれてきた。神尾（1976, 1977）で

⁷ これについては4章で詳しく述べる。

は、Q の NC 型を基底構造として NCQ 型が派生されるとしている。それに反論して奥津 (1969, 1983) などでは、NQC 型を基底構造として NCQ 型、Q の NC 型が派生されるとしている。

一方、移動に批判的な意見はたくさんある。井上 (1978), 寺村 (1991), Downing (1996), 郡司 (1997), 堀川 (2000) など多くの研究で、移動という議論自体を疑問視している。三原 (1994・1998a) は生成文法の立場で移動を否定している。

なお、現行の理論的枠組みではもはや数量詞遊離という操作は存在せず、いわゆる遊離数量詞を、S 構造でそれが現れている位置に基底生成する。(三原 1994: 140)

そもそも NCQ 型を数量詞遊離構文 (Q - float) という名称で呼ぶこと自体が、移動して形成されたという発想の現れであることから、その名称を疑問視したり (Downing 1996), 別の名前を用いたり⁸ (三原 1998abc, 堀川 2000) している研究もある⁹。しかし、まだまだ数量詞遊離構文という名称は広く使われている。小林 (2004) では‘遊離数量詞’という用語を用いているが、移動は認めないという立場をとっている。本研究もこれらの指摘と同じ立場であり、数量表現の様々なタイプは、移動して派生されるとは考えない。

こういった流れの中、国語学・日本語学の論文では数量詞の移動という議論は見られなくなってきたが、生成文法の論文ではまだ根強く議論されているようである (Watanabe 2006)。また、遊離に関しては格助詞に制限があることが指摘されているが、遊離の条件に関しては第 4 章で詳しく論じる。

3. 通時的研究

日本語の助数詞はどのように変遷してきたのか、また、一見中国語からの借用に見える助数詞の中で、日本語固有のものはあるのだろうかといった興味から、歴史を遡っての数量詞研究がなされてきている。築島 (1965) のように数詞だけを取り上げてその変遷を論じているものもあるが、通時的研究は助数詞を扱うものが圧倒的である。

三保 (2000・2004) の一連の研究は、木簡や古文獻などから文字化されている助数詞の

⁸ 数量詞遊離構文に代わって、数量詞連結構文という名称が用いられている。

⁹ 郡司 (1997) では、浮遊数量詞と呼んでいるが、日本語数量表現が様々な形式を持つことを指している。よって遊離数量詞とはニュアンスが異なる。

事実を整理し、助数詞の使用を記述しようとするものである。それぞれの使用例を断片的に記述しているという感は否めないが、膨大な資料から歴史的事実を描き出しているという点で、資料としての価値は非常に高い。こういった細かい積み上げは通時的研究にとって重要なものである。また、通時的に見た数量詞の発音を中心に扱っている研究もある（安田 1978）。

池上（1940）は助数詞は日本語の特性のひとつであるという主張をしている。つまり、日本語に本来的に助数詞があったという指摘である。そして、日本語固有の助数詞として以下のものを挙げている。

神を数へる場合の「柱」は古事記に極めて多く出てくる。「前」も少しある。人を数える尊称の「所」は正倉院の仮名文書中にあり、普通の「り」（又はたり）は一々云ふまでもなからう。植物を数えるのには「本（モト）」（紀 かみらひとと・萬葉集 五本柳）もあるが「つ」（萬葉集 二つ立つ櫟）も用いられる。…（池上 1940 : 19）

他にも日本語には本来的に助数詞が備わっていたという主張は多く見られる。橋本（1978b）でも、日本語固有の助数詞をいくつか挙げている。また、渡辺（1952）では数詞の自立性という観点からやはり日本語には固有の助数詞があったという立場をとっている。田中（1987）では、日本語の上代語に一音節語が多かったことから、助数詞（類別詞）が発達する下地は備わっていたという指摘をしている。ただ、どの研究も認めていることであるが、日本語の助数詞に関して中国語からの影響は非常に大きい。

4. 助数詞の意味論

「助数詞はどういった使われ方をするのか？」というようなテーマは研究者のみならず一般の興味の対象ともなりうる。例えば「鳥を数える‘羽’が兔を数えるときに使われるのはどうしてか？」といったものがよく話題にあがる。そういう助数詞の意味範囲をテーマにして助数詞を扱っている研究も見られる（見坊 1965・三保 2006）。近年、助数詞の使い方が辞典として出版されたりもしている（飯田 2004）。特に、早くから助数詞の使用について興味を抱いていた研究者は外国人に多い。ロドリゲス（1608）や Brown（1863）では、助数詞の使い方について詳しい記述が見られる。

本論文では「数詞+助数詞」をまとめて Q としている。第 1 章で定義したとおり、Q は「1 冊, 2 人, 3 匹, 4 本」などのように数詞と助数詞からなる。これらは具体的に指示物を指定できるわけではなく抽象的なカテゴリ情報とも言える。このカテゴリ情報は一体どの程度の指示範囲を持っているのかという疑問が出てくるのは当然である。カテゴリ情報を担うものという意味で使われるとき、助数詞は類別詞と呼ばれる。

このように、Q はカテゴリ情報を表すという観点から数量詞を捉えた研究にレイコフ (1987) がある。認知言語学の観点からオーストラリアのゲルバル語の名詞接辞と日本語の助数詞「本」を取り上げて論じている¹⁰。ここではゲルバル語の名詞接辞も日本語の助数詞もともに分類詞とした上で、ともに放射状カテゴリを表すものの例として扱われている。電話や映画や手紙がすべて「本」で数えられるのはどうしてかといった疑問はそれまで日本人研究者には詳しく扱われてこなかった視点である。

上に述べたように、レイコフ (1987) ではゲルバル語の名詞接辞と日本語の助数詞を同じように扱っているが、それに対して井上 (2003) は、両者を混同することは危険であるとしている。確かに義務的に必要とされる名詞接辞は、数量詞と同じであるとは言えない。しかし、カテゴリ化というものを大局的な観点から見ると、名詞類・ジェンダー・類別詞はすべて名詞を分類するものという共通点がある。渡辺 (1996) でも「無数と言ってよいほど沢山ある名詞を、何らかのグループに分けたい気持ちはどの言語にもあり得て、… (渡辺 1996 : 163)」として、ドイツ語やフランス語のジェンダーと日本語の類別詞を並べて紹介している。

人間は、事物に名称を与える命名主義者 (ノミナリスト) だといわれるが、同時に、事物を分類しないではおれない分類主義者 (タクソノミスト) でもあるといえよう。(宮本 1993 : 29)

このような指摘を引用するまでもなく、名詞の分類は人間の普遍的な性質から説明ができるであろう。本稿でもレイコフの観点と同じ立場である。ただ、分類に関して言えることは、カテゴリの class が増えれば増えるほど、その成員との関係は意味づけが可能になっていくが class が減るとそれが難しくなるということである。

日本語の助数詞は 500 あると言われているが、常用は 27 (Downing1996) や 32 (松本

¹⁰ 日本語の例は Downing (1984) を基にしている。

1991) といった数字が挙げられている。フランス語のジェンダーが男性女性の2種類だとすると、当然日本語のほうが類別詞とその対象となる名詞との関係がわかりやすい。フランス語でテーブルが女性になることに論理的な必然性(説明原理)は感じられない。日本語の‘本’は「細長いものに使う」という使用規則(説明原理)がやや抽象的ではあるが見つけられる。ただ、日本語にも説明できない周縁的な使用方法はある(松本 1991)ので、これらの説明原理とはあくまで相対的なものである。レイコフ(1987)で紹介しているゲルバル語の例を見ていると、4つカテゴリーがあれば、かなり説明が可能であることがわかる。そこでは客観的な事実だけでなく、神話などを考慮すると、4つのカテゴリーの大部分が説明できることを示している。また、名詞のクラスの研究でよく例に出されるのはアフリカのバントゥ諸語である(橋本 1978a, 西江 1978, 宮本 1993)。よく知られているように、名詞が10から20のクラスに分類される。西江(1978)では、民間分類を用いて分類の根拠とすることも、ある種のクラスを除くと非常に難しいという指摘をしているが、アフリカ哲学から分類を説明しようとする試みは宮本(1993)で幾つか紹介されている。少なくともゲルバル語よりは説明原理が与えやすいのではないだろうか。ここでは、カテゴリーの数は違うが、名詞を分類する点においてそれぞれ共通することを確認しておきたい。

日本語	バントゥ諸語	ゲルバル語	フランス語など
(類別詞)	(クラス)	(名詞分類辞)	(ジェンダー)
27~32	10~20	4	2
易	←————→		難
説明原理			

また、カテゴリーは時間がたつとだんだん減少していくという変化の方向もレイコフ(1987)では示唆されている。これは日本語助数詞において‘つ’や‘個’が多用され、バリエーションが減ってきているという変化と一致する(飯田 2005 など)。助数詞の意味論はカテゴリー化に関わる非常に興味深いテーマであるが、これを本研究で中心に論じることはしない。本研究は数量詞の位置と意味について考察するものである。ただし、Qの位置と意味を考察していくことで、結果的にはカテゴリー化という認知操作が数量表現に関わってくることを第8章で取り上げる。

5. 数量詞の形式と意味

本論文はここに入れられる。数量表現はさまざまな形式を持っており、今までそれらの形式と意味との関係をテーマにした研究もたくさん出ている。本論文と直接関わってくるこれらの研究は以後の各章で個別に紹介する。本論文が中心に扱う4つの数量表現を再掲する。

- ① 3人ノ 学生ガ 反対シタ (QノNC型)
- ② 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ (NノQC型)
- ③ 学生ガ 3人 反対シタ (NCQ型)
- ④ 学生3人ガ 反対シタ (NQC型)

先行研究には偏りがあり、QのNC型、NCQ型に関しては非常にたくさんの議論がなされている。これについては第5章で詳しく論じる。上のタイプすべてを扱っているものはKim (1995), Downing (1996) が挙げられる。

第3章 助数詞の種類と属性 Q

数量詞は数詞と助数詞からなるものであるという定義を第1章で行なった。ここでは第4章以降の議論に入る前提として助数詞にはどういったタイプのものがあるのかということ概観して、それらのタイプを2分類する。その2分類がどういった意義を持つのかを論じるために属性 Q という表現を見ていく。本章では助数詞という用語を用いるが、カテゴリーを表すものという意味で用いるときは類別詞と呼ぶ。

1. 本章の目的

数量表現の議論において属性 Q と呼ばれる表現がたびたび取り上げられる。(1) の表現がそうであるが、これらは N を Q が参照しておらず、厳密には数量表現とは言えない。

- (1) a. 2000cc の車
- b. 200 キロの力士
- c. 8 畳の部屋
- d. 1 リットルの瓶
- e. 300m の東京タワー
- f. 10 段の階段
- g. 26 度の部屋

西山 (2003)

これらは数量詞 Q と名詞 N からなるという点において本論文で扱う数量表現と同じであるが、車の数は‘台’を用いて数えるので、(2) のようなタイプが数量表現であると言える。

- (2) a. 3 台の車
- b. 8 人の学生
- c. 1 リットルの酒

西山 (2003)

また、属性 Q は NCQ 型が作れないことをその特徴としている (奥津 1983, 1989, 1996 b)。この点においても数量表現とは大きく違う。

- (3) a 太郎は今月 2000cc の車を買った。
- b *太郎は今月車を 2000cc 買った。

基本的に (3) b. のように NCQ 型にして非文となってしまうものを属性 Q としているが、NCQ 型が非文にならないときでも (4) a. のように意味的に“階段”の属性を表している

考えられるものなら属性 Q に入れることを奥津 (1996b) で認めている。

- (4) a 一〇段の階段をのぼる。
- b 階段を一〇段のぼる。

本章で注目したいのは、これらの属性 Q と呼ばれている数量表現に関する西山 (2003) の指摘である。西山は (1) の属性 Q と密接な関係があるものとして以下のような属性数量詞構文を立て、それらには語用論的に意味の補完が必要であるとしている。

- (5) a. その車は 2000cc である。
- b. あの力士は 200 キロだ。
- c. その部屋は 8 畳である。
- d. そのびんは 1 リットルである。

車自体が「2000cc」という属性をもつわけではないし、力士自身が「200 キロ」という属性をもつわけではないし、部屋自体が「8 畳」という性質をもつわけではない。同様にびん自体が「1 リットル」という性質を持つわけではないであろう。そうではなくて、車は、たとえば、排気量が 2000cc であり、力士は、体重が 200 キロであり、部屋は、広さが 8 畳であり、びんは、容積が 1 リットルなのである。このように、「排気量」「体重」「広さ」「容積」などを補完しないかぎり、これらの文の意味は充足しないのである。その補完は意味論の仕事ではなくて、コンテキストに依拠する語用論的な作業なのである。(西山 2003 : 343 - 344) ¹¹

ここで指摘されるような意味の補完は、属性 Q にも当てはまる。こういった補完が起こるのはどうしてか、ということ論じるのが本章の目的である。そしてその原因には助数詞の種類というものを考慮しなければならないということを主張する。まずは、助数詞の分類から始める。

本章の目的：属性 Q に意味的な補完が起こるプロセスを明らかにする。また、助数詞の 2 分類と個体・連続体の区別との関わりを通言語的に論じる。

¹¹ 西山 (2003) では、属性数量詞構文がウナギ文と意味的に同種であるということを主張する文脈でこの指摘がなされている。

2. 助数詞の分類

ここでは、日本語の助数詞を細かく見たい。水口（2004b）では日本語の助数詞を三分類している。

(6) 個別類別詞：人，匹，本，枚，粒，台，丁，個，つ，など

集合類別詞：対，足，束，輪，山，セット，グループ，列，チームなど

計量類別詞：杯，匙，袋，切れ，抱え，包み，キロ，グラム，トンなど

(水口 2004b)

この分類は、対象となるものの特性に基づいており、それぞれの類別詞は、その対象となる名詞を選択する。個別類別詞には個体、集合類別詞には個体の集合、計量類別詞には連続体が用いられる。ただし、上にある計量類別詞の項目をみると、杯、匙のように、対象を個体化して‘数える’タイプの助数詞と、キロ、グラムのように対象の量を‘測る’タイプの助数詞が同じものとして扱われている。多くの研究で度量衡の単位 (kg, cm…) は別に扱っているが、その区分を考慮すると、以下のようになる。

(7) 個別類別詞：人，匹，本，枚，粒，台，丁，個，つ，など

集合類別詞：対，足，束，輪，山，セット，グループ，列，チームなど

計量類別詞：杯，匙，袋，切れ，抱え，包みなど

単位 : キロ，グラム，トンなど

個体対連続体という基本対立を考える際、個体は数を数えることができるが、連続体は量を測ることしかできない。つまり、個体の数を数えることと連続体の量を測ることが助数詞の基本的な機能ではないだろうか。両者はそれぞれ個別類別詞と単位に対応する。(6) (7) にある集合類別詞や計量類別詞は分量語彙などと呼ばれて、語彙として扱っているものもある(井上 2003)。語彙として自立性の高い集合類別詞や計量類別詞は本稿では議論からはずして考察したい。多くの研究でも助数詞を扱う際、個別類別詞と単位に分けているだけであり¹²、本稿もそれに従う。以後議論の対象となる個別類別詞と単位をそれぞれ、分類類別詞(本，台)、測定類別詞(メートル，グラム)(井上 2003)と呼ぶ。

(8) 分類類別詞：人，匹，本，枚，粒，台，丁，個，つ，など

測定類別詞：キロ，グラム，トンなど

¹² 加藤[重](2003)の「存在数量詞：非存在数量詞」、張(1983)の「助数詞：単位名」、Martin(1954)の「unit counters : class counters」などまさに助数詞を2分類して扱っている。

3. 個体・連続体の区分と助数詞

3. 1. 英語における可算・不可算

助数詞の分類に入る前に、有界性という概念の説明から始めたい。英語の名詞などには可算・不可算の区別がある。Langacker(1987b)¹³によると、その区別は名詞の有界性に関わるとし、可算名詞は‘bounded region’を表し、不可算名詞は‘unbounded region’を表すとしている。不可算名詞は一般に個体ではなく物質を表すので物質名詞と呼ばれることもある。

- (9) a. apple, book, person 可算 → 有界
b. water, air 不可算 → 非有界

(9) a.のように境界線のはっきりしているモノについて、可算名詞が使われるのが一般的であり、(9) b.のようにはっきりしないものには、不可算名詞が使われる。ただ、この区別は絶対的なものではないということが多くの先行研究で指摘されている。

篠原(1993)、池上(2000)、井上(2002)、今里(2004)などでは、人がそれとどのようにつきあうかという経験的基盤によって可算・不可算が決まるという指摘がなされている。

- (10) a. dog horse (可算) : fish sheep (不可算) (井上 2002)
b. an apple (可算) : 5kg of apple (不可算) (今里 2004)
c. coffee (不可算) : coffees (可算) (池上 2000)

(10) a.の例は、どれも動物の名前を表している。しかし、‘fish’ ‘sheep’ というのは単複同形で、実質、不可算名詞である。これについては、魚や羊というのはいつも集団で移動し、個性や個性を認識しにくいという説明がなされている(井上 2002)。また同じ apple という名詞を見ても、(10) b.のように可算名詞として捉えられることもあれば(an apple)、不可算になることもある(5kg of apple)。後者では、りんごのひとつひとつの個性は問題ではなく、全体として 5kg あるということだけに焦点が当たっている。一般に不可算と考えられる coffee のような単語でも、明らかにカップに入っているコーヒーを複数指して使うときは可算名詞(coffees)にすることができる((10) c.)。Langacker(1987b)でも、同様の指摘があり、‘Furniture’ のようなはっきりした個体も抽象レベルを上げていくことによって集合名詞にできると述べている。これらはすべて、人の経験的基盤によって英

¹³ Langacker(1987b)では、名詞と動詞が共通して有界性をもっているというのが主な主張である。

語の名詞を説明しようとするものである。

本章でも、ここまで見てきたように、モノにおける可算・不可算の対立を有界性の違いによるものとする。なお可算名詞・不可算名詞（物質名詞）といった用語が指す指示物を言うときは、それぞれ個体・連続体という用語を用いる。また、両者は客観的な存在に即して絶対的に決められるものではなく、人間の経験的基盤によって柔軟に決定されるものであるという立場で論を進める。

3. 2. 日本語における助数詞

ここまでは、英語における有界性を見てきたが、名詞に単数・複数の形態的な違いを持たない日本語では、これらの区別を助数詞（類別詞）が行なうと考えられる。

数量類別詞を使う言語では、どのタイプの名詞でも数量表現が現れると類別詞を使うので、統語的には相違ないが、意味的には名詞には加算・不可算の区別があるのである。（水口 2004a : 14）

助数詞に大きく分けて 2 種類あることはすでに 2.節で論じた。人、本、台などのように個体の数を数えるときに用いるものと、メートル、グラムのように単位として連続体の量を測るものである。分類類別詞は個体の‘数を数える’ものであり、測定類別詞は連続体の‘量を測る’ものである。3.1.で述べたように個体・連続体という区別は、有界・非有界で説明ができた。助数詞と名詞との組み合わせを考慮すると、(11) のように基本的には、分類類別詞は個体名詞が対象となり測定類別詞は連続体名詞が対象となる。これを本章ではマッチング原則と呼ぶ。このように、日本語においては有界性を助数詞と名詞の組み合わせによって表していることを確認しておきたい。

(11) マッチング原則の定義

分類類別詞は個体名詞と共起し、測定類別詞は連続体名詞と共起する

- ・ 分類類別詞+個体名詞：三本の鉛筆 五台のパソコン 2つのリンゴ
- ・ 測定類別詞+連続体名詞：2メートルの布 2リットルの水

3. 2. 1. 連続体の個体化

3.1.で述べたように、連続体や個体といった概念は、経験的基盤に依存して柔軟に決定される。ここではまず、連続体について少し触れたい。一言で連続体と言っても個体として

扱われることもある。池上（2000）では英語の例を示しているが、*wine* といった不可算名詞も種類を言いたい時には *wines* になり、3.1.で紹介した *coffee* という不可算名詞もカップに入っている場合は、*coffees* と言うことができる。とある。

日本語でも同様に、連続体は個体化されうる。例えば‘水’という連続体は、ペットボトルに入っていたり、タンクに入っていたりする。これらは連続体としての水を指すのではなく、個体としての水を指している。よって「3本の水」というような一見マッチング原則に反するような「分類類別詞+連続体名詞」の使用も実は「分類類別詞+個体名詞」の解釈になり成立する。同様にバターや粘土がかたまりで売られているような状況では「3個のバター、3枚の粘土」などという表現も可能である。これらはマッチング原則に反しない。

3. 2. 2. 個体の連続体化

次は個体の連続体化について触れたい。ちょっと変わった状況だが、池上（2000）では、万能粉砕器というものを仮に想定してみて、言語表現がどうなるかという考察を行っている。中に入れるとなんでも粉々にしてしまうような機械があるとすれば、どんな個体を入れても連続体として出てくる。例えば、*a steak* を機械に入れて粉々にしたあと、それを床に撒けば、「そういう状況を指して、無冠詞の *steak* という形を使って ‘*There’s steak all over the floor*’ と言えるはずである。（池上 2000 : 108）」と述べている。これは現実の世界には想像しにくい、個体が連続体化されるという一つの例である。

個体が連続体化される例として、より一般的に指摘されているのは、「複数の個体」→「集合体」→「連続体」というような過程で、均質の個体の集合が連続体に読み替えられる認知プロセスが存在するということである（レイコフ 1987, 篠原 1993, 池上 2000 など）。

例えば *rice*, *sand* 等はまさにそのプロセスを経て初めて不可算化されるわけだが、その際、カテゴリー内の構成要素は客観的にいえば、境界線を有する個体でありながら、個体性は捨象され連続体と捉え直されているわけである。不可算名詞（*water/sand/corn/cattle/furniture* 等）の構成要素の物理的サイズの多様性が示すように、どの程度の大きさまでが連続体と捉えられるかは、ここでも客観的に規定できるものではなく、あくまで、どのような概念化がなされているか（つまり、対象が人間にどう認知されているか）が問題解決の鍵となる。（篠原 1993 : 47）

日本語の場合は、これが「測定類別詞+個体名詞」の形式で行なわれることがある。測定類別詞を使うと、個体が連続体扱いになりうる。

- (12) 8キロのリンゴ
- 10キロのピーナッツ
- 5トンの鰯
- 10キロの砂
- 2升のお米

このように個体が連続体に読み替えられるのは非常に限られた状況である。そこには様々な条件があることが予測できる。

まず、均質な集合でなければならないということである。同じものが集合として集まっていることが連続体化の条件である。また、篠原（1993）で客観的には規定できないとしているが、ものの大きさも条件の一つとして挙げられるであろう。

構成する〈個体〉の大きさということが個体の集合を〈集合体〉か〈連続体〉か、いずれとして知覚するかに関わる重要な関わりを持っていることは明らかである。そして、この限りにおいては、現実に関わる客観的な状況も、〈可算〉か〈不可算〉かという認知に十分制約として働きうるわけである。しかし、ここでも究極的な要因は言語を話す主体の方にある。（池上 2000 : 110 - 111）

砂や米のように客観的に小さいもののほうが、連続体化しやすいという傾向は確認できるであろう。ただ、人間の経験的基盤に基づいて個体が均質な集合で存在するときは、少しくらい大きめの個体でも連続体化が可能になる。3.1.で紹介した fish, sheep の例はまさにそうである。それらは形が有界であるかどうかは問題ではなく、どのように人間と関わるかがポイントになる。

さらに、測定類別詞の種類に関しても条件がある。個体の一つ一つ別個にではなく、均質なまとまりとして人間活動に関わるのであるから、当然重さや体積が単位となってくる。ただし、体積の単位はの場合かなり制限があり、(12)にある「2升のお米」といった使い方以外は例が挙げにくい。連続体化した個体を体積ではかるという経験があまり我々がないことと関係があるだろう。また、メートルといった長さの単位はこの連続体化のプロ

セスに関わってこないであろう。これらの重さ・体積の単位を表す場合に限って使用される「測定類別詞+個体名詞」は、連続体化された個体であるので、「測定類別詞+連続体名詞」と読み替えられている。よってこれもマッチング原則に反しない。

4. 考察：属性 Q

ここまで、一見マッチング原則に反しているような例をみたが、実は我々は個体の連続体化や連続体の個体化というような解釈を行ない、実際にはマッチング原則を守っているということを確認してきた。本節では、マッチング原則に違反している例について考察し、それが属性 Q であることを見ていく。

4. 1. マッチング原則違反

ここで議論を属性 Q の話に戻したい。今まで助数詞と名詞の間にはマッチング原則があるということを見てきた。名詞が個体か連続体かは客観的に決まるのではなく、経験的基盤に基づき柔軟に決定されることも見てきた。本章の議論の中心である、属性 Q という数量表現は、このマッチング原則に違反したときに起こるものであるというのが本章の主張である。

(13) 本章の仮説：マッチング原則に違反した助数詞と名詞のペアが属性 Q を形成する

もう一度例文を掲載する。

- (14= (1))
- a. 2000cc の車
 - b. 200 キロの力士
 - c. 8 畳の部屋
 - d. 1 リットルの瓶
 - e. 300m の東京タワー
 - f. 10 段の階段
 - g. 26 度の部屋

これらはすべて、「測定類別詞+個体名詞」というペアである。‘車’という名詞は‘1台2台’と分類類別詞で数えるべきところに測定類別詞‘2000cc’が使われている。‘力士’も同様に‘1人2人’と数えるべきところに‘200キロ’が使われている。3.2.2.では個体が連続体化される状況を見た。そこで見た条件が属性 Q には当てはまらないということをご

ここで確認したい。

均質な集合であり、さほど大きくなく、測定類別詞は重さや体積の単位であるというのが条件であった。ただし、3.2.2.でも指摘した通り、体積で連続体化した個体をはかるという経験が我々にあまりないので‘cc’‘リットル’を用いて‘車’や‘瓶’を連続体化してはかるという状況が想像できない。また、‘畳’‘m’など重さ・体積以外の測定類別詞を用いている場合は、さらに連続体としての認知がしにくい。さらに、3.2.2.で見た‘リンゴ’‘ピーナツ’‘米’などの例に比べて‘車’‘部屋’‘東京タワー’はサイズが大きい。もちろん、これらは客観的に比べられるものではないので、単純な比較はできないが、サイズの違いが歴然としている。よって、連続体化の条件をかりうじて満たせそうなのは「b. 200 キロの力士」である。

ここで我々の経験的基盤が必要になってくるが、‘力士’が均質な集合であると考えするには、‘200 キロ’では軽すぎるのである。むしろ、‘力士’が単体であるという想定が働き、連続体化を阻害することになる。

(15) 1 トンの力士

何かのテレビ番組で、工業用重機と力士の重さ比べをしたとする。そのときの‘力士’を大きな皿のような板にのせて(15)のように言えば、均質な集合として理解されるので連続体化が可能になる。同じことを‘リンゴ’を例に確認してみる。

(16) 3 個のリンゴ	分類類別詞+個体名詞
8 キロのリンゴ	測定類別詞+連続体化された個体名詞
150 グラムのリンゴ	測定類別詞+個体名詞 ← 原則違反

このように、重さの数値が連続体化できるかどうかの解釈にかかわってくるということをここで確認した。いずれにせよ、属性 Q はすべて個体としての解釈しかできずに、(11)で立てたマッチング原則に違反するのである

4. 2. 属性 Q の解釈

属性 Q は語用論的に意味の補完が必要であることを 1. で述べた。「2000cc の車」「200 キロの力士」「8 畳の部屋」「1 リットルの瓶」にはそれぞれ、「排気量」「体重」「広さ」「容積」などを補完しなければならないことが指摘されていた。これらの補完は一体どうして出てくるのであろうか。坂原(2002)では「ネコはネコだ」のようなトートロジの研究を行っている。そこではトートロジをそれ自体ではあまり意味がない文としながら、状況によってさまざまな解釈がなされることを指摘している。そこでは文について以下のような視

点が提示されている。

では、無意味な文は、どのように有意味になれるのか。文の解釈は、使用コンテキスト（先行談話、対話者の一般的知識や推論能力など）との相互作用により決まる。文はそれ自体としては伝えるべき意味のすべてを内包している必要はない。文は、意味構築の出発点にすぎず、コンテキストとの相互作用によって解釈を作り出すのに十分な情報さえ含んでいればよい。（坂原 2002 : 105）

本章で扱っている属性 Q も、これと平行して考えることができるであろう。‘車’に対して‘1台2台’というマッチングする助数詞を使わずに、‘2000cc’という mismatch な助数詞が使われた際、コンテキストとの相互作用によって解釈がなされ、「排気量」という補完がなされることで、文の意味が構築されるのである。Mismatch な助数詞と名詞をなんとか解釈しようとするところから、「排気量」といった補完が作り出されるとも言える。トートロジはそれ自体で意味のない文とされているが、属性 Q も（補完がなくて）それ自体では意味がわからない文という点が共通している。

言語の意味は、単に文法によって伝えられるようなものでなく、かなりのものがその場で作られる。このような意味の見方にとって、コピュラ文やトートロジのような、それ自体、さほど意味を持たない言語形式が、どのような意味構築を引き起こすか、それがどのような背景情報をもとにしているかを研究することは、きわめて興味深い。（坂原 2002 : 133）

コピュラ文や、トートロジが挙げられているが、属性 Q も同様に、意味がその場で作られ補完されることでコミュニケーションが成立している。その背景にあるのは、マッチング原則という、個体には数を表す助数詞、連続体には量を表す助数詞、という 2 種類の助数詞の使い分けであることを確認してきた。補完なしでは成立できない属性 Q があることで、逆に日本語においても、個体と連続体は区別されているということを確認できるのである。

4. 3. もう一つのマッチング原則違反¹⁴

ここまで見てきたマッチング原則違反は、先行研究で属性 Q とされる例と関わってくる「測定類別詞+個体名詞」の組み合わせのみを対象としてきた。しかし、マッチング原則違反は「分類類別詞+連続体名詞」というもうひとつのパターンが存在する。

- (17) a. 避難所に支給されたこの大鍋で 200 人のカレー を煮込むことができます。
- b. すっぼんの生き血が高級なのはその量の少なさによる。3 匹の血 を絞ってもこれだけしかない。
- c. モンゴルの民族衣装はたくさんの布を使う。これだけあっても、3 着の布 を取るのがやっつとであろう。

(17) a. では、‘カレー’ という連続体に、「200 人の人間が食べることができる」という属性を付与しているといえる。また、b. では「3 匹のすっぼんから抽出される」という属性、c. は「3 着の民族衣装を作るに足りる」という属性を、それぞれ ‘血’ や ‘布’ に付与している。こう考えるとこのタイプの表現も (13) の仮説から属性 Q に入れてもかまわないであろう。ただ、今まで属性 Q といえば「200 キロの力士」のような「測定類別詞+個体名詞」の例だけが取り上げられていたのはどうしてであろうか。

まず、連続体は我々の生活において数量を表現する際、個体化されている場合が多く、わざわざ連続体として存在しているものに属性を付与するという状況が設定しにくいということが挙げられる。また、「200 キロの力士」の場合は、「体重が」という読み込みだけで解釈が可能であったが、(17) の例文はどれも読み込む情報量が多い。よってかなり文脈や状況の助けが必要となり、こういった例は使用しにくくなるのであろう。結果として (17) a. のような状況だと、「200 人分のカレー」といった表現が優先され、このタイプの属性 Q は避けられることになる¹⁵。

5. 個体と連続体の認識

ここで少し視点をマクロにとってみたい。本章では英語の例からはじめて日本語について議論するという形で、個体・連続体という対立を見てきた。世界の言語を見渡すと、可

¹⁴ このセクションは大森文子先生（大阪大学言語文化研究科）のご助言を基に展開している。例文の一部も先生に作っていただいたものである。

¹⁵ 「3 人の知恵で、難局をなんとか乗り切った」に使われるような抽象名詞も連続体名詞の延長として考えられるので、下線部を属性 Q に含めてもかまわないのではないだろうか。ただ、こういったタイプに関しては本論文では十分に扱えていない。

算・不可算の区別をもつ言語（以下、名詞類別型言語）と類別詞を持つ言語（以下、数量詞類別型言語）に大別できて、それらは相補分布しているということが、松本（1993）では述べられている。

もしある言語が名詞類別型に属するならば、必ず名詞に義務的な数表示があり、逆に、もしある言語が数量詞類別型に属するならば、その言語は名詞の義務的な数標示を欠いている。（43）¹⁶

つまり、世界には英語のように名詞でモノを類別する名詞類別型と、類別詞でモノを類別する数量詞類別型¹⁷の言語があるということになる。それらの特徴を以下に示す。

5. 1. 英語話者・日本語話者の認識

一般に英語のような言語は、名詞に可算・不可算の区別があるので、有形と無形の対立が明確であるのに対し、名詞に可算・不可算の区別がない言語ではすべての名詞を物質的にとらえていると言われている（Foley1997 など）。つまり、可算・不可算の区別は、3.1.でも述べたように、モノが有界であるか非有界であるかといった形に関する情報を有しているということである。日本語は名詞に可算・不可算の区別がないので、確かに「りんご」と「水」を形態的・統語的に区別する方法はなさそうに思える。よって、モノが形を持つかどうかについては注意をしていないかのように見える。これを拡大解釈すると、英語のような名詞類別型言語を話す話者と日本語のような数量詞類別型言語を話す話者とではモノの捉え方が変わってくるのではないかという予測が立つ。

実際に、可算・不可算の区別を持つ言語と持たない言語ではモノの捉え方が違うという前提で様々な実験が行われている（Lucy1992, Imai and Gentner1997 など）。実験の前提として、モノの有界・非有界という区別は言語と関わりなく存在するのか、それとも言語の影響によって区別が出てくるのかという議論があり、それを証明するための実験が行われている。

¹⁶ “Very many languages make use of what are called classifiers for the purpose of explicit individuation and enumeration and have no distinction of singular and plural in nouns.” (Lyons1977 : 227) という同様の指摘も見られる。

¹⁷ 2.節で扱った集合類別詞や計量類別詞という分量語彙は、「a pair of」「a pile of」「a glass of」「a slice of」などのように英語にも存在する。これはすべての言語に存在する語彙であると指摘されており、一般に数量詞類別型の言語というのは、分類類別詞（個別類別詞）を持つかどうかによって決定されるのである。

その中でも日本語を扱っている Imai and Gentner(1997)の実験は日本語話者と英語話者の比較を行うことで、数量詞類別型言語話者と名詞類別型言語話者はどのようにモノを見ているのかということを証明した。それは新奇な単語 (a novel word) を与えて、その単語がそれぞれの話者にどのように拡張されるかをみるものである。結果だけを先に言うと、複雑な形、非有界的な素材に関しては日英で判断に差があまりないが、単純な形のものに関しては、差が出た。それは日本語では性質に注目して語の拡張が見られたのに対し、英語では形に注目して語の拡張が見られた。そこから考察として、個体と連続体を区別する存在論的な認識は普遍的であるとする考えを支持した上で、言語構造がものの分類に影響を与えることも認めるという、両方の意見を認める結論になっている。本論文の立場は、日本語には個体と連続体を形態・統語的に区別はしないが、意味的には区別するというものである。

しかし、Imai and Gentner(1997)では、日本語はその類別詞による意味的な区別があいまいであるという主張をして、日本語の類別詞がモノ (object) と物質 (substance) の区別に関わるという考えに疑問を投げかけている。ここでいうモノ・物質というのは、本章でいう個体・連続体に置き換えてもかまわない。その具体例として、‘個’‘枚’というモノを表す類別詞が、‘バター’や‘粘土’などの物質に使われていると指摘している。しかしこれは、3.2.1.で連続体の個体化として述べたように、個体・連続体の区別は人間の経験的基盤に基づいており、‘バター’や‘粘土’は個体性のあるものとして我々が認識しているだけのことである。英語の例のように‘犬’は可算で‘羊’は不可算になると全く同じであり、むしろ日本人から見れば、‘チョーク’を不可算にしてしまう英語の発想がわからない。

確かに日本語においては、個体と連続体を形態・統語的に区別することはできない。しかし、意味的には区別できるということを本章では見てきた。属性 Q という、助数詞と名詞とのミスマッチが背景となることができる表現があり、これは日本語話者も個体と連続体の区別を行なっているということの証拠である。

ここで気になることは、数量詞類別型の言語はすべて、個体と連続体を形態・統語的に区別することができないのかということである。日本語の助数詞はほとんどが中国語起源であることが指摘されている。

日本語のいわゆる「助数詞」は、大部分が中国語の類別詞と数量詞を区別せず

にそのまま「助数詞」として借用したものである可能性が大きいのである。(橋本 1978b : 84)

中国語の助数詞の使用状況を少し確認したい。

5. 2. 中国語の数量表現と中国語話者の認識

中国語は日本語と同じように数量詞類別型言語に属する。ただ、日本語と違うところは、数詞とともに使われるだけでなく、指示詞（这〈これ〉, 那〈あれ〉）で名詞を指示するときにも、助数詞を付加しなければならないという点である。一般に数量詞類別型言語では助数詞が指示詞とともに使われることもあるという指摘はされている（井上 2003, 水口 2004a）。中国語では「指示詞+助数詞+名詞」という構造になっている。橋本（1978b）では、中国語の助数詞を類別詞と数量詞（本章でいう分類類別詞と測定類別詞）にわけて、それぞれの違いを指摘している。ただこれは、類別詞の意義を説明するためのもの¹⁸で、この違いを細かくは調べていない。ここで確認したいのは、分類類別詞には指示詞が付加できるが、測定類別詞には付加できないという事実である。

- | | | |
|------|------|--------|
| (18) | 路 | みち |
| | 一条路 | 一本の道 |
| | 这条路 | この道 |
| | 这一条路 | この一本の道 |

- | | | |
|------|------|---------------------|
| (19) | 肉 | にく |
| | 一斤肉 | 一斤のにく ¹⁹ |
| | *这条路 | この斤のにく？ |
| | 这一斤肉 | この一斤の肉 |

橋本（1978b）

分類類別詞と測定類別詞を指示詞に付加して、ネイティブチェックを行ってみると、必ず非文になるわけではないが、測定類別詞はすわりが悪い。

(20) 分類類別詞

- | | | |
|---|-------|-----------|
| a | 这对双胞胎 | この（組，対）双子 |
| b | 这只猫 | この（匹）猫 |

¹⁸ 類別詞とは後ろに来る同音名詞を区別するためのものであり、数量詞は数量の単位を表すのみであるとしている。

¹⁹ 斤というのは 500 グラムにあたる中国語の測定類別詞である。

c 这条狗 この（匹）犬

(21) 測定類別詞

a ?这尺布 この（長さの単位）布

b ?这斤肉 この（重さの単位）肉

c *这升水 この（液体の量の単位）水

(21) の例では、橋本（1978b）が非文としている「这斤肉」という例を再掲しているが、ひとかたまりとして売っている肉を指示するなら使用が可能であるという指摘もあったので、?マークにしてある。また、a の例にしても明らかにある長さで切られて売っている布なら使用ができるという指摘があった²⁰。これらの指摘は、連続体であっても個体として捉えるなら指示詞が付加できるということになるであろう。基本的には指示詞に付加できるのは分類類別詞であるという点、測定類別詞であっても指示対象が個体化されていれば指示詞が付加できるという点において、中国語は個体と連続体の区別が統語的にされていることになる。

もうひとつ中国語の例を出す。上にも述べたが、「数+類別詞+名詞」という構造も中国語にはある。この構造においても、個体・連続体で統語的な違いが存在する。

分類類別詞

(22) 我买了3本书。：本を3冊買いました。

(23) 我吃了4个苹果。：りんごを4つ食べました。

測定類別詞

(24) 我买了3公斤（的）猪肉。：豚肉を3kg買いました。

(25) 我喝了2升（的）牛奶。：牛乳を2リットル飲みました。

分類類別詞を使用する際は、数+類別詞（3本〈3冊〉）と後続の名詞（书〈本〉）の間に、なにもマーカを入れてはいけない。しかし測定類別詞が使われるときは、後続する名詞との間に‘的’という日本語の‘の’にあたるマーカが入っても入らなくても可能である。このように、中国語の場合、個体・連続体の区別が統語的にはっきりとわかる。ここまで見てきた中国語の例から、数量詞類別型の言語はすべて同じというわけではなく、個体・連続体を統語的に区別するものもあるのである。つまり、中国語は、英語のようにはっきりと名詞で個体と連続体を区別しているわけではないが、類別詞の付加に関わる制約

²⁰ これらの例は、大阪大学言語文化研究科所属の複数の方々にネイティブチェックをしていただいた。

によって区別していることがわかる。よって 5.1. で見たような個体・連続体の区別に関わる実験をすれば、中国語話者は日本語と英語の中間に位置する結果がでるだろうという予測が立つが、これはさらなる検証が必要だろう。

6. おわりに

属性 Q を見ることで、日本語では意味的に個体と連続体を区別していることがわかるということを主張してきた。よって、助数詞（類別詞）を 2 分類することは日本語においても意味がある。また、日本語には形態的・統語的に個体と連続体を区別する方法がないが、数量詞類別型の言語の中でも、中国語のように統語的に区別しているものもあるということを見てきた。ただ、日本語には数量表現に統語的なバリエーションがあり、それらがどういった使い分けをなされているのかを明らかにしていくのが本論文のテーマである。次章からその中心となるテーマについて論じる。

第4章 NCQ型数量表現

ここで扱うNCQ型とは、数量詞遊離構文、数量詞連結構文、数量詞の副詞的用法などと言われているものである。「学生ガ 3人 反対シタ」のような並び方になるタイプがNCQ型である。本章では先行研究を概観して、このタイプに関わる問題点をまとめた上で、NCQ型が数量表現の基本形（無標の数量表現）であるという主張を行う。この語順がどうして基本形になるかということについては、焦点化という説明を用いる。

1. 先行研究

第2章で品詞論の流れを概観したが、数量詞の品詞を決定するにあたって、数量詞とは一体どういったものであるのかという議論がなされてきた。国語学では、数量詞の二面性を指摘しているものもあった。

…意味上数詞が、その諸用法の如何にかかはらず、数えられる対象に対する数え作用の意味を持つ限りにおいて副詞性の半面と、それ自身数えられた結果の数としての対象的な意味をもつ限りにおいて体言性の半面とを、そのいずれに一層傾向するとしても、つねにもつことである。(森重 1958 : 20 原文は旧漢字)

また、「数量詞が名詞性と副詞性の二重性を持つことの意味を解明することが数量詞連結の現象を解明する本質的なカギとなる(堀川 2000 : 44)」というように、この二面性が、NCQ型数量表現の意味を解明するポイントになると指摘しているものもある。数量詞の名詞性を基本形と考えると、副詞的なNCQ型は派生形になる。一方、数量詞を副詞的なものと考え、NCQ型は基本形になる。先行研究を概観してみると、意味的にはNCQ型を基本形としつつも、形式的には派生形であると見る対立があることがわかる。1.1.ではその対立を確認したい。また、NCQ型には格制限があり、その成立条件にかかわる議論も1.2.で紹介する。1.3.で本研究の立場と本章の目的を述べる。

1. 1. NCQ型数量表現は基本か派生か

1. 1. 1. NCQ型が基本形であるとする見方

意味的にはNCQ型が基本形であるという指摘がされている(三上 1953, 川端 1967, 池

上 1971b, 角田 1991, 奥津 1996a, 加藤[重]2003 など)。これらの研究では Q の NC 型と NCQ 型を比較しているものや, Q の NC 型と NQC 型と NCQ 型を比較しているものなど比較対象はさまざまであるが, どれも共通して NCQ 型を基本的なものと捉えている。

- (1) a 昔ある所に[子豚三匹]が 住んでいました。(NQC 型)
- b 昔ある所に[三匹の子豚]が 住んでいました。(Q の NC 型)
- c 昔ある所に[子豚]が[三匹]住んでいました。(NCQ 型) 奥津 (1996a)

このように例文を挙げて奥津は, Q の NC 型は「いささかバタくさい」, NQC 型は「いささか固い」, NCQ 型は「最も自然な文」と述べている。用語は違うが, 加藤[重]では NCQ 型を無標と呼んでいる。確かに三つの例を並べてみると, 日本語母語話者の感覚としては, NCQ 型が基本的なものであると考えるであろう。ここでは, NCQ 型は数量表現として基本形であるという言い方をしたい。これは数量表現として無標であるといった程度の意味であり, 他の形式が基本形から派生されると考えるわけではない。

1. 1. 2. NCQ 型は派生形であるとする見方：数量詞遊離

一方, 形式的には NCQ 型を派生形であるとする見方がある。第 2 章の 2 節で述べたように, 数量詞移動という議論がそうである。この NCQ 型数量表現というのは他のタイプから移動してできたものであると考えられていた。そういった立場の研究者に NCQ 型は数量詞遊離 (quantifier floating) 構文と呼ばれてきた。2 章で見た柴谷, 神尾, 奥津の指摘は, 若干の違いはあれども何かから NCQ 型が派生されると考える点において全く同じであった。

NCQ 型は他から移動してできたのであるから, そこには様々な制約があるという発想から, 数量詞の遊離条件についてたくさんの議論がなされている。一般にが格・を格では NCQ 型の文は成立し, ほかの格では成立しにくいとされている。

- (2) 学生が 5 人来た。
- (3) 学生を 5 人招待した。
- (4) ??彼は友達に 2 人プレゼントをあげた。
- (5) ??彼は犬と 2 匹散歩をする。

それ以外の格では少数の例が報告されているが, (6) (7) の例もが格・を格の例に比べると, やはり許容度は落ちるのではないだろうか。

- (6) 会社訪問で地元の企業に 2 つ行ってきた。
- (7) 僕は元旦に教え子から 5 人年賀状をもらった (高見 1998a)

しかし、一般にこれらの許容度が低いのはなぜか、その成立に関わる条件は様々な立場で述べられている。それらの条件を宇都宮（1995a）は「主語・目的語からの数量詞は遊離できる」と一般化している。ただし、主語・目的語といったものが、が格・を格といった表層格の問題であるのか、主語・目的語といった文法関係の問題であるのかは議論が出ている。前者は柴谷（1978）、後者は益岡（1982）などが挙げられる²¹。本章では便宜上、「格助詞の制限」とか「が格・を格以外は使用しにくい」といった表現を用いるが、NCQ型の成立にはなんらかの制限があるということを述べているだけで、この制限が表層格の問題だと考えているわけではない。

1. 2. NCQ型の成立条件

数量詞移動を認める、認めないに関わらず、このNCQ型の成立に関わる条件として他にも様々な立場から議論がなされている。Miyagawa（1989）はc統御という概念で数量詞遊離を統語論的に分析している。そこでは「主語を修飾する数量詞は、目的語の後ろには置かれない」、「項（argument）からの数量詞遊離は可能であるが、付加詞（adjunct）からは不可能である」などが主張されている。高見（1998abc）ではMiyagawa（1989）に批判を加えた上で、機能論的分析を加えている。そこでは、「数量詞遊離を許す名詞句は、その文の主題として機能しうるものでなければならない」と主張し、「重要な情報は動詞の直前に現れる」という日本語の文の情報構造について主張した上で、「数量詞の移動もその情報構造を遵守しなければならない」としている。三原（1998abc）もMiyagawa（1989）に批判を加えた上で、動詞を4種類に分けて数量詞連結構文が成立しやすいものから成立しないものまで4段階に分けている。その4段階に区分する基準は動詞の意味に内在化されている完了性・未完了性といったアスペクトの観点や、動作の終了時点における変化結果性である。それらの分析に語彙概念構造（LCS）を用いて理論的なサポートを行っている。しかし、この三原の分析結果を受けて行った飯田（1998）によるアンケート調査の結果はこの4段階をあまり反映していなかった。つまり三原が成立しやすいとした文を必ずしも日本語母語話者が認めているわけではないということである。ここでは、たくさんの先行研究があるにもかかわらず、まだ決定的な主張が出ていないことを確認したい。

1. 3. 本研究の立場と本章の目的

1.1.1. で見たようにNCQ型を基本形と見るか派生形と見るか二つの立場がある。意味を扱

²¹ ここではこの議論を詳しくは扱わないが、塚本（1986）に詳しい。そこでは「文法関係説」「格助詞説」「文法関係・格助詞説」の三つに分けて先行研究を分類している。

う本論文の立場は、1.1.1.で紹介した先行研究と同じ立場で NCQ 型を基本的なものであると考える。また、形式的にも NCQ 型は基本形であることを主張したい。第 2 章で引用した通り、現在の生成文法では数量表現の移動についてはっきり否定しているものもあり（三原 1994 など）、本研究でも移動という見方はしない。しかし、2.1.で詳しく見ていくように、NCQ 型が派生形であるという見方も全く根拠のないものではない。さらにこの派生形と見る立場には少なからず英語の影響があるということを 2.2.で論じた後、英語以外のデータを見ると NCQ 型は基本形であることを示したい。第 3 章で述べたように、世界の言語は名詞類別型と数量詞類別型に分けられ、この 2 つは相補分布しているという指摘があった。本章では数量詞類別型に含まれる言語を集めて、日本語の NCQ 型は決して特異なものではないということを指摘する。もちろん、これらの例をいくら集めても状況証拠でしかないのであるが、今まで英語の視点に偏りすぎていたことを考えると、ここで数量詞類別型言語のデータを挙げておくことは意味があると考えられる。その上で、なぜ NCQ という順序になるのかという議論を、機能的分析を用いて行ないたい。そこでは 1.2.で見た成立条件に関わる議論も行なう。

本章の目的：日本語以外の数量詞類別型言語のデータと機能的分析から、日本語数量詞の NCQ 型は数量を表す基本的な形式であることを主張する

2. 「英語標準説」と数量詞研究

2. 1. NCQ 型を派生と考える理由

数量詞遊離という名称からもわかるように、NCQ 型は何かから遊離してできたものであるという考えがあった。この発想の背景には、数量詞とは名詞を修飾するものであるという考えがあるように思われる。例えば、塚本（1986）では、(8) の NCQ 型文を挙げて、「数量詞『3 人』が副詞的な役割を果たしているが、意味的には名詞『友達』を修飾している表現である。（塚本 1986 : 34）」と説明している。

(8) 友達が三人私の家に来た

意味的には名詞を修飾するというこの発想はどうして起こるのだろうか。これについては 2.2.で詳しく論じたい。ここでは「名詞を修飾するのが数量詞である」という発想が研究者の間に存在し、「数量詞が名詞修飾の形をとらず違う形で出現する」というのが NCQ 型に対する興味の的となってきたことを確認したい。そういう発想では、当然 NCQ 型は派生

形ということになる。

NCQ 型を派生形と考えるもう一つの理由は、NCQ 型には格助詞に制限があるということが挙げられる。本章の 1.1. で述べた通り、NCQ 型の C の部分には、が格・を格以外は使用が制限される。それに対して Q の NC 型は格助詞に制限がない。より制限の少ない方が無標であるという考えから、こちらを基本形だと考えるようになったのではないだろうか。

2. 2. 英語の影響とその問題点

ここでは、2.1. のように NCQ 型を派生形であるとする発想の背景には少なからず英語の影響があるということを述べたい。2.1. では、NCQ 型を派生形と見なす理由に、「数量詞は名詞を修飾するものである」という発想と格助詞の制限の二つがあることを述べた。

数量詞は名詞を修飾するものであるという発想の背景を探るにあたり、Q と N の意味的な関係を考えたい。「学生ガ 3 人反対シタ」という例で Q と N の関係を見ると、Q の‘3 人’は‘学生’の数を数える助数詞を使っており、Q と N はセットであるという認識が生まれる。そういった発想から Q と N がセットで使われる「3 人の学生ガ反対シタ」という形を基本的なものとして考えてしまうのである。確かに助数詞の選択は名詞の種類によって決まるわけであるから、Q と N の対応関係は存在する。しかし、数というものを考えるとき、例えば「ケーキを 3 個食べた」という文において、‘3’はケーキというモノの数であると同時に、食べたというコトの数でもある。だから、一概に Q と N だけが対応しているのではなく、Q は述部とも関連があるのである。第 2 章で見たように多くの研究が数量詞の副詞性を指摘していた。

Q は N を修飾するのか、動詞を修飾するのか、この議論において前者が優勢なのは、英語の影響であろう。2 章での議論と重複するが、英語では周知のように、‘quantitative adjectives’, ‘numeral adjectives’ のように、はっきりと数詞が形容詞であると明言している。この用語をそのまま取り入れて、日本語数量詞を形容詞に分類していた研究者がいたことも既に見た。Martin (1975) でも、何の理由もなしに日本語の Q の NC 型を‘Basic’としている。また、数量詞移動という議論自体が英語からはじまった生成文法における議論であることを考えると、日本語の数量詞研究は少なからず英語を基準として行われてきた面があると言える。2.1. でみた格助詞の制限に関しても、英語の数詞には見られない現象であるからこそ日本語の特徴として多くの研究がなされてきたのではないだろうか。英語を基準として他言語をみることを角田 (1991) では「英語標準説」と呼び、研究者の間で

もかなりこれを信じている人がいると指摘している²²。

第 3 章で述べたように、世界の言語は名詞類別型と数量詞類別型に分けられ、この 2 つは相補分布しているという指摘があった。名詞類別型は、性・数のマーカ―を名詞が持つ。性というのは名詞の分類を行なっているというカテゴリー化の観点で見ると、日本語の助数詞に対応することを第 2 章で指摘した。また、数のマーカ―が個体と連続体の区別を行なっていることを第 3 章で確認した。それに対して日本語のように数量詞と名詞との組み合わせで個体と連続体の区別を行なう数量詞類別型は名詞が持つ情報量が少ない。名詞類別型における性・数といった情報を数量詞が担っていることになる。そう考えると、数量詞類別型と名詞類別型の言語では明らかに名詞が持つ情報量が違うのである。よって、情報量の多い名詞に数情報のみを付加する英語の数詞が形容詞だからといって、日本語の数詞も同等に考えるという発想は的を得ていないのではないだろうか。次節では様々な数量詞類別型言語の例を見ていく。

3. 数量詞類別型言語

2.1.で NCQ 型を派生形と見なす理由に、「数量詞は名詞を修飾するものである」という発想と格助詞の制限の二つがあることを述べた。ここでは他の言語データを分析するに当たり、この二点に注目する。つまり、連体修飾表現と数量表現は同じ形をしているのか、格助詞に何らかの制限はあるのか、ということである。連体修飾表現と数量表現が違う語順をしていれば、それは「遊離している」という表現で表す。

3. 1. 朝鮮語

ここでは日本語と朝鮮語（韓国語）の対照研究を行なっている塚本（1986）の議論から例文を紹介したい²³。朝鮮語は基本的に日本語と全く同じで、数量詞が文中の様々な位置に現れる。つまり、韓国語も数量詞が遊離するのである。

²² 角田（1991）は、日本語は特殊であるとする「日本語特殊説」と上記の「英語標準説」は誤解であることを類型論的に論じている。「英語標準説を信じる人は、言語の研究者の中にもかなり大勢いるらしい。（角田 1991：225）」と述べて、その誤解の原因は、生成文法の影響や西洋志向であると指摘している。

²³ 例文の許容度も塚本（1986）の指摘のままである。

(9) 세 명의 친구가 우리 집에 왔다. → 3人の友達が私の家に来た。

3 人の 友達が 私の 家 に 来た

친구가 세 명 우리 집에 왔다. → 友達が 3 人私の家に来た。

友達が 3 人 私の 家 に 来た

친구 세 명이 우리 집에 왔다. → 友達 3 人が私の家に来た。

友達 3 人が 私の 家 に 来た

塚本 (1986)

さらに日本語と同じ点として、朝鮮語において NCQ 型には格助詞に制限がある。日本語で格助詞が‘が’や‘を’にあたる (10) (11) の例文では NCQ 型が朝鮮語でも許容される。一方、日本語の‘に’や‘と’で表される例文 (12) (13) では、朝鮮語の NCQ 型も使用できない。ここでは NCQ 型の成立可否を確認するのが目的であり、それぞれの語に訳はつけずに見ていく。

(10) a 세 명의 생도가 결석했다. → 3人の生徒が欠席した

b 생도가 세 명 결석했다. → 生徒が 3 人欠席した

(11) a 아버지는 네 병의 맥주를 마셨다. → 父は 4 本のビールを飲んだ

b 아버지는 맥주를 네 병 마셨다. → 父はビールを 4 本飲んだ

(12) a 그는 두 명의 친구에게 돈을 빌려주었다.

→ 彼は 2 人の友達にお金を貸した。

b *그는 친구에게 두 명 돈을 빌려주었다.

→ ??彼は友達に 2 人お金を貸した。

(13) a 동생은 매일 두 마리의 개와 산보한다.

→ 弟は毎日 2 匹の犬と散歩する。

b *동생은 매일 개와 두 마리 산보한다.

→ *弟は毎日犬と 2 匹散歩する。

塚本 (1986)

3. 2. 인도네시아語²⁴

ここではインドネシア語の数量表現を見ていく。日本語・朝鮮語のように 3 パターンあるわけではないが、インドネシア語も数量詞が文中で 2 箇所に出現可能である。(14) (15) のように、QN の順と NQ の順の 2 パターンである。‘を格’‘が格’の格助詞がないので

²⁴ インドネシア語に関しては、スリ・ブディ・ルスタリ氏 (東京外国語大学院生)、布尾勝一郎氏 (大阪大学院生) にご協力をいただいている。

NQC 型と NCQ 型が区別できない。日本語で‘を格’‘が格’にあたる例文では、それぞれ 2 タイプの数量表現が可能である。

(14) 日本語の‘を格’に相当する例

- a. Saya beli tiga buah buku.
私 買う 3 冊 本
- b. Saya beli buku tiga buah.
私 買う 本 3 冊

(15) 日本語の‘が格’に相当する例

- a. Tiga orang mahasiswa datang.
3 人 学生 来る
- b. Mahasiswa tiga orang datang.
学生 3 人 来る

インドネシア語の連体修飾の語順は (16) のように後ろから前を修飾することになるので、

(14) a. (15) a.のように、QN という語順になる方は、数量詞が遊離しているということになる。つまり、本来名詞を修飾すべき語順にはなっていないことになる。

(16) インドネシア語の連体修飾

buku (yang) tebal → 厚い本

本 厚い

buku saya → 私の本

本 私

さらに、インドネシア語も格助詞に制限があることを見ていく。‘と格’や‘から格’が関わってくる例文では (17) (18) のように、2 パターンあるうちの片方しか使用できない。しかも、QN という遊離している方が許容されて、連体修飾と同じ語順である NQ の並び方はどちらも許容されなくなっている。

(17) 「(私は) 2 匹の犬と散歩した」

saya jalan-jalan dengan dua ekor anjing.

私 散歩する と 二 匹 犬

? saya jalan-jalan dengan anjing dua ekor²⁵.

犬 二 匹

²⁵ ネイティブの指摘は「ちょっと非文だけど、口語では使える」とのことである。

(18) 「(私は) 2 人の友達から手紙をもらった」

saya mendapat surat dari dua orang teman.

私 もらう 手紙 から 二 人 友人

*saya mendapat surat dari teman dua orang ²⁶.

友人 二 人

本来の連体修飾の語順である NQ という方に制限があるというのは、日本語や韓国語と大きく異なる点であるが、数量表現が複数ある点、格助詞によっては許容されない表現（語順）が存在する点など、日本語・韓国語との共通点は多い。

3. 3. ベトナム語²⁷

ベトナム語も数量詞があるが、語順は以下のように QN の順になる。

(19) 日本語の‘を格’に相当する例

Tôi mua 3 cuốn sách.

私 買う 冊 本

(20) 日本語の‘が格’に相当する例

Có 3 sinh viên²⁸ đến.

be 動詞 学生 来る

以下の例のように連体修飾をするとき、インドネシア語同様後ろから修飾する。それに対して数量表現の語順は (19) (20) のように QN であることを考えると、ベトナム語数量詞も遊離していることになる。

(21) ベトナム語の連体修飾

cuốn sách dày → 厚い本

冊 本 厚い

cuốn sách của tôi → 私の本

冊 本 の 私

今回調査した限りでは、格助詞による制限などは見つからなかったが、やはりベトナム語でも数量詞の遊離は確認できた。

²⁶ ネイティブの指摘は「使えるかどうかは微妙で、多分使えないだろう」とのことである。

²⁷ ベトナム語の例文に関しては、ブー・ティ・トゥ・タオ氏（大阪大学院生）にご協力をいただいている。

²⁸ ‘学生’のようにはっきりと人であることがわかる場合、‘人’にあたる助数詞は省略される。

3. 4. 中国語・タイ語²⁹

(22) 日本語の‘を格’に相当する例

中国語 我 买 三本 书。

私 買う 三冊 本

タイ語 súu nân sǔu sǎam lêm³⁰.

買う 本 3 冊

中国語の連体修飾は前から後ろを修飾するので、数量表現の QN とも一致する。タイ語は後ろから修飾するので、これもまた数量表現の NQ という順と一致する。ともに数量詞が遊離していないかのように見える。

(23) 中国語の連体修飾

我 的 书

私 の 本

很厚 的 书

厚い の 本

昨天 他 买 的 书

昨日 彼 買う の 本

中国語では連体修飾のときに、必ず‘的’というマーカーが入る。(23)の例をみるとわかるように、名詞、形容詞、動詞がそれぞれ連体修飾しているが、すべて‘的’というマーカーが入っている。ところが、数量詞の場合は絶対に‘的’を入れることができず、中国語学では数量詞は名詞を修飾するものではないと考えられている³¹。

(24) *我 买 三本 的 书。

私 買う 三冊 の 本

つまり語順だけ見ていると連体修飾の語順と QN という並びは同じように見えるが、‘的’が入るか入らないかで、数量表現は連体修飾表現と区別されているのである。中国語から数量詞を考察すれば、以下のようなになる。ここでは、「数量詞は名詞を修飾するものである」という発想がはっきりと否定されている。

²⁹ タイ語に関してはラダポーン・サイソンプーン氏（大阪大学院生）にご協力をいただいている。

³⁰ アクセント記号の表記の都合上，[w]は[u]で表記している。

³¹ 沈力先生（同志社大学文化情報学部）にいただいたコメントより。木村（2002）にも同様の指摘がある。

事物の量を数えるために用いる数量詞が一般に“的”を伴って名詞を修飾することができないという事実が示しているように (“*三本的书”), 数量は通常事物を区分限定するための基準にはなり得ない。事物を数え上げるという行為はそれ自体が事物の存在を認識し, 主張するものであって, 特定の事物の存在を前提にした上でそれに区分的限定を加え, その属性を規定するという性格のものではない。そのことは, “我的书”と“他的书”の対立が意味するところと“三本书”(本三冊)と“五本书”(本五冊)の対立が意味するところの違いを考えれば明らかであるし, … (木村 2002 : 12)

タイ語でも連体修飾に使われるマーカー ‘khɔɔŋ’ があり, これを数量表現に使用できないという点において中国語と同じである。

(25) タイ語の連体修飾

<u>nân sǔu</u>	<u>nǎa</u>		厚い本
本	厚い		
<u>nân sǔu</u>	<u>khɔɔŋ</u>	<u>chǎn</u>	わたしの本
本	の	私	

(26) *nân sǔu khɔɔŋ sǎam lêm³².

本 の 3 冊

ただし, タイ語の連体修飾のマーカー ‘khɔɔŋ’ は (25) のように名詞の連体修飾にしか使われないので, 中国語の ‘的’ とは本質的に違う。つまり, タイ語の数量表現に ‘khɔɔŋ’ が入らないからといって, 必ず連体修飾と数量表現が区別されているとは言いがたい。まだタイ語の数量詞は形容詞として解釈できる余地があるのである。現段階の調査ではこれ以上のことはわからないが, 更なる考察が必要であろう。

3. 5. まとめ

数量詞類型別言語の数量表現を概観してきた。今回は 5 ヶ国語しか扱えていないが, ある程度ははっきりした傾向が見えた。韓国語, インドネシア語, ベトナム語では連体修飾表現と数量表現は語順が逆になっており, 遊離していることが確認できた。中国語も連体修

³² アクセント記号の表記の都合上, [w]は [u] で表記している。

飾マーカ―‘的’の挿入可否を見ることで、連体修飾表現と数量表現がはっきり区別できることをみた。さらに、韓国語、インドネシア語には数量表現が複数あり、日本語同様、ある表現には格助詞の制限があることも確認できた。

このように数量詞類別型言語の視点から日本語を見れば、日本語数量表現の NCQ 型というのはさほどの注目には値しなかったのではないだろうか。少なくとも「数量詞は名詞を修飾するものである」という発想が今ほど定着することはなかったであろう。改めて数量詞研究における英語の影響が実感される。

4. NCQ という語順に関する考察

ここまで、「数量詞は名詞を修飾するものである」という発想が、必ずしも正しくはないということを主張してきた。しかし、ここまでの議論だけでは、どうして NCQ という語順になるのかという説明はできていない。本節では、日本語の数量詞が動詞の横に出現する理由を先行研究から考察する。

4. 1. 数量詞の動的な性質による説明

木枝 (1937) では、数詞 (本論文における数量詞) というもの自体が動的な性質を持っていると述べている。この動的な性質があるからこそ、基本形の NCQ 型は動詞の横に数量詞が来ているのだということになる。

数詞は事物の数量を量り、順序を数へる語である。この数量を量り順序を数へるといふことは動的の性質を帯びた作用である。机と本と紙とを並べておいて、順次に「机」「本」「筆」「紙」と称へて見たところで、これは名詞を列挙したのにすぎないのであって、其処に何等の文法的意味もない。然るに、人間を並べておいて、順次に「一人」「二人」「三人」「四人」といふ時には、その人間の数量を数へるという動的意義が働くのである。(木枝 1937 : 101 原文は旧漢字、太字部分は原文のまま)

確かに数量を表現するときに、数えるという動作と関わってくることはある。

(27) a あ、鳥が一羽、二羽、三羽飛んできた。

b 羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹…

(尾谷 2002)

これらの例は、発話の現場と数を数える現場が一致している場合である。Q は動的な性質

を持っているがゆえに NCQ という副詞的な位置に落ち着くとされているのである。このように、Q は、助数詞により名詞との関係も持ちつつ、その動的な性質ゆえに動詞との関係も持っていると言える。

確かに NCQ 型は動的な使用が見られる。絵描き歌の例を以下に挙げるが、絵描き歌では NCQ 型のみが使われている³³。

(28) ♪ 六月六日にユーフォーが、あっちいってこっちいっておっこちて、おいけが二
つできました… (ドラえものの絵描き歌)

♪ 棒が一本あったとき、はっぱかな、はっぱじゃないよかえるだよ…
(こっくさんの絵描き歌)

4. 2. 焦点化による説明

このタイプの数量表現を情報構造という観点から分析している研究がある (大木 1987, 高見 1998abc, 高見・久野 2002, 東郷 2005, Downing1996)。それらの研究で共通していることは、NCQ 型において、Q は常に新情報であるということである。Q の NC 型においては必ずしも新情報である必要がないが、NCQ 型はすべて新情報であると指摘している。東郷 (2005) の指摘を紹介する。

- (29) a 一本の鉛筆をください
b 鉛筆を一本ください

文房具屋で (29) a のような言い方はせずに b のような言い方をするのはなぜかということ
を解説している。

文房具店で買い物をするとき、相手に伝えなくてはならない重要な情報は「何を」「どれだけ」である。つまり、品名と数量が大事な情報である。文中で特に重要な情報を担う項目を言語学では「焦点」と呼んでいる。文房具店の場合では「品名」と「数量」はどちらも重要な情報であり、両方とも焦点になっていなくてはならない。ところが、「一本の鉛筆」という大きな名詞句にしてしまうと、「鉛筆」は焦点になるが「一本」は焦点にならない。だから「一本」を取り出して後ろに回して「鉛筆を一本下さい」と言うのである。(東郷 2005 : 73)

³³ 35 の絵描き歌から 55 例の数量表現を集めたが、Q の NC 型は 1 例のみであった。この絵描き歌を動的な表現の例として挙げるというアイデアについては大森文字子先生 (大阪大学言語文化研究科) のご助言によるものである。

以上のような説明を加えた後で、

(A) 数量表現は文中で焦点として働く

(B) 数量表現を焦点として働かせるには、大きな名詞句から出して後ろに置く

という 2 点にまとめて、フランス語でも数量は焦点化されるとしている。これは一般の読者向けに書いたものでかなり丁寧に説明がしてあるが、指摘している内容は非常に興味深い。1.2. でみた高見の一連の論文でも同様に、NCQ という並び方の Q の位置は日本語において焦点にあたるという主張をしている。動詞の横は焦点であるから、NCQ という語順になるのであるというのがこれらの研究の指摘である。

4. 3. 考察と仮説

4.1. と 4.2. で見てきた NCQ 型に関する指摘は、決して矛盾するものではなく、むしろ同じことを別の側面から述べている。数量詞が動的であるという側面は確かにあり、それゆえに NCQ 型という語順になり、NCQ 型が動的な使用をされているというのは 4.1. で見たとおりである。また、日本語において NCQ 型を使うと Q に焦点が当たるといってもその通りであると考えられる。あるセンテンスにおいて、数量詞を動的に表現することとは、その部分を生き生きと描くことであり、焦点化しているということと同じことである。少なくとも、4.1. と 4.2. の指摘は矛盾するものではない。本章では、動的に描くことは焦点化するという操作の別の側面であると考えられる。また、Q の部分を焦点化して伝える形式が NCQ 型であるということは、数量を伝えるための基本形であるという本章の主張と同義である。

(30) 本章の仮説

: NCQ 型は数量表現の基本形であり、Q を焦点化した形式である

5. NCQ 型の成立条件に関する考察～格助詞の制限

4. 節では、どうして NCQ という語順になるのかという議論を行なったが、Q を焦点化するという主張だけでは、どうして焦点化するのに格助詞の制限が出てくるのかという疑問が残ってしまう。ここでは、4. 節の主張をもとに、格助詞の制限について議論する。

5. 1. 平行する現象

数量表現の NCQ 型だけに限らず、格助詞の中でもが格・を格だけ振る舞いが違うという現象はたくさんある。ここではまず、それらの現象を見ていく。

まず、主題化について見てみたい。‘は’によって主題化する際、格助詞が残る場合と消える場合があることはよく指摘されている。

- (31) 太郎は大阪へ行った。
- (32) 花子は太郎が呼んだ。
- (33) 京都（に）は清水寺がある。
- (34) 東京からは新幹線が便利だ。
- (35) 大阪へは新幹線が便利だ。

ここでは細かい議論は省略するが、主題化する際に、‘は’と共に残る格助詞と消えてしまう格助詞があり、が格・を格は後者になるということを確認したい。ここではに格は微妙な立場である。必ず消えるわけでもないし、必ず残らねばならないわけでもない。

次に、‘の’による連体修飾を見てみたい。「連用の『N+格助詞』は『ノ』を伴って連体に転じるとき、ガ、ヲ、ニは消えて単に『N ノ』となる。カラ、へ、マデ、トなどは、それらの後ろにノが付く。デの場合はどちらもあり得る。(寺村 1980 : 149)」という指摘がある。

- (36) a 芥川ガ自殺シタ
b 芥川ノ自殺
- (37) a 大使ヲ誘拐スル
b 大使ノ誘拐 (寺村 1980)

が格・を格では「N ノ」という形で連体修飾ができるが、その他の格では「編集者へノ手紙」や「ビルマカラノ手紙」など助詞が残るという例を挙げている。ここでは「京都デノ会議」「京都ノ会議」という例を挙げて、で格はどちらでもありうるとしている点、「カナダノ叔父」「*カナダニノ叔父」という例を挙げて、に格は残らないとしている点が、上の主題化の議論と異なるところである。ただし、が格・を格が他と異なるという点においては主題化の議論と同じであり、に格・で格にはゆれがあるということになる。

また関係節化についても同様のことが言える。寺村はどのような助詞に伴われている名詞なら、ぬけ出して被修飾名詞として転出することができるのかを考える際にも、同じ問題が関わってくるとしている。

(38) コノ人タチガアノ記事ヲ書イタ記者デス。

(39) 主筆ハ彼ラガ書イタ記事ニ興味ヲ示シタ。 (寺村 1980)

(38) (39) のような例を挙げて、が格・を格のときは例外なく主名詞として転出できるとしている。井上 (1975) では「関係節化の可能性」を以下のように示している。

(40)

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 位置格 (に) > 位置格 (を) > 目標格 (へ) >
位置格 (で) > 助格 (で) > 基準格 (で) > 奪格 (で) > 所有格 > 起点格 > 随格 (と)

(井上 1975 : 54)

この順序においても、が格・を格はその他の格より上位に位置し、線引きができる。

他にも会話での省略という現象を見ても、が格・を格は特別である。このようにが格・を格の特別性は数量詞の NCQ 型だけに関わることではないのである。これらの一連の現象を踏まえた上で、が格・を格は他の格とどう違うかについて考えねばならない。寺村は上に挙げたような一連の格助詞の現象を取り上げて、助詞が担う意味関係の度合いが違うという指摘をし、「格(助詞)と述語動詞との結びつきの緊密度」の問題であるとしている(寺村 1980)。つまり述部と一体となって伝達内容の中心となるものが、が格・を格なのである。これは本章での主張、焦点化による説明と矛盾しない。

5. 2. 無標のフォーカス

が格・を格では NCQ 型が許容されるということであったが、実は詳しく見てみるとすべてのが格・を格に言える事ではないのである。大木 (1987) では数量詞はレーマの位置におかれることで、よりフォーカスになりやすくなるという主張をして、非常に興味深い指摘をしている。そこでは無標のフォーカスという概念を導入しているが、存在・出現を表す自動詞の主語、または他動詞の目的語がそれにあたるとしている。その上で収集した数量表現から統計的に、無標のフォーカスになっている名詞句が N となり、NCQ 型ができるという主張を行なっている。

大木 (1987) では、小説などから数量表現を収集し、集めたデータでは NCQ 型が出現するのはが格・を格の場合のみであり、それらの出現状況は、自動詞の主語 122 例、他動詞の主語 2 例、他動詞のを格目的語 185 例という結果を出している。つまり、が格・を格と一言で言っても、他動詞の主語になるが格は NCQ 型になりにくいというのである。以下の例でもそれが検証される。

(41) a 3人A組の学生がB組の学生をなぐった。

b A組の学生が3人B組の学生をなぐった。

c A組の学生がB組の学生を3人なぐった。

(42) a 3人B組の学生をA組の学生がなぐった。

b B組の学生を3人A組の学生がなぐった。

c B組の学生をA組の学生が3人なぐった。

大木 (1987)

このように文中の様々な位置に数量詞を置いてみても、すべて‘3人’は直接目的語の数に関係付けて解釈されるのが自然であるという指摘をしている。この指摘の興味深い点は、が格と一言でまとめられてきたものを NCQ 型になるものとならないものに分類しているところである。

5. 3. 仮説 (改)

が格・を格が特別な振る舞いをする事は数量表現に限らないことを 5.1. で確認した。また、が格・を格と言っても、すべて同等に NCQ 型にできるわけではないことを 5.2. で確認した。ここまでの議論をまとめて、(30) の仮説に改定を加えたい。

(43) 本章の仮説 (改) : NCQ 型は数量表現の基本形であり、無標のフォーカスである名詞句に関連する Q を焦点化した形式である

5.2.で紹介した大木 (1987) が主張している無標のフォーカスという用語を用いるが、無標のフォーカスというのは自動詞のが格と他動詞のを格であり、言わば文の中で伝えたいことの中になるものである。伝えたいことの中になる名詞句が N であるなら、Q は NCQ という位置にくるとというのが仮説の内容である。こう考えるとが格・から格など、今まで NCQ 型が許容されないとされてきた格は、文の中で伝えたいことの中から離れている格であるからという説明が成り立つ。

(44) 学生は3台のバスで大阪へ向かった。

(45) 使われていない2つの丸型ポストから郵便物が見つかった。

(44) においては「学生が大阪へ向かった」というのが文の中心であり、その移動手段である‘バス’はいわば、二次的な情報である。よって、その‘バス’の数を表す Q もわざわざ焦点化する必要はないのである。(45) の例も同様に、‘ポスト’は二次的な情報であり、その数である Q は焦点化の必要がないということで説明ができる。ただ、二次的な情

報かどうかという線引きは非常に難しい。NCQ型になるものとならないものの線引きについては、1.節で見たように多くの研究が取り組んできている。しかし、決定的な主張はなく、多くの要素が絡み合っているであろうということしかわかっていない。本章もその議論に解決策を与えたわけではないが、なぜNCQ型が数量表現の基本形になるのかについては立場を明らかにできたのではないだろうか。

6. おわりに

本章では仮説を提示したといっても、先行研究をまとめたに過ぎない。よって本章で提示した仮説は本論文の立場を表明するためのものである。ここで確認したのはNCQ型が数量表現の基本形であるということである。Qを焦点として提示するタイプであることにより、数を伝えるための表現となり数量表現の基本形となるのである。

第5章 QのNC型数量表現*

「3人ノ学生ガ反对シタ」のような文が、この章で扱われるQのNC型である。「学生ガ3人反对シタ」のようなタイプに比べて、このタイプはやや落ち着きが悪い。この落ち着きの悪さはどこから来るのか、一体どういった意味を持っているのかを明らかにしたい。このタイプはNCQ型同様、他のタイプに比べて先行研究も多く存在し、今まで様々な議論がなされてきている。ここでは、今まで指摘されてきているQのNC型に関する先行研究をまとめ、それらはすべて一つの原理でまとめることができるということを主張する。

I部 現代におけるQのNC型

本章I部の目的：QのNC型に関する先行研究の多様性を説明して、一つの原理による説明を試みること

1. 先行研究

多くの研究が、QのNC型とNCQ型を対象として、その違いについて論じている。そもそも数ある数量表現の中で、どうしてこの2タイプだけが研究の対象になってきたのであろうか。会話や小説だけの資料を用いているDowning (1996)では、集めたデータ226例中106例がQのNC型で、96例がNCQ型であるとしている³⁴。ここからもわかるように数量表現において圧倒的多数がQのNC型かNCQ型によって表されているのである³⁵。こういった使用頻度の観点から、QのNC型とNCQ型だけを研究対象とする理由が説明できるであろう。4章で見たとおり、意味的にはNCQ型が基本形とされてきた。それに対して、これまで大きく分けて3つの論点からQのNC型を説明しようとされてきた。ここではその3つの論点を順番に見ていく。なお、本章での議論は、QのNC型とNCQ型のどちらで

* 本章は岩田一成 (2004) 「日本語数量詞の位置と意味」を基にしているが、博士論文を執筆するにあたり、大幅に加筆している。

³⁴ このデータはQのNC型、NCQ型、NQC型、NのQC型のみを扱っており、本論文で対象としている属性Qや代名詞的用法が対象外である。

³⁵ 第6章で詳しく述べるが、データを会話と小説だけに限定しなければ他のタイプの使用も見られる。

も使用可能な格・を格の例に限って議論をしたい。第 4 章で述べたとおり、その他の格はほとんどの例が NCQ 型を許容しない。

(1) 彼は 2 人の友達にプレゼントをあげた。

(2) 彼は 2 匹の犬と散歩をする。

‘(1) ??彼は友達に 2 人プレゼントをあげた。

‘(2) ??彼は犬と 2 匹散歩をする。

1. 1. 定 (definite)・不定, 特定 (specific)・不特定による説明

Q の NC 型を定または特定という概念で説明している研究は多い。しかしそれらの概念は欧米言語の研究で使われる概念であり、そのまま日本語に当てはめることが難しい。以後、1.1.1.で日本語の定・不定, 特定・不特定という用語がどのように定義されてきたかを確認した上で、1.1.2.でそれに関わる先行研究を紹介したい。

1. 1. 1. 日本語における定・不定, 特定・不特定

そもそも定・不定といった概念は、定冠詞や不定冠詞を持つ言語を研究するときに使われてきたものである。「事実、『定・不定性』の分析の担い手は、冠詞を有する英語等の言語であった。(益岡 1990 : 73)」とあるように、英語などのような定・不定を統語カテゴリーとして持つ言語に比べると、日本語ではあまり取り上げられていない。しかし、定・不定といった概念自体は普遍的なものである。

定指示は指示対象である個体を「聞き手」が既に「知っている」場合であり、不定指示はそうではない場合である。この「定／不定」の概念は西欧語の冠詞の用法に端を発しているが、それに縛られるものではなく、意味の観点から理論的に立てた区別となっている。(金水 1986a : 604)

また西欧語の研究においては、定冠詞を用いるものを定、不定冠詞を用いるものを不定とした上で、その不定を特定と不特定に分類するというのが基本的な考え方のようである。

これまでの定 (definite) – 不定 (indefinite) の上にかさなって、特 (specific) – 不特 (unspecific) の対立のあることがわかってきた。もう、よく知られているように、たとえば現代英語で、

I'm gonna buy a book. (ホンを買うんですよ)

といったばあい、全然、どの本と決めていないばあい—つまり、なにか買いに行こうとして、洋服でもない、食品でもない、本である、というだけのばあいと、ヘンリー・ジェイムズの『レディの肖像』を買おうと決めているのに、とくにそこまで言わなくてもいいばあい、あるいは、ヘンリー・ジェイムズなどという、ふるめかしいとおもわれるかとおそれて、きまっているのだけれど、あえてその名をくちにしたくない、というようなばあいとである。前者は、ほんとうに不定で、しかも不特であるが、後者は不定ではあるものの、特である³⁶。(橋本 1981 : 50 - 51)

では日本語を扱う上で、定・不定、特定・不特定といった概念をどう定義すべきだろうか。ここではまず、奥津 (1983)、金水 (1986a)、庵 (1994)、建石 (2003) に従い、日本語の定・不定は以下のように定義する。

(3) 日本語における定・不定の定義

定指示は指示対象である個体を「聞き手」が既に「知っている」(と話し手が思っている) 場合であり、不定指示はそうではない場合である。

「知っている」ということを文字通りの意味で定義してしまうと、以下のような一般に定表現と考えられている例文が定義から漏れてしまう。

(4) 昨日会った学生が…

前を走っていた乗用車が…

坂原 (2000) では、「…聞き手はそれが自分の知識内のどの要素であるかを同定する必要がある。このように要素の同定を必要とする言語表現を定表現と呼ぶ。(坂原 2000 : 214)」としているように、「同定」できるかどうかで考えると、(4) のように連体修飾されている名詞も、それが何かは同定可能であり、定表現と考えることができる。よって、本章の定義における「知っている」とは「同定できる」という意味で用いる。

さらに橋本 (1981) に従い、不定の中で話者が特定のものをイメージしていれば特定、全くイメージがなければ不特定と考えたい。つまり「話し手の立場からの分類である」(庵 1994 : 50)。

³⁶ 引用文中には特・不特を *specific*・*unspecific* の訳に当てているが、本稿では特定・不特定という用語を用いる。

(5) 日本語における特定・不特定の定義

特定指示は指示対象である個体を「話し手」のみが既に「知っている」場合であり、不特定指示はそうではない場合である。

数量表現において、「既に知っている」とはどういうことだろうか。ある一定の数を持つ指示物があって、その数を「既に知っている」ということになるだろう。そう考えると、定とはある一定数を持つ指示物の数を話し手も聞き手も知っている場合、特定とはそれを話し手のみが知っている場合ということになる。

1. 1. 2. 定・不定, 特定・不特定で説明する先行研究

Martin (1954) では Q の NC 型が定 (definite) であるという指摘をしているが、定かどうかについては判断を保留している研究が多い。Iwasaki (2002) や Kim (1995) では、Q の NC 型は定 (definite) でも不定でもかまわないということを指摘している。

The pre-nominal form (Pattern A) is used whether the nominal referent it modifies is definite/identifiable or not. In contrast, the adverbial numeric phrase (Pattern B) appears when the nominal referent is indefinite/nonidentifiable³⁷. (Iwasaki 2002 : 171)

Greenberg (1978) でも言語普遍性として語順が QN になるタイプと NQ になるタイプを両方持つ言語において、NQ は不定 (indefinite) であると指摘しているのみで、QN 型が定になるという明言はしていない。つまり、定・不定に関しては先行研究においても、一致した見解は出ていない。

次に特定・不特定による先行研究を概観する。“This construction may also be used to indicate that the intended referents are what is alternatively described as specific or definite³⁸.” (Downing 1996 : 220) とあるように、特定 (specific) ・定 (definite) といった概念を用いて Q の NC 型を説明している。ここでは ‘specific or definite’ と言っているが、例文を詳しく見ると特定 (specific) である Q の NC 型の例が多い。

³⁷ ここでいう Pattern A というのは本稿で言う Q の NC 型、Pattern B とは NCQ 型を表している。

³⁸ ここでいう ‘This construction’ とは Q の NC 型のことである。

(6) 三人の友達を待っています。

? 友達を三人待っています。

(7) ? 三人の秘書を探しています。

秘書を三人探しています。 (Downing1996: 原典はすべてローマ字表記)

(6) のように、‘友達’を待つときは、まったく知らない友達ではなく特定の友達であり、逆に (7) のように新しく秘書を雇うときは特定の秘書ではありえない。Naganuma (1951) でも Q の NC 型は ‘speaker’s mind’ において ‘specific’ であると述べている。益岡・田窪 (1992) でも ‘特定’ という用語が用いられている。大木 (1987) では ‘指示的’ という用語で説明されているが、本稿での ‘特定’ と同じ意味で用いられている。

(8) a パイパイを3個欲しいのですが、…

b *3個のパイパイを欲しいのですが、… (大木 1987)

b が言えないのは、特定の3個のパイパイを念頭に置いているからであるという指摘をしている。

これら一連の指摘はすべて傾向として述べているのみで、必ず Q の NC 型が特定になるという指摘ではない。それは特定という概念がまだしっかり定義されておらず、本稿の (3) ように定義したとしても、「話し手」が既に「知っている」かどうかは、なかなか第3者には検証しにくいからであろう。この概念は実際に使用文脈を詳細に検討しないとわからないタイプのものであり、作例に頼っている先行研究では結論が出なかったのではないだろうか。

1. 2. 全体・部分による説明

井上 (1978) が以下の例文をあげて、Q の NC 型と NCQ 型では意味に違いが出るとしている。そこでの指摘は、定名詞句の Q の NC 型と NCQ 型を比べると、その定名詞句の全体数と部分数の関係になるというものである。1.1.1.で述べたように、連体修飾がされている名詞は定表現となる。

(9) a 私は[昨日会った数人の学生]を招待した。

b 私は昨日会った学生を数人招待した。

(10) a [前を走っていた二台の乗用車]がつかまった。

b 前を走っていた乗用車が二台つかまった。 (井上 1978)

(9) においては、a が「昨日会った数人の学生全部」という読み、b が「昨日会った学生の中の数人」という読みをもたらす。(10) の例も同様に説明できる。a が全体解釈で b が

部分解釈になる。これは数量詞移動の議論の中で、**Q**のNC型とNCQ型は別のものであるという主張の根拠として述べられたものである。神尾(1977)、奥津(1983, 1989, 1996bなど)でも同様に定名詞句では全体・部分関係になるという**Q**のNC型とNCQ型の違いが指摘されている。

全体部分関係といえ、以下のような例もある。

- (11) a 10段の階段をのぼる(全部で10段)。
b 階段を10段のぼる(全体は10段以上)。 國廣(1980)
- (12) a 100ページのチョムスキーの本を読んだ(全部で100ページ)。
b チョムスキーの本を100ページ読んだ(全体は100ページ以上)³⁹。

奥津(1983)

これらは、厳密に言うと本稿の対象になるべきものではない。なぜなら**Q**がNのカテゴリー情報を表すものではないからである。(12)の例がわかりやすいが、‘本’を数えるときの数量詞は‘冊’であって‘ページ’ではない。ただ、全体・部分関係になる数量表現の典型例を理解するには役に立つ。**Q**のNC型が全体数を表すという特徴を、以後の議論では全体性と呼びたい。

QのNC型とNCQ型を比べると全体・部分関係になるというのは、このようにある一定の数を持つものの全体数を**Q**のNC型の**Q**として前置する場合である。一定の数を持ったものを前提とすることで、このような全体・部分関係ができると考えると、特定・不特定というのも全体・部分関係とほぼ同義で使えるということがわかる。実際に1.1.2.で紹介したNaganuma(1951)は**Q**のNC型の特定性を指摘していたが、使用されている例をここに挙げてみると、全体・部分関係を示す例としても捉えられる。(13)を全体数(14)を部分数と置き換えても例文の説明は可能である。

(13) その2本のえんぴつをください(たった2本しかないえんぴつを意味する)。

(14) そのえんぴつを2本ください。(Naganuma1951:原典はすべてローマ字表記)

1. 3. 集合・離散による説明

QのNC型とNCQ型の違いを集合的認知と離散的認知の違いで説明する先行研究もある(加藤[重]1997, 2003)⁴⁰。そこではNCQ型が離散的認知を表し、**Q**のNC型が集合的認

³⁹ 奥津(1996b)では、これらを属性**Q**としている。4章で見た。

⁴⁰ NCQ型は distributive reading でなければならないという同様の指摘もある(「Only sentences that allow a distributive reading allow **QF**⁴⁰ (Naito 1995 : 211)」)。

知を表すとしている。

加藤[重] (2003) では「5 個のリンゴがほしいんですが」という表現は発話として不自然になるが、もし集合的に認知される共有知識があれば「5 個のリンゴがほしいんですが」という文が自然になるとして、以下の例をあげている。

- (15) 【青果店に行くと、「リンゴ 2 個 300 円」「リンゴ 5 個 600 円」のようにパックされてリンゴが売られている】「5 個のリンゴがほしいんですが」

以上のような現象から以下のような仮説がたてられている。仮説では Q の NC 型を連体数量詞文、NCQ 型を遊離数量詞文と呼んでいる。

- (16) 談話における連体数量詞文規則についての仮説

- [1] 連体数量詞文は集合的認知を反映する
- [2] 集合的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位と見なすだけの根拠が共有知識に存在しなければならず、その根拠が共有知識にないときは、根拠が提示されなければならない。

- (17) 談話における遊離数量詞文規則についての仮説

- [1] 遊離数量詞文は離散的認知を反映する。
- [2] 離散的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位と見なすだけの根拠（集合的認知の根拠）が共有知識に排他的に存在してはならない。

このように認知の観点から数量表現の位置と意味を考えようとする研究は他にも、本多 (2005)、尾谷 (2002) などが挙げられる。それぞれ Q の NC 型 : NCQ 型を、静的・非時間的 : 動的・時間的 (本多 2005)、summary scanning : sequential scanning (尾谷 2002)、などと異なった用語で説明しようとしているが、それぞれが認めているように、主張はほぼ同様のものである。

加藤[重] (2003) では、他にも以下のようなものを、集合的に認知される共有知識の例としてあげている。

- (18) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、その二台のパソコンが突然故障した。

- (19) 「池袋から日本橋へ行くのは大変かな？」

「大変じゃないよ。二本の地下鉄を乗り継げば行けるよ。丸の内線から東西線か、有楽町線から銀座線かどっちかね・・・。」

- (20) むかしむかし、ある村に三匹の豚がいました。その三匹は兄弟でした。一番上のお兄さん豚はわらで家をつくりはじめました。

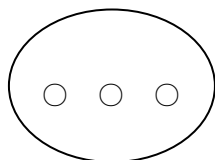
ここでいうような Q の NC 型の特徴を以後の議論で集合性と呼びたい。

(18) の例は、定指示で全体数を表すとして 1.2. で紹介したものと同類である。つまり、一定の数を持ったものの全体数を表すということは、集合物として捉えることにもつながるのである。よって、集合性と全体性は通じるものがあることがわかる。

1. 4. 先行研究のまとめ

ここまで見てきた先行研究は、それぞれが相反する指摘をしているわけではなく、むしろ同一の概念を別の視点で指摘しているということをここで確認したい。先行研究の指摘によると、 Q の NC 型は特定性、全体性、集合性という特徴で説明されてきていた。これらは、(21) のようなスキーマを想定すればすべて矛盾することなく説明できる。

(21) Q の NC 型のスキーマ



ある一定数を持つ集合物を想定すれば、それを特定することができるし、 Q がその全体を表していることになり、当然集合性を持っているといえる。こういった条件で Q の NC 型が成立することになる。ここでまとめた Q の NC 型の使用に関する指示物の把握方法を、集合物認知と呼びたい。便宜上‘集合’という加藤[重](2003)の用語を用いるが、この概念は先行研究すべての指摘を含意するものである。

2. 非制限的連体修飾による説明

先行研究での指摘は、集合物認知という概念で説明できることを 1. 節では見てきた。ここでは、2.1. では集合物認知をもたらす文法構造は、 Q の NC 型が非制限的連体修飾であると仮定すれば説明できることを主張し仮説を提示する。2.2. ではその仮説をたてることの利点を述べて、2.3. で NCQ 型との比較を行なう。

2. 1. Q の NC 型における修飾関係

周知のように連体修飾には制限的用法と非制限的用法がある。英語の場合は制限的修飾と非制限的修飾が書き言葉において言語形式を区別しているが、日本語は言語形式においてこの2つを区別しない。「やさしい女性」という時に、「すべての女性はやさしい（非制限的）」という意味でも、「女性の中のやさしい人だけ（制限的）」という意味で使う時でも

形式は同じである。他の例で言うと、「札幌の兄」という時、兄が一人しかいないなら非制限的、兄が複数いるなら制限的用法となる。

日本人は、英語国民ほど「制限的」「非制限的」修飾の別に敏感ではないと思われる。…だから英語のように、書くときに後者の場合、コンマで仕切る、というような形式的区別を怠りがちである。(改段落)ただこのような区別についての理解自体はないわけではない。(寺村 1980 : 163)

という指摘がされているように、当然その区別自体は理解できる。一番典型的に非制限的修飾が用いられるのは、指示対象が特定できるもの、つまり固有名詞を指す場合である。ただし同名のものが複数いる場合は制限的にも使えるが、普通は固有名詞を修飾すると非制限的用法になる。

(22) 誰からも本当に愛されていないという信念を持たない謙作は、わずかな記憶をたどって、やはり亡き母を慕っていた。 寺村 (1980)

この例における‘謙作’は固有名詞であり、すでに指示対象は同定できる。よって、それを修飾する連体修飾句はすべて非制限的になる。

同様に、集合物からなる固有名詞相当⁴¹を N とすることで、制限的な修飾と非制限的な修飾の区別が数量表現において確認できる。

(23) 5人の日本人が発見された。 制限的

(24) 1億2000万人の日本人が驚いた。 非制限的

同じ固有名詞相当を使っても、修飾する部分の数字を変えることで制限的にしたり、非制限的にしたりできるのが数量表現の特徴である。一般の修飾句では上でも述べたように、固有名詞だと同名のものがない限り非制限的修飾になる。

制限的な連体修飾と非制限的な連体修飾、それぞれの数量表現を NCQ 型の比較してみたい。

⁴¹ 厳密にいうと‘日本人’は固有名詞ではない。唯一指示を行なう訳ではないからである。ただし、特定のものを他と区別する点において固有名詞的である。普通名詞と固有名詞は連続的であり、‘日本人’は普通名詞よりもやや固有名詞よりであると考え。以後の議論でも固有名詞相当という用語を用いる。数量表現との関わりを論じる以上、唯一指示を行なう固有名詞では議論ができない。

(25) ? 5人の日本人が発見された。

日本人が5人発見された。

制限的な例を比べてみると、NCQ型の方がやや落ち着きがよいのではないだろうか。ただし、この判断は難しく、QのNC型に関しても違和感を感じない人もいるであろう。これはII部でくわしく論じるが、通時的に見ると、QのNC型の使用が増えてきていることとも関連する。ただし、(26)のように、非制限的な例にしてみるとNCQ型はすわりが悪くなる。

(26) 1億2000万人の日本人が驚いた。

?? 日本人が1億2000万人驚いた。

このような言い方がおかしいのは、第4章で指摘したようにNCQ型はQを焦点化するということで説明ができるであろう。既定の事実である「日本人の人口」は、それを知っている人にとって焦点にはなりえないのである。非制限的連体修飾においてはQのNC型の方がすわりがよくなるという事実から考察すると、何も条件がないときはNCQ型が基本形であり(第4章参照)、非制限的という条件が付けばQのNC型が使用可能になると考えられる。よって、以下の仮説を提示したい。

(27) 本章I部の仮説: QのNC型はQがNを非制限的に修飾することを使用条件とする

2. 2. 仮説をとることによる利点

先行研究で様々な指摘がされてきているにも関わらず、本章では非制限的連体修飾という概念でQのNC型を説明しようとしている。ここでは、本章の仮説をとることがどんな利点を持っているのかについて述べたい。

一つ目の利点は、先行研究の指摘をすべて包含できることである。2.1.では、非制限的連体修飾数量表現として、固有名詞相当を修飾する例を挙げた。この「1億2000万人の日本人」という例をみると、先行研究が指摘してきたQのNC型の特定性、全体性、集合性という特徴がすべて含まれていることがわかる。日本人の数は特定できるものであり、日本人は1億2000万人であり⁴²、その全体数をQが表し、集合物として存在している。集合物認知の特徴は、すべて非制限的連体修飾という修飾関係によってもたらされるのである。

二つ目の利点は、QのNC型が非制限的であると仮定することで、NCQ型との違いがは

⁴² 正確にはもっと多いが、ここでは概数1億2千万人としておく。

つきりとでてくることである。これについては 2.3. で詳しく述べたい。

三つ目は、先行研究の多様性を説明できることである。先行研究を概観しただけでも、様々な視点から Q の NC 型が定義されてきていた。これらはすべて集合物認知でまとめられるというのが本章の主張であるが、この多様性はいったいどうして起こるのだろうか。非制限的連体修飾とは、典型的には固有名詞を N とするものであったが、固有名詞とは修飾句なしでも指示対象が同定できるものである。つまり、‘日本人’ という N を提示するだけでそれが何人であるかは特定できるのである。言い換えると、Q がなくても N が同定できるものが固有名詞⁴³である。すでに同定可能な N があり、それを修飾する際には Q が非制限的になるのである。これは 1.1.1. で定義した定表現ということで説明できる。定表現には様々なバリエーションがあり、そのバリエーションの個々をそれぞれが取り上げて説明してきたのが先行研究の多様性につながってきたと考えられる。

例えば、先行研究の多くの例で指示詞‘その’がついた例が使われている。

(28=(13)) その2本のえんぴつをください

(29=(18)) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、その二台のパソコンが突然故障した。

つまり、話し手も聞き手も知っているという意味を付加することにより N を定表現にしている。1.1.2. の議論で紹介した大木 (1987) でも「名詞句が定名詞であるならば、『数量詞 + ノ + 名詞句』については、指示的読みが…常になされる⁴⁴。(大木 1987 : 53)」と指摘されている。

また、1.2. の全体・部分による説明も、その議論の前提は、定名詞句のときに限っていた。

(30=(9)) a 私は[昨日会った数人の学生]を招待した。

b 私は昨日会った学生を数人招待した。

この例の場合は、Q とは別の連体修飾句によって定が表現されていると言える。

1.3. の加藤[重](2003)でも、違う形で定の表現方法が提示されていた。

(31=(15)) 【青果店に行くと、「リンゴ 2 個 300 円」「リンゴ 5 個 600 円」のようにパックされてリンゴが売られている】「5 個のリンゴがほしいんですが」

ここでは、リンゴがパックされているという存在のあり方が、すでにリンゴに同定可能性

⁴³ 固有名詞にあてはまる議論は、固有名詞相当の名詞にも当てはまると考える。

⁴⁴ 1.1.2. でも述べているが、ここで‘指示的’という用語が表している概念は、本稿でいう‘特定’と同じである。

を与えているわけである。存在のあり方から、話し手も聞き手もリンゴの数がいくつでセットになっているのかを知ることができる。

このように、様々な先行研究の指摘は、すべて、どのように N を定表現とするかを論じているだけであり、Q の NC 型自体がどういった表現であるのかを論じているのではない。結果として多様な指摘が存在することになったのであろう。この N に対する定表現の表し方を 3. 節で詳しくまとめたい。「1 億 2000 万人の日本人」のように、一般知識で表すものもあれば、(30) のように連体修飾句によって表す場合もあり、また (31) のように存在自体で表す場合もある。ただし、すべてに共通しているのは、‘Q の’ の部分は非制限的になるということである。ここでの議論をまとめて、以下のような定義をたてたい。

(32) 数量表現における非制限的用法の定義

定の N がある一定の数を持つ集合物であることを示し、その全体数を Q が表すもの。

2. 3. Q の NC 型, NCQ 型の比較

第 4 章において、NCQ 型は焦点化という操作から、Q を動的に表すという性質が出てくることを指摘した。ここではまず、Q の NC 型が非制限的であると考えたことで NCQ 型との違いがはっきりと出てくるということを示したい。非制限的連体修飾とは、「1 億 2000 万人の日本人が…」の例からもわかるように、すでに定表現である N を Q が連体修飾している。つまり、Q は N を制限せずに情報を付加するだけなのである。つまり Q は背景化されており、NCQ 型の Q が焦点化されているのと対照的である。周知の事実は焦点化できないことから、以下の例文の許容度が説明できた。

(33=(26)) 1 億 2000 万人の日本人が驚いた。

?? 日本人が 1 億 2000 万人驚いた。

非制限的連体修飾が数量表現に適用されることによって、集合物認知という解釈が出てくることはすでに見たとおりである。集合物であるということは、すでに全体数がわかっているのであるから、数えるという動的な行為は関わってこない。つまり、集合物を静的に捉えているという本多 (2005) の指摘にもつながる。以上をまとめる。

(34) NCQ 型と Q の NC 型

NCQ 型 Q を焦点化 → 動的な認知

Q の NC 型 Q を背景化 → 集合物認知：静的な認知

NCQ 型, Q の NC 型の違いを機能的に見れば、Q を焦点化するか背景化するかの違いとい

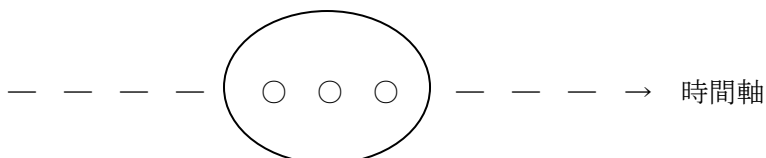
うことになる。また、両者の違いを数量認知という観点で見れば、以下のように図示できるであろう。NCQ 型は数える行為と関わり、事物を動的に捉えているものであったが、Q の NC 型は名詞に連体する形で事物を静的に捉えている。NCQ 型の時間軸を取り去ることで、Q の NC 型に集合物認知が出てくるのである。

(35) NCQ 型と Q の NC 型⁴⁵

時間軸に沿った連続的な把握～sequential scanning



時間軸と無関係である一括的な把握～summary scanning



3. Q の NC 型が非制限的修飾になる条件

Q が非制限的に N を修飾するという事は、言い換えれば、Q 以外に N が定表現であることを表すものが存在するという事を 2.2. で論じてきた。ここでは、それらの定表現の表し方にいったいどのようなものがあるかを詳しく見ていく。定表現の表し方には様々なものがあるが、どんな方法で表したとしても、Q が非制限的になるという点において共通している。Q が非制限的であるということは、Q が N の全体数を表すということで確認できる。以後、様々な定情報によって Q の NC 型の Q が N の全体数を表すことになることを見ていく。

ここでは、それらの定表現を聞き手（読み手）がどのように解釈しているのかという視点で論を進めていきたい。

(36=(24)) 1億2000万人の日本人が驚いた。

この例は一般知識から非制限的であることが理解できるものであったが、例えば次のよう

⁴⁵ 池上（2000）では数の現象として2つの種類（コトの数とモノの数）を挙げている。その2種類は、時間における出来事の回数、空間における固体の個数として、それぞれ‘sequential scanning’、‘summary scanning’という概念で捉えている。本研究では池上（2000）を踏まえ、時間軸に沿った数の把握方法を‘連続的な把握’、時間軸に沿わない数の把握方法を‘一括的な把握’とそれぞれ呼び換え図示した。

な一般知識の及ばない文を見たときはどうなるのだろうか。

(37) 130万人のトリニダード・トバゴ人が驚いた。

これだけを見ても、ほとんどの日本人は制限的か非制限的か判断しがたいであろう。前後文脈の助け、または数量に関する知識がなければ、聞き手は制限か非制限かわからないことがある。しかし加藤（2005）で非制限的連体修飾を以下のように述べている。つまり、読み手はなんらかの情報から解釈を行っているのである。

読み手が修飾部分を読むに際しては、書き手の側で修飾節の内容を否定した事態を意識したかどうか、読み手は判断しながら解釈している。（加藤 2005：10）

ものの数量というのは事実に基づくものであり、読み手の解釈がどの程度可能であるかはわからないが、文脈や知識、その他の情報に何かヒントとなるものがあり、読み手はそれを基にして解釈をしていると考えられる。

‘(37) そのニュースは国中を走り抜け、130万人のトリニダード・トバゴ人が驚いた。

このような文脈があれば、知識がなくてもこの文が非制限的であることは聞き手にわかるのである。以後、主に集めた用例から議論を行なう。よって、作例以外は例文の後ろに出典を明記する。

3. 1. 一般的知識による理解

まずは、非制限的用法の典型例から見ていきたい。(38)に挙げたように、Nの部分がある名詞相当の場合、修飾部は非制限的連体修飾になる。

(38)=(24) 1億2000万人の日本人が驚いた。

聞き手の知識が及ばないこともありうることは、トリニダード・トバゴ人の例で述べたが、日本人に関して全部で何人いるかという知識は我々には一般的知識といえるだろう。固有名詞相当ではなくても、(39)において‘足’の全体数は四本であると理解できるので、定義より全体数を表すQは非制限的であると考えられる。これも一般的知識と言えよう。

(39) テレビは四本の足をつけて床の間の上にぐんとふんばっているようでその姿はじつに美しく、画面が非常にはっきり映っていた。(手)

同様に、次のようなものも一般的知識を使えば非制限的であると理解できる。

(40) 寒さで、五本の指が震えていた。

これらの例はすべて、一般常識によって、Nが定数をもつ集合物であることを示している。

それぞれの例文を NCQ 型にしてみると、すわりが悪くなることは 2.1. で指摘したとおりである。

‘(38) ?? 日本人が 1 億 2000 万人驚いた。

‘(39) ?? テレビは 足を四本つけて床の間の上にぐんとふんばっている…

‘(40) ?? 寒さで、指が五本震えていた。

3. 2. 直示的な理解

会話において、目の前にあるものを指して Q の NC 型が使われるとき、それが非制限的かどうかは直示的に理解できる。つまり、存在物自体の状態が N に定情報を加えている場合がこれである。

(41=(15)) 【青果店に行くと、「リンゴ 2 個 300 円」「リンゴ 5 個 600 円」のようにパックされてリンゴが売られている】「5 個のリンゴがほしいんですが」

1.3. で紹介したように、加藤[重](2003)では (41) の表現が、もし集合的に認知される共有知識があれば自然になるとしていた。これは、話し手と聞き手が現場にあるりんごを集合物であるかどうか確認しているわけであり、集合物の全体数を Q が表しているかどうかは、直示的に理解されるわけである。指示詞がついているが、以下のような例も同様に直示的に理解できるものである。

(42=(13)) その 2 本のえんぴつをください(たった 2 本しかないえんぴつを意味する)。
これらも NCQ 型にすると同じ状況では使えなくなる。集合物の全体数を表さなくなることが確認できる。

‘(41) #リンゴが 5 個ほしいんですが

‘(42) #その えんぴつを 2 本ください

3. 3. 文脈による理解

(43) すでに布施金次郎も夫人も 二人の娘も邸の中に入ってしまった。(避暑地)

(44) フセイン大統領と 2 人の息子を狙ったとされるマンスール地区…。03.4.9 (朝)
この例のように、誰かの子供の数を言うとき、その全部の数を Q の NC 型で表すなら、それは非制限的連体修飾である。これは話し手(書き手)は当然制限か非制限かを区別して使っているが、聞き手(読み手)はそれを文脈から解釈せざるを得ない。(43)(44) が非制限的であることは、文全体の流れから理解できる。

(45) 家内は森財閥の娘だったから、私は自分の会社の 千二百人もの社員を救うために、
森財閥とつながりを持つしか手だてがなかったんだ。(避暑地)

(46) 二十数名の雄雄しき挺身隊員は、数万点のアメリカ衣料を分類し、整理し、梱包し、日本通運の営業所へ運び、数十の孤児院や母子寮へ発送した。(モッキン)

(47) 新潟県佐渡市黒姫沖。十数人の漁師たちが寒ブリ用の定置網を引き揚げると、中は大量のエチゼンクラゲでぎっしり。2005.11.9 (読売)

これらの例も、すべてある集団を想定してその全体数を Q が表しているの、非制限的連体修飾である。例えば、(45)において、ある会社が想定されて、そこで働いている職員が全部で千二百人いるわけである。この場合、話し手(書き手)は当然ある集合物の全体数を理解しているが、聞き手(読み手)もそれが全体数であることは理解できる。前後の文脈から、それが会社の全体数であることは読み込めるからである。これらの特徴も(45)(46)(47)の例を‘(45)‘(46)‘(47)のようにNCQ型にすると、全体数を表すという意味がなくなってしまうところである。‘(45)‘(46)‘(47)では、全体の中の部分というニュアンスになる。よって意味が変わり、同じ文脈には合わなくなる。

‘(45) #私は自分の会社の社員を千二百人も救うために、…

‘(46) #雄雄しき挺身隊員は二十数名、数万点のアメリカ衣料を分類し…

‘(47) #新潟県佐渡市黒姫沖。漁師たちが十数人寒ブリ用の定置網を引き揚げると、…ここで見てきた文脈による理解というのは、3.1.の一般的知識とはっきり区別できるわけではなく、連続的である。(45)の文が発話されたとして、もし聞き手が話し手についてよく知っていれば、話し手がある会社の社長でありその社員は千二百人であるということを知識として知っている可能性もある。そういう場合なら、(45)が非制限的であるということは、一般的知識から理解できる。

(48=(37)) 130万人のトリニダード・トバゴ人が驚いた。

また、このような例において、一般知識がなかったとしても、前後文脈から制限的か非制限的か理解できることは3.節冒頭で述べたとおりである。次の例はまさにそうで、一般知識はなくとも文脈から非制限的であることがわかる。

(49) (バングラディシュについて語っている)「英国の面積の半分以下の国に一億三千万の人間がひしめき、…」(マスタ)

3. 4. 旧情報であるNによる理解

ここでいう旧情報とは、同じNが二度現れたときの二度目の状況を指す。その場合QのNC型が使われている。これは3.3.で扱った文脈により非制限的であることを理解するタイプの一部である。ただ、用例が非常に多いので、このタイプは分けて扱う。前の文脈にお

いて既出であることを示すために、ここでは例文にページ番号を付加する。

(50) (氷海の中に巨大な氷山が二つ浮かんでいる。 p 152)

→何日かして、二つの氷山は各々六機の円盤に鎖で引きずられてやってきた。 p 155
(バンド)

(51) (自転車が三台並べられてあった。 p30)

→ぼくはいったん納戸を閉めて、ガスレンジを拭き始めたが、そのうち、どうやって三台の自転車を納戸の中に運べたのだろうと考えた。 p30 (避暑地)

(52) (劇場の前には幟が数本立っていた。 p200)

→数本の幟も微かな夕風に敏感に反応し、いまやすっかり生気を蘇らせている。 p204
(モッキン)

(53) 三匹の迷える子羊は (既出の主人公たちを表す) 再び教会に戻るのだ。(モッキン)

一度目に N の数が導入されると、読み手は N の数がいくつなのかわかる。二度目に同じ N が使われると、その Q が N の全体数を表すことが明らかなので Q の部分は非制限的連体修飾となる。二度目に出てくる Q の NC 型は、既出の文脈から N が一定の数を持つことが示されており、かつその全体数を Q が指していることになる。これらは既出の文脈が N に定情報を与えることで、Q の NC 型が非制限的であることを理解できる。(50) (51) (52) の例はすべて、最初に導入された N の数を二度目に Q の NC 型で表している例である。(53) の例は、3人の主人公が登場する小説において、その3人を指して使われている。誰と誰と誰が主人公なのか、読み手には明白であり、その全体数を Q で表しており、Q が非制限的であると理解できる。

‘(50) (氷海の中に巨大な氷山が二つ浮かんでいる。)

→#何日かして、氷山は二つ各々六機の円盤に鎖で引きずられてやってきた。

このように NCQ 型に変えると、先に導入された氷山と二度目に出てくる氷山を同定できなくなる。Q の NC 型にして (50) のように同定機能が出てくるのは、二度目の Q の NC 型が一度目導入された氷山の全体数であるということを明示しているからである。ここからも、Q の NC 型が非制限的だと全体数を表すことがわかる。

(54) 英世の祖母にあたる、このみさという人は婿をとっているが、英世の母に当るシカも、同様に佐代助という婿養子をとっている。この二人の男は、いずれもどうい
わけか酒飲みで農業を嫌い、若松や、ときには京都まで働きに出て家を留守にしてい
る。(落日)

指示詞をつけるとよりはっきり、旧情報であることがわかる。この場合も、Q の部分は前述の‘男’の全体数‘二人’を表しているだけで、非制限的連体修飾である。

また、次のように今までの例とは登場順序が逆になるパターンも、このタイプに含めてよいかと考える。はじめに Q の NC 型で全体数を導入しておいて、後からその内訳を表すタイプである。

(55) この船で、英世は船倉で、高熱に魘されている二人の病人を見つけた。一人は中国人で一人は日本人である。(落日)

(56) このとき、英世は自分の立場を利用して、重松という友達に、五冊の本を貸していたが、このうち三冊は原書で、うち二冊は研究所員も持ち出し禁止の医学全書であった。(落日)

(57) ラージン「私には二人の親友がいた。」「ミハイルとニコライというモスクワのレーニン記念第一一七学校時代からの親友だ。」(マスタ)

これらの Q の NC 型を旧情報と呼ぶのは、少し違和感があるが、前後を逆転させることでなにかレトリック効果を狙っているとも考えることもできる。よって、ここではこれらのタイプを同等に扱うことにする。

3. 5. 他の修飾句があることによる理解

Q の NC 型における Q は、他の修飾句と共に N を修飾することが非常に多い。

(58) 一方で静岡にいる間は、自宅で飼っている 2 匹の猫が気になる。03.4.2. (朝)

(59) それからぼくたちは、もうその店に入った時から素早くきつちりと見届けておいた二冊の雑誌を別のテーブルの上から持ってきた。(手)

(60) うちに居候をきめこんでいた三人の学生が、わたくしを女とあなどって、遊び半分に、シェパードに妙な芸を教えこんだんですよ。(モッキン)

(58) において、‘自宅で飼っている猫’は‘全部で2匹’であるから、このように他の連体修飾によって制限されたときの Q は非制限的になる。これらは NCQ 型にすると全体数を表す意味がなくなり、文脈に合わなくなる。

‘(58) #一方で静岡にいる間は、自宅で飼っている猫が 2 匹気になる。03.4.2. (朝)

1.2.で紹介した井上(1978)でも、以下の例文をあげて、Q の NC 型と NCQ 型では、その定名詞句の全体数と部分数の関係になると指摘していた。

(61=(9)) a 私は[昨日会った数人の学生]を招待した。

b 私は昨日会った学生を数人招待した。

(62=(10)) a [前を走っていた二台の乗用車]がつかまった。

b 前を走っていた乗用車が二台つかまった。

ここからも、このタイプは全体数を表す非制限的修飾であることがわかる。

加藤 (2005) では、「東京で下宿している兄」の修飾部は、制限か非制限かわからないが、「東京で下宿している下の兄」のように、兄を特定化する修飾句が加わると、「東京で下宿している」の部分は非制限的になるという分析をしており、本稿での議論もこれと同じ論理に基づいている⁴⁶。

3. 6. 本節のまとめ

ここまで、Q の NC 型が非制限的であることを明示するための条件を見てきた。少なくとも 3.1.~3.5.までの 5 つの状況においては、数量詞 Q が非制限的であるということが言える。Q が N の全体数を表すということは、N が何らかの方法によって定表現にされているからであり、それは Q が非制限的になっていることと同義であった。定情報を示す要素は順に、一般常識、存在物自体の状態、前後文脈、既出の文脈、連体修飾句が挙げられることを見てきた。また、数量表現に関して定情報を示す方法のバリエーションがある程度記述できたといえる。結果的に、先行研究の指摘の多様性をまとめることができた。

金水・田窪 (1990)、坂原 (2000) では、談話理解に用いられる知識ベースを談話資源と呼んで、その談話資源には、一般知識、発話状況についての知識、先行の談話についての記憶という三種類があると指摘している。これらと同定することで定表現を表すことができるというものであるが、本章で取り上げた 3.1.~3.5.の状況も、談話資源という概念で説明ができる。一般知識には 3.1.で取り上げた議論が当てはまり、発話状況についての知識には、3.2.で取り上げた議論が当てはまり、先行の談話についての記憶は、3.3.~3.5.までの議論が当てはまる。定表現に用いられる談話資源からも、本章の議論が説明できるということである。

⁴⁶ ただし、ここでの指摘は非制限修飾は外側にくるというものである。本章で扱う数量詞の例はすべて内側にあり、修飾する位置についてはもう少し議論が必要である。

(63)

談話資源	定表現の表し方	対応する節
一般知識	一般的知識による理解	3.1.
発話状況についての知識	直示的な理解	3.2.
先行の談話についての記憶	文脈による理解	3.3.
	旧情報である N による理解	3.4.
	他の修飾句があることによる理解	3.5.

4. 周辺の例

3. では明示的に非制限的連体修飾がなされる状況を見た。しかし、実際の数量表現の使用状況を見ていると、3. で示した状況だけでは説明できないものもたくさんある。ここではそれらの例を見ていく。

4. 1. 眼前描写の表現～空間的なまとまり

(64) 新館の方から更に二三人の警官が走り寄ってきた。(うぶめ)

(65) 荷造りをほどこいて中を改めると、第一の梱包からは二十数着のオーバー、第二の梱包からは百数十点の子ども服、第三の梱包からは五十数点の婦人服が出て来た。(モッキン)

(66) 七、八十本の薪が乗っているのでかなり重かったが、引くたびに現れてくる地下室への入り口の、まがうかたのない隙間とはめ込み式の取手を目にしたとき、ぼくの心臓は烈しく打ち、胸苦しさで息遣いが荒くなった。(避暑地)

(67) 湖を望む一角に、三つの館が並んでいたことはたしからしい。(落日)

これらの例はすべて眼前描写（風）に使われている表現であるが、N が一定の数をもつということを示す制限が見当たらない。「1億2千万人の日本人…」の例では、集合物の成員とその他がある程度客観的に区別できた。その他の例でも様々な形で加えられる定情報により、Q が表すのは何の全体数なのかをはっきり表すことができた。しかし、これらの例は何の全体数なのかはわからないし、集合物の成員とその他の区別がかなりあいまいである。よって、表現を NCQ 型に変えてみてもさほど意味の違いは出てこない。

‘(64) 新館の方から更に警官が二三人走り寄ってきた。

‘(65) 第一の梱包からはオーバーが二十数着、…

‘(66) 薪が七、八十本乗っているのでかなり重かったが、…

‘(67) 湖を望む一角に、館が三つ並んでいたことはたしからしい。

強いて言えば、話者の眼前に存在するものの全体数ということになるが、その全体数とは話者が主観的に決めるかなりアドホックなものである。確かに、眼前に存在するものの全体数と考えると、空間的にまとまっている集合物であるということもできる。この点において3. で見てきた様々な非制限的連体修飾の例とのつながりも確認できる。これらは典型的な非制限的修飾から意味的に拡張してきたものとする。

4. 2. 時間的なまとまり

(68) しかし臨床の医者では、所詮、自分が見た患者を治すだけで、どう頑張ったところで、一生のうちに五、六千人の人を救うのが限度です。(落日)

(69) たしかに研究所からは年々二、三名の人が欧米留学に出ているが、清作の前には、なお四、五十名の留学候補者が控えていた。(落日)

(70) 九十日間に二万人もの兵隊が死に、生き残った者にも深刻な後遺症を残した。

(マスタ)

これらの例はすべて、ある一定時間内に動作に関わる N の数を Q が表している。例えば、(68) において、‘主人公が死ぬまで’という時間的設定をして、その間に‘救う’ことができる人の数を Q の NC 型で表している。(69) の例は一年の間に留学できる人の数、そして、清作が留学するまでに留学する人の数をそれぞれ Q が表している。(70) の Q は 90 日間に亡くなった兵隊の数である。これらはすべて時間的な枠組みを設定しているところから、時間的なまとまりを持つ表現であると言える。時間によって区切られた集合物というのは、4.1. の例と同様、成員とその他の区別が客観的にはできない。例によって NCQ 型にしてみても意味の違いは生じない。Q が何かの全体数であるという定情報がそれほどしつかりしたものではないからである。

‘(68) しかし臨床の医者では、所詮、自分が見た患者を治すだけで、どう頑張ったところで、一生のうちに人（患者）を五六千人救うのが限度です。

‘(69) たしかに研究所からは年々人（研究員）が二、三名欧米留学に出ているが、清作の前には、なお留学候補者が四、五十名控えていた。

‘(70) 九十日間に兵隊が二万人も死に、生き残った者にも深刻な後遺症を残した。

‘(68) と ‘(69) は N が ‘人’ なので、単独ではすわりが悪いがここではそのすわりの悪さは考慮しない。それぞれ ‘患者’ ‘研究員’ という単語に置き換えても、ここでは大きな問題にはならない。これらも話者がある一定の時間内に存在するものをまとまりとして捉

えた全体数を表すと考えれば、3.節の例との連続性は確認できる。これらも拡張例とみなしたい。

5. まとめ

3.節で見た非制限的な連体修飾をなす例が Q の NC 型の典型例であるというのがこの I 部の主張である。ただ、4.節で見たように、それだけでは説明しきれない例もたくさん存在するが、それらは拡張例として扱った。ただ、何らかのまとまりをもったものの全体数を表すという点はすべての例に見られた特徴である。全体数を表すといっても、その成員・非成員間にある境界の明確さには段階性がある。

(71)=(24) 1億2000万人の日本人が驚いた。

(72) 現在西ドイツには二百万人のトルコ人が定住し、劣悪な条件のもとで労働している。
(マスタ)

(71) の例は 3.1.でも示したように、固有名詞相当を N とする典型的な非制限的連体修飾である。それに対して (72) の例になると、‘トルコ人’という固有名詞相当の全体数を Q が表しているわけではなく、文脈より‘ドイツにいる’という制限が N に与えられ、その全体数を Q の NC 型が表している。これも非制限的連体修飾ではあるが、(71) の例ほど境界がはっきりしたものではない。しかし典型例との連続性は明らかであるし、どちらも集合物の成員と非成員の区別を客観的に行なえる。

(73) 教室には5人の中国人がいた。

この例になると全体数を表すその枠組みが非常にゆるくなる。一応文脈により制限がされているが、かなりアドホックであり、客観的な区別は難しい。つまり、教室にいる中国人と教室外にいる中国人がさほど違いがあるとは考えられない。(71) のように日本人とその他の国籍の人は、様々な違いが存在する。しかしながら、両者の連続性は明らかである。こう考えると、(74) の例のように、本章では拡張例として 4.1.で扱った‘空間的なまとまり’を表す表現も、連続的なものとして捉えられる。

(74) 4人のインド人が走ってきた。

(74) の例は眼前描写的に捉えて使うなら、まさに 4.1.で扱った拡張例に入るであろう。この例は眼前描写という点では、3.2.で扱った‘直示的な理解’による非制限的解釈の例からの拡張ということもできる。いずれにせよ、このように典型例から拡張例へは連続性が認められる。典型例と拡張例の違いは、集合物認知の境界線がはっきり線引きできるかど

うかである。以下にそれを図示する。

(75) Q の NC 型の拡張



先行研究のバリエーションが、非制限的連体修飾による集合物認知をたてることでほぼ説明できることを 3 節で見てきた。しかし、4 節のように、拡張例と見られるようなものがあり、Q の NC 型を一言で完全に説明できるわけではないのも事実である。非制限的連体修飾になる Q の NC 型は、N が定表現であることの裏返しであるが、定表現かどうかを巡っては先行研究が一致していないことも 1.1.2. で見てきた通りである。これは 4 節のような拡張例がうまく説明できないことによるものであろう。金田一 (1988) によると、かつては NCQ 型のみが存在していたが、この頃英語などの影響で Q の NC 型が増えてきているという指摘がある。これをヒントに II 部では、4 節のような拡張例は通時的な変化の結果ではないかと仮定し、Q の NC 型を通時的に考察してみる。そうすることで、I 部で立てた仮説を再検討したい。

II部 通時的考察

1. 先行研究

金田一（1988）の指摘をここで詳しく見ていく。金田一は以下のような例をあげて、このごろの使い方としている。

(1) 三人の男の子と二人の女の子が道端で遊んでいましたが…

それに対して、本来数量表現は以下のような語順でなされていたとしている。

‘(1) 男の子が三人、女の子が二人道端で遊んでいましたが…

その上で、かつては NCQ 型のみが存在しており、英語などの影響で Q の NC 型が増えてきたと述べている。

さらに、‘一人の息子’と‘息子が一人’は‘一人しかいない息子’と‘何人かいるうちの一人’という区別に使われており、それを今の日本人はゴチャゴチャにしててもったいないと述べている。つまり、‘全部で一人’の時に‘一人の息子’と言うことになりこれはまさに I 部で指摘した非制限的連体修飾ということになる。

山田（1908）の指摘も示唆的である。1908 年の論文であるから、これ自体が通時的資料としての価値を持っているものと思われる。そこでは数量表現の様々な形が六タイプに分けて紹介されているのだが、興味深いことに、第二のタイプとして述べられる Q の NC 型は例が非常に少ない。かつ、そこだけ例が以下のように名詞句になっている。

(2) 七冊の書籍 五人の朋友 (山田 1908)

他のタイプの例は以下のようにになっている。NCQ 型は第六のタイプとして、NQC 型は第五のタイプとして紹介されている。

(3) 我が郷人は五人行きぬ。

(4) 狐三匹と雉子五羽とを獲たり。 (山田 1908)

また、第四のタイプとして助詞のないものが挙げられていることも、ここで確認しておきたい。

(5) 兄弟五人皆善良なり (山田 1908)

2. 仮説

先行研究を解釈すると、山田（1908）から当時 Q の NC 型は文レベルではまだまだ使用されておらず、用例としては名詞句だけを抜き出した形で使われていたのではないかと考えられる。またそれは金田一（1988）の指摘とも合致し、Q の NC 型が広く使用されるの

は最近の現象であるということになる。それに対して NCQ 型や NQC 型は文レベルで使用されていたということになる。さらに金田一の指摘を基にすると、Q の NC 型を文レベルで使用したとしても非制限的な使用に限られるという仮説が立てられる。

(6) 本章Ⅱ部の仮説：少し時代を溯ると NCQ 型が頻繁に使用されており、Q の NC 型は使用に制限があり非制限的連体修飾に限られる

I 部で立てた非制限的連体修飾の定義をもう一度ここで確認したい。

(7) 数量表現における非制限的用法の定義

定の N がある一定の数を持つ集合体であることを示し、その全体数を Q が表すもの。

I 部でも指摘したように、非制限的・制限的連体修飾には明確な境界線が引けないので、ここでの議論は、I 部の結果との比較を行ない、現代より典型的な非制限的連体修飾の例が多いということを示す。

ここでは文レベルのものに限って考察を進めていきたい。金田一（1988）の言う‘かつて’がどのあたりを指すのかはわからないが、まず明治文学と言われるもので例を集めそれらを 3. 節で考察し、さらに時代を遡って江戸時代の資料から 4. 節で考察を深める。本章では、‘indefinite marking flavor’がある（Downing1986）とされる数字の‘一’に関しては除外して考察を進める。‘一’に関しては 10 章で扱う。

3. 明治時代の作品

ここで扱う明治時代の作品をはじめに紹介する。

(田舎) = 『田舎教師』(田山花袋/明治 42 年/新潮文庫)
(浮雲) = 『浮雲』(二葉亭四迷/明治 19 年/岩波文庫)
(うたかた) = 「うたかたの記」『舞姫 うたかたの記』(森鷗外/明治 23 年/角川文庫)
(三) = 『三四郎』(夏目漱石/明治 42 年/角川文庫)
(文) = 「文づかい」『舞姫 うたかたの記』(森鷗外/明治 24 年/角川文庫)
(坊) = 『坊ちゃん』(夏目漱石/明治 39 年/新潮文庫)
(舞) = 「舞姫」『舞姫 うたかたの記』(森鷗外/明治 23 年/角川文庫)

これらの作品から実例を集めてみると、確かに金田一（1988）の指摘どおり、数量を表

わす時は、NCQ型が圧倒的に使われている。

(8) 付箋が二三枚ついているから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻って来たのである。(坊)

(9) おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞆を二つ引きたくって、のそのそとあるき出した。(坊)

(10) 椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに残って見える。(田舎)

ただし、少数ながらQのNC型も使用されており、それらを以下にあげていく。ここではそれらの用法が非制限的であるかどうかという視点で検証していく。

3. 1. 直示的な理解

現場に存在するNの数を直示的に確認して、Qがその全体数であることがわかれば、それが非制限的であると理解できる。これらはI部の3.2.で扱ったタイプである。

(11) (清三と萩生さんがこの場面にいる) 萩生さんが来週の月曜日までに聞いて置いて遣るということに決まって、二人の友達は分署の角で別れた。(田舎)

(12) (文三とお勢がこの場面にいる)翌朝に至りて兩人(ふたり)の者は始めて顔を合わせる。(浮雲)

(11)(12)は、その現場に登場している人物を代名詞的に受けて使われているが、ともに現場にいるNの数を直示的に把握できる。では、他の例はどのように分析できるのだろうか。

3. 2. 文脈による理解

以下の例は、どちらもQの部分がNの全体数を表しているということがわかる。それは文脈を利用して可能になることである。

(13) と云うものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮してこれを翻弄しようとした所為とより外には認められんです。(坊)

(14) 夫婦の間に二人の子がある。(浮雲)

これらの例はI部の3.3.で扱ったもので、ある特定の集団として存在しているものの全体数を連体修飾として前置しているものであった。これらが非制限的であると理解できるのは文脈から、Qで表される数が全体数であるということを理解できるからであった。I部の3.2.で述べたように、これらはNCQ型に変えてみると、部分数を表わすということであっ

た⁴⁷。本来の意味とは変わるので、同じ文脈では違和感が出る。

‘(13) #と云うものはこの事件はどの点から見ても、寄宿生が五十名新来の教師某氏を
…

この文では、寄宿生がたくさんいて、そのなかの五十名というニュアンスになる。(14) の例についてはもう少し前後の文脈を見ていかねばわからないが、前後を見ていけば‘二人’という数が子供の全部の数であるということがわかる。

3. 3. 旧情報である N による理解

既出の名詞を受けて Q の NC 型が使われるタイプがこれである。これらはすべて、Q の NC が旧情報を表す数量表現であるということを手がかりに非制限的連体修飾であるということを理解できるタイプであった。I 部では 3.4. で扱った。I 部同様、文脈に既出であることを示すために、ここで扱う例文にはページ番号を入れる。

(15) (月に透かして見ると影は二つある。p80)

→段々歩行いて行くと、おれの方が早足と見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。
p80 (坊)

(16) (ふと目を上げると、左手の丘の上に女が二人立っている。p32)

→二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。p34 (三)

(17) ([よし子と美禰子を探している]しかし注意したら、どこかにいるだろうと思って、よく見渡すと、はたして前列のいちばん柵に近い所に二人並んでいた。p163)

→二人の女も、もとの席へ復した。p164

→二人の女は笑いながらそばへ来て、…。p233 (三)

(15) (16) (17) はすべて、既出の数量を繰り返す時に、Q の NC 型が使われているタイプである。このタイプは、既出の指示物を照応するときに数量詞が使われるパターンで、先行文脈ですでに全体数が提示されており、Q の NC 型はその全体数を連体修飾で表わすものであり、非制限的用法である。

また、I 部の 3.4. でもレトリックとして Q の NC 型が先に使用され、そしてその内訳が後から説明される例も紹介した。同じような例はここでも見つかる。

(18) 三四郎には三つの世界ができた。一つは…。第二の世界…。第三の世界……。三四郎は床のなかで、この三つの世界を並べて、互いに比較してみた。次にこの三つの世界をかき混ぜて、… (三)

⁴⁷ これには述部が関係してくるので、すべてが部分数になるとは言えない。

この例では、最初に Q の NC 型で‘三つの世界’というのを導入しておいてから、その三つとは何かについて後で解説を加えている。また、後の段落では、‘三つの世界’という言葉が繰り返し使用されている。

3. 4. 他の修飾句があることによる理解

ここにある例は他の修飾句の内側にある場合であり、他の修飾句があることで Q が非制限的連体修飾であるということがわかるタイプである。I 部の 3.5. で扱った。

(19) 荷物を満載した三台の引越車はガラガラ町の大通りを軋って行く。(田舎)

(20) 床に掛けた軸はすみずみもすでに虫ぼんで、床花瓶 (いけ) になげいれた二本三本の蝦夷菊は、うち枯れて枯れ葉がち。(浮雲)

(19) において、‘三台の引越車’だけでは、制限か非制限か分からず、定数量を持つかどうかともわからないが、‘荷物を満載した3台の引越車’になると、‘荷物を満載した引越車’が全部で‘三台’あり、‘三台’がその定数の全体を表わすことになる。よって、これらも非制限的用法であると言える。その証拠に、NCQ 型を作ってみると、やはり部分数を表わすことになる。同じ文脈では違和感が出る。

‘(19) #荷物を満載した引越車は三台ガラガラ町の大通りを軋って行く。

‘(20) #床に掛けた軸はすみずみもすでに虫ぼんで、床花瓶 (いけ) になげいれた蝦夷菊は、三本うち枯れて枯れ葉がち。

‘(19) については、‘荷物を満載した引越車’がたくさんあって、そのうちの‘三台’という解釈が可能であり、‘(20) についても‘なげいれた蝦夷菊’がたくさんあって、その中の三本が枯れているという部分数を表わしている。

3. 5. その他の例

収集したデータは、以上の4つのタイプにほぼ分けられる。つまり、Q の NC 型はほぼすべて非制限的連体修飾であるということが言えそうである。非制限的であることを理解するには5つの方法があることをI部で述べた。ここではそれらのうち4つが確認できた。しかし、I部で周辺例として扱ったタイプも少しではあるが見られる。

(21) 続いて目前(目先)に七、八人の学生が現われて来たと視(み)れば、皆同学の生徒らで、… (浮雲)

(22) (列車の中の描写) 三、四人の乗客は暗いランプの下で、みんな寝ぼけた顔をしている。(三)

(23) その教室には約七、八十人ほどの聴講者がいた。(三)

(24) 与次郎が入学願書を持って事務へ来た時に、この桜の下に二人の学生が寝転んでいた。(三)

(25) 三四郎は目のつけ所がようやくわかったので、まず一段落告げたような気で、安心していると、たちまち五、六人の男が目の前に飛んで出た。(三)

(26) 島にはただ二本の木がはえている。(三)

これに関しては、非制限的用法という説明が難しい。目の前にいる学生の全体数を表わすと言う点では、定義からさほど離れているわけではない。I部4.1. で見た空間的なまとまりを表すものに入る例だが、これは拡張例として扱ったものであった。これらは、NCQ型にしてもさほど意味の違いが出てこないタイプであったが、ここでも確認したい。

‘(21) 続いて目前(目先)に学生が七、八人現われて来たと視(み)れば、皆同学の生徒らで、..

‘(22) (列車の中の描写) 乗客は三、四人暗いランプの下で、みんな寝ぼけた顔をしている。

‘(23) その教室には聴講者が約七、八十人ほどいた。

‘(24) 与次郎が入学願書を持って事務へ来た時に、この桜の下に学生が二人寝転んでいた。

‘(25) 三四郎は目のつけ所がようやくわかったので、まず一段落告げたような気で、安心していると、たちまち男が五、六人目の前に飛んで出た。

‘(26) 島にはただ木が二本はえている。

少数ではあるが、I部で周辺例として扱ったものも含まれていることをここで確認しておきたい。

しかしながら、これらの例は、ほとんど「目先に、(列車の中の)ランプの下、教室には」というような場所を示す表現が文中にあり、Qの表す数字が、その場所の区切りの中での全体数であるということを示している。また、作品に偏りがあり、このタイプの周辺例が見られるのは「三四郎」という比較的明治後期の作品である。また、I部4.2.で紹介した時間的なまとまりの表現は集めた例文には見られなかったことから、全体としてはほぼすべての例が、非制限的なタイプのどれかに振り分けられるという点で仮説を支持することができるのではないかと考えている。少なくともI部で扱っているデータとは明らかにQのNC型の使用状況に違いが見られる。

ただ、ここでもI部1.節冒頭でも見たように‘が格’‘を格’以外ものはQのNC型が使用されている。これらはNCQ型にすることができない例なので、言わばQのNC型以

外では表現ができないものである。よって、今まで見てきた‘が格’‘を格’のものと同じには扱えないものであるが、明治期の作品にもこれらには Q の NC 型が使われているという状況だけは確認しておきたい。

(27) 二つのビク (旧字) には、五寸から三寸くらいの鮎が金色の腹を光らせてゴチャゴチャしている。(田舎)

(28) 三四郎はこの缶の横っ腹にあいている二つの穴に目をつけた。(三)

(29) …わが生涯にてもっとも悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。(舞)

(30) 庭の一隅に栽え込んだ十竿 (ととも) ばかりの織竹 (たよたけ) の、葉を分けて出る月のすずしさ。(浮雲)

(31) 長い行田街道には冬の月が照って、二台の車の影と親子四人の影とを淋しく黒く地上に印した。(田舎)

(32) その自分には有志の者が醸金して構内に厩をこしらえて、三頭の馬と、馬の先生とを飼っておいた。(三)

(33) また美禰子の絵はがきを取って、二匹の羊と例のデビルをながめだした。(三)

また、数詞が‘一’のときは Q の NC 型が多く見られるが、2. 節で断ったとおり、‘一’に関しては 10 章でまとめて述べる。

明治文学と言われる作品群の作者は、多かれ少なかれ外国語の影響を受けている。ここで扱った夏目漱石、二葉亭四迷、森鷗外などはそれぞれ外国語が堪能で、翻訳なども手がけている。金田一の指摘では Q の NC 型が増えているのは‘英語などの影響’ということであった。そこから考えると、ここで扱ったデータはかなり外国語の影響を受けている可能性はある。明治期の作品だけでも現代の状況との違いははっきりと説明できるが、次節ではさらに時代を遡ってみることで日本語数量表現の通時的考察を深めたい。

4. 江戸時代の作品

ここでは十返舎一九の作品『東海道中膝栗毛』⁴⁸に使われる数量表現をすべて整理することで明治期以前の数量表現を知る手がかりとしたい。この作品は江戸から大阪まで旅行する内容となっており、道中で買い物シーンが多く、非常に数量表現がたくさん使われている。収集した数量表現は 175 例であった。また、地の文と会話文がどちらもバランスよく出ており、江戸時代の数量表現を見るにはよい資料となる。

⁴⁸ 『東海道中膝栗毛』(十返舎一九／享和二(1802)年—文政五(1808)年／岩波文庫)

収集した数量表現の中で、一番多かったのは以下のようなもので、NCQ 型なのか NQC 型なのか判断ができないタイプである。

(34) ここにいがぐりあたまの子ども二三人、大なるすつぽんをとらえて、…

(35) トやがてそば二ぜんいだす…

(36) 旅人壹人こんのもめんかつばをきて、…

これらは山田（1908）で第四のタイプとして挙げられていたものである。

(37=(5)) 兄弟五人皆善良なり

また、上のタイプとほぼ同数、NCQ 型の数量表現も見つけられる。

(38) モシエ鱒切を二本さしなさつたとつて、それが恐いものでもござりやせんはな。

(39) そのもちよヲニツ三ツ、かかあめがくちへねちこんだら、むしゃむしゃとくらやアがるから…

(40) [地の文]女ぼんにちやをふたつもつてきたり

4. 1. 非制限的連体修飾の例

ただし、本当にわずかではあるが Q の NC 型の例も見つかる。175 例中、以下の 2 例のみであった。どちらも非制限的修飾であることがわかるタイプである。旧情報であることを明示するためにページ数を付けて例文を挙げる。

(41) ([地の文]此内おくざしきには、きんざいの客三人ばかり、此しゆくにあつづけしかえりがけと見え、…p297)

→トそれぞれにあいさつするうち三人の客は、めいめいからしり馬にうちのり、… p298

(42) ([地の文]このうちとなりざしきにとまり合せしごぜ⁴⁹ふたりが、…p308)

→ふたりのごぜもねたようす。 p312

(41) (42) は N が旧情報であり、そこから非制限的であることがわかるタイプである。文脈の流れに沿って読んでいけばこれらが既出であることはすぐにわかる。ページ数を入れておいたが、少し前のページで導入された N とその数 Q が後になってもう一度出てくる時に Q の NC 型が使用されている。これらは I 部の 3.4. で扱ったもので明治期の作品にもよく出てくるタイプである。これらはすべて地の文であるということも指摘しておきたい。ここまでの例からわかるように、江戸時代になると Q の NC 型自体非常に使用が減少すると共に、使用されたとしても地の文でかつ非制限的な場合に限るということになる。これは仮説をほぼ支持する結果となっている。

⁴⁹ 三味線をひき歌などを歌ってものを乞う盲目の女（本文注より引用）

4. 2. その他の例

注目すべきことは、『東海道中膝栗毛』には、‘が格’‘を格’以外の数量表現が Q の NC 型としては出てこない。現代の例や明治期の例ではこのタイプが多かったのにそれが見つかからない。少数ではあるが、(43) (44) のように、NQC 型で、その他の格を表している例が見つかる。

(43) トちやわんふたつに、あまざけをくんでさしいです。

(44) ちやのみぢやわんふたつにあけて…

これは非常に興味深い例である。明治期の使用状況との違いも明白である。以後、もう少しデータを増やして行けば、数量表現における Q の位置がどのように変遷してきたかを通時的に描けるのではないだろうか。

(45) よふたよたよた五しゃくの酒に、壺合のんだらさままたよかる

一見 Q の NC 型のように見えるが、この例については 4 章で扱った属性 Q なのか数量表現なのかがはっきりわからない。‘五しゃく’は酒の属性とも考えられるし、数量とも考えられる。ここでは判断を保留したい。

また、数詞が‘一’のときは Q の NC 型が多く見られるが、2. 節で断ったとおり、‘一’に関しては 10 章でまとめて述べる。

5. まとめ

ここで扱った例は決して十分な量であるとは言えない。よって、集めたデータの範囲内によるものであるという断りをした上でまとめたい。通時的な考察として、明治時代・江戸末期の作品を分析してきた。I 部で見たような現代の数量表現は、Q の NC 型が多用されており実例はいくらでも見つかったが、明治期の文献、江戸の文献というように時代を遡っていくと、どんどん Q の NC 型が減っており、使用されていても非制限的な使用であった。少なくとも I 部で拡張例として扱っていたタイプは明治・江戸の集めたデータ内ではほとんど見つからなかった。

ただし、本章では、時代をさらに溯るとどんどん使用が減っていくだろうということを主張するつもりはない。三保 (2006) では『万葉集』の「布多都の石を」という例が、奥津 (1983) では『古事記』の「…吾一日に千五百の産屋立てむ」という例が挙げられてお

り、QのNC型の使用例と考えられる。また『平家物語』⁵⁰を少し探せば、QのNC型がいくつか見つかる。

(46) 又御心中に三つの御立願あり。

(47) 件の国へは三つの道あり。

(48) せめての謀にや、千本の卒塔婆を作り、…二首の歌をぞ書きつけける。

これらの解釈には様々な可能性がある。(6) 本章Ⅱ部の仮説を支持した上で、これらの文脈を詳細に分析しながら非制限的連体修飾であることを主張する可能性や、仮説を一部改定して数量表現は長い期間で見ると循環しているという主張も可能かもしれない。また今回のデータでは量的に不十分であり、仮説を放棄しなければならないという可能性もある。いずれにせよ、データを増やして、さらなる検討が必要である。稿を改めて取り組みたい。

⁵⁰ 『新訂 平家物語 上』(朝日新聞社)より。『平家物語』に関しては大森文子先生(大阪大学言語文化研究科)のご指摘によるものである。

第6章 NQC型数量表現*

本章で論じる NQC 型数量表現は、「学生 3 人が 反対シタ」のように名詞の直後に数量詞が来るタイプである。名詞句の部分だけを取り出すと、NQ は Q の N よりもすわりが悪くなる。そのすわりの悪さはどこからくるのか、またどんな文脈を与えればすわりがよくなるのか、という問題設定を立ててここで議論する。「NQC 型は Q に重点を与えるものである」という仮説をたて、Q に重点があたるような文脈があれば NQC 型のすわりがよくなるという主張を行なう。

1. 先行研究と本章の目的

NQC 型について触れている論文に奥津（1969）がある。

(1) 太郎ハ本 3 冊ヲ買ッタ

(1) の例文において、「本 3 冊」が目的語になっていること、「太郎ガ買ッタ本 3 冊」のように連体修飾を受けることなどから、「本 3 冊」が全体として名詞句をなすと述べている。また、「太郎ハ本ヲ買ッタ」「太郎ハ 3 冊ヲ買った」の例のように単独で格助詞がとれることや、「太郎ガ買ッタ本」「太郎ガ買ッタ 3 冊」のように連体修飾を受けて名詞句を作ることができるのを理由に「本 3 冊」は 2 つの名詞からなる名詞句で、「総理大臣 佐藤栄作」のように一種の同格名詞構造を持つと述べている。NQC 型が 2 つの名詞からなる名詞句であるという見方については本章も従う。

そして宇都宮（1995b）では、NQC 型を「数量詞が名詞に直接（格助詞をはさまないで）後置される用法（宇都宮 1995b : 8）」として以下の例を挙げている。

- (2) a 男 3 人 / お金全部 / 生徒一人一人 / 車何台 / 税率 3 % / 本数冊 が / を / で / に
b * お金たくさん / * 生徒大勢 / * 燃料少し が / を / で / に

この例文をみるとわかるようにこの論文では数量詞の定義をかなり広くとっており、以下の 7 種類を数量詞としている。

* 本章は岩田一成（2006c）「日本語数量詞名詞的用法の位置と意味」の中の一部を取り上げている。

- ① 定数：「3人」「5つ」「両方」「100m」など
- ② 全数：「すべて」「ぜんぶ」「みんな」「ぜんたい」など
- ③ 個別数：「一人一人」「おのおの」「めいめい」など
- ④ 部分数：「半分」「3割」「80%」など
- ⑤ 量数：「たくさん」「多く」「かなり」「相当」など
- ⑥ 概数：「数人」「いくつか」「大体」など
- ⑦ 疑問数：「何人」「いくつ」「どのくらい」など

その上で、この分類を基に NQC 型が使用できるものには制限があるという指摘をおこなっている。つまり、(2) の例のように、数量詞の中にはこの形式に使えるものと使えないものがあるというのである。本論文では、数詞＋助数詞からなるものだけを対象として扱っており、以下の議論では本論文の議論と関わりのある部分を中心にとりあげる⁵¹。

以下の引用を見られたい。

名詞にはよく「課長島耕作」「正義の味方月光仮面」などのように二つ並べて同格的に表現する用法があるが、数量詞の直接後置はこれに近いのではないかと思われる。(宇都宮 1995b : 8)

この指摘に基づいて、「後置される名詞に固有名詞が多いのと同じように、後置される数量詞は特定されているものであること (宇都宮 1995b : 8)」という条件をあげている。つまり、NQC 型数量表現は、Q が特定でなければならないということになる。そこでは、特定という概念の定義が細くなくされているわけではないが、その定義をどう立てたとしても、(2) の例のように‘数冊’‘何台’が NQC 型として使用されている以上、この条件は難しいのではないだろうか⁵²。また第 5 章で指摘した通り、益岡・田窪 (1992) など多くの先行研究で、「特定のものをさす」というのは、一般に Q の NC 型の条件としてあげられている。つまり、宇都宮 (1995b) の指摘だけでは、NQC 型をうまく説明することができないのである。よって本章では、特定性という条件ではなく別の条件を立てる必要がある。

Downing (1996) では、豊富な実例を基に、NQC 型の特徴は数に関する情報に際立ちを

⁵¹ 宇都宮 (1995b) は数量詞の体系的把握を目指すものであり、NQC 型の数量表現の特徴を明らかにすることをその中心目的としているわけではない。

⁵² これは論文の中でも著者自身が指摘しているところである。

与えないところにあるという指摘を行なっている。“In neither “standard” nor “exhaustive” uses of the Type 2 construction (NQC 型を指す：岩田注) , then, is the information about number presented as salient.” とあり、この指摘の根拠としている例を見ていく。

- (3) あなたがた二人をのっけると、ほかの人を乗せてあげられない。
- (4) 太郎たち五人が入ってきた。
- (5) 母の亡くなった夜、人々の同情は、かえこ一人に集まりました。

(Downing1996：原典はローマ字表記)

NQC 型は (3) (4) のように、小説の登場人物として既出のものを繰り返して使われることが圧倒的に多いと述べ、たとえ既出ではなくても (5) のように数量情報が空の例があると指摘している。つまり、(3) (4) においては、‘あなたがた’や‘太郎たち’が何人かはすでに聞き手に伝わっており、(5) では‘かえこ’は固有名詞なので一人に決まっているのであるから、どちらも数量情報は低いというのである。これは実例に基づいた堅実な主張であるが、相反するかのような主張も出ている。

益岡・田窪 (1992) は、NQC 型のことを、「名詞に後続して数量を明示する働きをするもの (益岡・田窪 1992：98)」とし、以下の例をあげている。

- (6) 60 円切手 7 枚を同封して、事務所に申し込むこと。

そこでの指摘は短く簡潔なもので、これ以上の説明は何も行なわれていないが、中川・李 (1997) でも同様の指摘がある。

- (7) a 彼女は最後に一人の彼女より 20 歳年上の男に嫁いだ。

b 彼女は最後に彼女より 20 歳年上の男一人に嫁いだ。 (中川・李 1997)

この例文 b が奇妙になるのは、a に比べて数量情報の読みが優先されるからであるという説明をしている。益岡・田窪 (1992)、中川・李 (1997) の例はどちらも、詳しい説明をしているわけではないが、NQC 型の特徴を Q に際立ちを与えているものとしてとらえているかのようなのである。本章で主張する内容もこれらと同じ立場である。その根拠についてこれから詳しく論じていく。

本章の目的：NQC 型数量表現の使用に関わる文脈条件を明らかにする。

2. NQC 型数量表現の特徴

2. 1. 仮説

第 5 章で述べたが、数量表現の使用状況は、圧倒的に NCQ 型と Q の NC 型が多い。使用の比較的少ない NQC 型は、Q の NC 型と同じ名詞句内数量詞用法である。両者における Q が名詞句の中にあることは、どちらにも助詞が接続できることからわかる。

(8) 学生 3 人が…

3 人ノ学生ガ…

よって、Q の NC 型を比較対象にすることで、NQC 型の特徴がわかると考える。例えば名詞句の部分だけが使われているものに映画や小説のタイトルがある。それらを集めてみると、Q の N が一般的であり、NQ という並び方は少しすわりが悪い。

(9) 「三匹の子豚」「二人のロッチ」「七人の侍」「白雪姫と七人の小人」

‘(9) ? 「子豚三匹」「ロッチ二人」「侍七人」「白雪姫と小人七人」

これら単独ではすわりの悪い用法も、ある文脈に入れば自然になるわけである。その文脈とはどのようなものかをここで見ていく。それらの文脈が NQC 型の成立に関わる条件になると同時に、NQC 型の特徴ということになる。

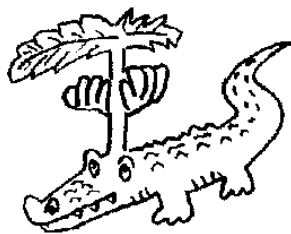
1. で少し触れたように、本論文において、NQC 型は Q を重点として表現するものであるという主張を行なう。その根拠となる日本語の情報構造に関する指摘に、「文中の要素は、通常、旧情報（より重要でない情報）から新情報（より重要な情報）へと配列される。（高見 1998c : 98）」というものがある。これは久野（1978）や Quirk et al.（1985）を基にして主張されている。ここでいう情報構造とは、文の中の位置関係を述べたものであり、本論文のように名詞句の中の位置関係にそのまま適用するのは少し雑であるが、名詞句の場合も同様に後ろが重点であることを確認したい。ここでは数量表現ではないが、日本語の「名詞+名詞」構造の例を挙げてみる。

(10) ワカメサラダ サラダワカメ

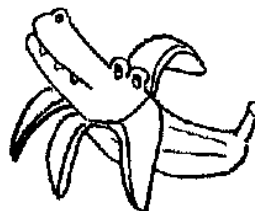
この 2 語を比べてみると、‘ワカメサラダ’は「ワカメがのっているサラダ」であり、‘サラダワカメ’は「サラダ用のワカメ」である。この例から、日本語の「名詞+名詞」構造は、後に来る単語の意味を中心に理解されるといえる。これはまったく新しい造語をしたときにも言えるようである。大津（1996）では、‘バナナ’と‘ワニ’を足してみるとどんな意味解釈が得られるかということについて述べている。そこでは様々な組み合わせが紹介されているが、‘ワニバナナ’は‘バナナ’の一種であり、‘バナナワニ’は‘ワニ’の

一種であるという解釈がなされるとしている。以下にはそこで紹介されていた例の中の一部を挙げる。

(11) 新しい造語



バナナワニ



ワニバナナ

(大津 1996) より

ここでは、バナナワニ、ワニバナナといった造語でも後ろの単語の意味を中心に理解されるということになる。この構造が NQC 型にも適用されるのではないかと考えて仮説を立てたい。

ここでは「名詞+名詞」構造の複合語が NQC 型と全く同じであると主張するつもりはない。ただ、1.節で述べたように奥津 (1969) では NQC 型が名詞と名詞からなるという指摘をしており、本論文も基本的には同じ立場である。Q がどういった名詞なのかという議論は本章の 4.節で詳しく論じるが、とにかく NQC 型において Q が名詞 N に後続して全体として名詞句を形成していることにより、「名詞+名詞」構造との類似性が認められる。その類似性を基にした類推で NQC 型にも同様の解釈がなされるのではないかと考える。ここでいう類推とは、「名詞が連続するときは、後ろを中心に考える」というスキーマが「名詞+名詞」構造の複合語から、NQ に拡張されるというものである。そこで、以下のような仮説を立てて、以後検証していきたい。

(12) 本章の仮説

: NQC 型は N と Q の連続において、Q に重点を置いて表現したいときに用いる

ここでいう Q は、「数詞+助数詞」をかたまりとして捉えている。表現によっては重点が数詞よりであったり、助数詞よりであったりするが、日本語はこの二つを分けて使用することはないので、特に分けて考える必要はない。仮説でいう重点とは、先行研究で「数量を明示する働き (益岡・田窪 1992)」、「数量情報の読みを優先する (中川・李 1997)」などと指摘されている内容のことである。焦点化や強調といった操作に関わっていると考えられる。

2. 2. Downing (1996) 再考

ここで問題になってくるのは、一見反対の主張をしているかのように見える Downing (1996) の主張である。1. で紹介したように、NQC 型の特徴は数に関する情報に際立ちを与えないところにあると述べている。根拠となる例文を再掲する。

(13=(3)) あなたがた二人をのっけると、ほかの人を乗せてあげられない。

(14=(4)) 太郎たち五人が入ってきた。

(15=(5)) 母の亡くなった夜、人々の同情は、かえこ一人に集まりました。

これらは確かに、(13) (14) のように既知の数であったり、(15) のように固有名詞の数であったりと、数としての情報量は低い。しかし、ここで注意したいのは、この指摘は NQC 型における N と Q を比較して行なっているものではなく、他の形式における Q と NQC 型における Q を比較しているという点である。すべての例文において Q がわかりきっている数であるのは確かだが、N もすべて旧情報である。

(13) (14) は数量詞の代名詞的用法と呼ばれるものに人称代名詞や固有名詞が付加されたものであり、数量詞が代名詞として使われている。ここでは、それぞれを数量詞だけにしても意味は通じる。

‘(13) 二人をのっけると、ほかの人を乗せてあげられない。

‘(14) 五人が入ってきた。

繰り返し出てくる登場人物であれば、文脈があれば数量詞だけで代名詞的に使用が可能である。第 9 章では、こういった数量詞の代名詞的用法に指示詞や代名詞といった場指示語 (deictic words) が付加されることで、指示物の取立てを行っているという分析を行う。細かい議論は 9 章に回すが、ここでは、代名詞的用法では、数量詞に指示詞や代名詞が付加されると分析する以上、重点は Q のほうにあるということを確認したい。なお、以下の議論でも「人称代名詞+Q」からなる NQC 型は、代名詞的用法として扱うため本章では扱わない。

(15) については、Downing 自身も指摘しているが、‘一人’を付加することで、“often carrying the implication that the number is smaller than might be expected (数が予想されるものよりも小さいという含意を持っている).” (Downing1996:230)としている。つまりわざわざ言わなくても数字はわかるのに、それを言うことで、何か別の含意が出てくるのである。逆に言えば、その含意を出すためには Q が必要なのである。よって、数としての情報量が低いことと、NQC 型の Q に重点を置くという主張は、矛盾したものではないの

である。数としての情報が低い代わりに、Q が別の機能を持っており、そこに重点を置くことにより、この形式が成立している。

(16) しかしそれにしても、当時は東京でも一ヶ月十円もあれば、夫婦二人が食べていた時代である。(落日)

この例も同様に、‘夫婦’というのは‘二人’に決まっているのだから、数としての情報量は低い。(16) の引用部分だけではわからないが、この引用部分の前に、主人公野口英世が無駄使いをしたエピソードが挙げてある。その後続く(16)では、主人公の野口英世が無駄使いしたお金と、当時の一般的な夫婦が消費するお金を比べており、主人公一人対夫婦二人という対比に重点が置かれている。こういった対比文脈での焦点は何かと考えると、NQC 型の Q に重点があるということが明らかになる。

Downing が NQC 型の特徴を数情報の低さだと考えた根拠としては、集めたデータに(13)(14) タイプのものが圧倒的に多かった⁵³というのも挙げられるであろう。確かに小説だけを見ると、(13)(14) のような代名詞的なものが多い。しかし、小説だけでなく様々なデータをあたってみると、本論文の主張を支持する例がたくさん出てくる。

3. さまざまな使用例

3. 1. 実例：その1

本論文で主張する仮説は、NQC 型は NQ の連続において Q に重点を置く、というものである。ここではまず、NQ だけを取り出して使われているような場面から例文を出してみる。これは、中国語の教科書に助数詞の解説として挙げられているセクションである。

(17) 中国語助数詞の解説

～个 (ge)	一个面包	(<u>パン1個</u>)
～杯 (bei)	两杯咖啡	(<u>コーヒー2杯</u>)
～本 (ben)	三本书	(<u>本3冊</u>)
～张 (zhang)	四张电影票	(<u>映画のチケット4枚</u>)
～瓶 (ping)	五瓶啤酒	(<u>ビール5本</u>)

この例は、『1年生のコミュニケーション中国語』(劉穎/白水社)という中国語の教科書に載っているものであるが、他の教科書も同様の扱い方をしている。一番左で中国語の助

⁵³ ‘the vast majority’ という表現が使われている (Downing1996:228)。しかし、データの内容は小説と会話から取っており、少し偏りがあると考えられる。

数詞を紹介し、その使用例を次の列で挙げて、一番右でその日本語訳をつけている。ここでの日本語訳はすべてNQの順序になっている。助数詞を説明するための解説であるから、当然情報の重点はQになる。ここでは、パンやコーヒーの訳は大切ではなく、助数詞の訳がより重要な情報となる。

また、助数詞の確認テストによる実験が『数え方の辞典』（飯田朝子／小学館）で紹介されており、そこでも数量表現はNCの形で使われている。これは、缶に入ったものを数えるときにどういった助数詞を使うかを確認するためのテストである。日本人に質問すると、同じ缶の絵を見せても、アスパラが入っているかジュースが入っているかで異なった助数詞を使っているという報告をしている文から下の例文を抜き出した。

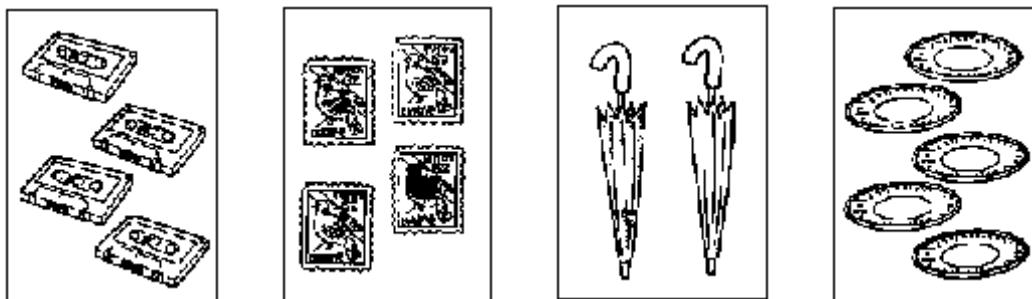
(18) (缶の絵を見せながら)「これはジュースの缶です。何と数えますか？」

「缶ジュース1本」

ここでは、「何と数えますか」という質問に対する答えなので、情報の重点は数のほうにあるといえる。実際にインフォーマントの答え方はいろいろありうるが、それらを報告する際に(18)の例のようにNQ型が使われているというのは、本研究での仮説を支持するものである。

次の例は日本語教育で使われるゲームで、『日本語コミュニケーションゲーム80』（CAGの会編／ジャパントイムズ）から引用したものである。

(19) 助数詞神経衰弱用カードの例



(19)のようなカードを使って日本語の既習項目を確認するというのがこのゲームの目的である。ここでの既習項目というのは助数詞である。さまざまなものに対応する助数詞を習得できているか、このカードで神経衰弱をすることによって確認していく。例えば、切手のカードとお皿のカードをめくった時の発話として、(20)のような発話をするのがルールになっている。

(20)「切手4枚とお皿5枚」

神経衰弱なので、‘4’と‘5’ではめくったカードをもらうことはできないが、ここで注意したいのは、NQC型が使われているということである。

‘(20) ? 「4枚の切手と5枚のお皿」

QのNC型を使うと少し違和感が出てくるのは、助数詞の習得を確認するというゲームの目的に反するからであろう。もちろん、‘切手’や‘お皿’といった語彙の確認であれば、‘(20)の形も問題なく使える⁵⁴。この例からもNQC型はQに重点を置くという仮説(12)が支持される。

また、料理のレシピなどでもNQC型がよく使われている。

(21) 小麦粉 120gに玉子2個を加えてください。

これらの‘120g’の部分は測定類別詞が助数詞として使われている。レシピでは量が大切な情報になる⁵⁵。例えば、パンケーキを焼くためにレシピを見るとする。その時、小麦粉や玉子が必要なことは当然であり、レシピではそれらの材料をどれくらい使うのかという量に焦点が当たることが多い。レシピでなくても測定類別詞の量というのは重要である。

(22) 清作の欲しかった教科書は標註漢文教科書全四巻で、合わせて三円という高価なものであった。当時白米一升が十二、三銭であったから、大変な額である。(落日)

例えばこの文脈では、教科書の値段と米一升を比較している。米というのはそれ自体では価格がはっきりしないので、その量が決まらない限り、価格の比較という文脈にあてはまらない。つまり測定類別詞であるQの部分が重点になってくるのである。

3. 2. 実例：その2～新聞

Downing (1996) では、NQC型は使用例がQのNC型よりも圧倒的に少ないという指摘であったが、2.2.でも指摘したとおり、そこでは小説と会話からデータを取っていた。ここでは、新聞というメディアを取り上げて、数量表現はどういう使用状況にあるのかみていきたい。

⁵⁴ もちろん常識的に考えて、こんなカードまで準備して‘切手’という語彙の確認をするなどというクラス活動は考えられない。

⁵⁵ 同様の指摘は加藤[美](2003)にもある。

新聞から抜き出した数量表現

	Q の NC 型	NQC 型	計
朝日新聞	28	52	80

(朝日新聞朝刊 対象期間 2003/04～05⁵⁶)

この数字で十分な量があると主張するつもりはないが、一応の目安として Q の NC 型との分布状況がわかるのではないだろうか。NQC 型が新聞ではかなり使用されているという状況がわかる。新聞という文体的な特徴ももちろんあるだろうし、字数に制限が加えられるので、Q の NC 型よりも字数の少ない NQC 型が使われるという説明もできそうである。しかし、本論文の仮説から説明するとすれば、新聞というメディアは数量表現が報道の中心になりやすく、必然的に数字に重点を置いて表現する NQC 型が好まれるようになるとも言える。

ひとつの証拠として、死亡に関わるニュースを集めてみた。事件を扱うニュースにおいて、死亡者の数は注目度が高い。死者の数はその事件の程度を示すスケールになっていることは‘死者 5000 人を出した〇〇大震災’などの表現が使われることからわかる。これは死亡という出来事が人々へ与えるインパクトの考えると当然である。集めたデータの中で死亡者の数に関わるものは 80 例の中で 10 例あった。それらはすべて NQC 型が使われている。以後取り上げる例は表にある通り、2003 年の朝日新聞であるから、月日のみの表示とする。

- (23) ロイター通信によると、バグダッド東部での激しい戦闘で少なくとも米兵 2 人が死亡した。4.8
- (24) 重症急性呼吸器症候群 (SARS) による肺炎の流行が続いている香港で、香港政府は 8 日、新たに 45 人の感染者が入院、高齢者 2 人が死亡したと発表した。4.9
- (25) 米兵 2 人とスペインとドイツの従軍記者 2 人が死亡した。4.8
- (26) 戦闘で民兵約 300 人と、英兵 3 人が死亡したという。4.8
- (27) …ロイター通信によると同通信のウクライナ人テレビカメラマン 1 人が死亡、記者や技術者 3 人が負傷した。4.9
- (28) …AP 通信によると、ほかにスペイン人テレビカメラマン 1 人が死亡した。4.9

⁵⁶ 期間中に新聞に掲載された数量表現を無作為に抽出した。

(29) バグダッド市内で 8 日、報道機関への攻撃が相次ぎ、記者、カメラマン合わせて 3 人が死亡した。 4.9

(30) AFP 通信によると、この戦闘で米兵 1 人が死亡、約 30 人が負傷した。 4.11

(31) AFP 通信によると、海兵隊員 1 人が死亡し、3 人が重症。 4.11

(32) 火は 20 分ほどで消えたが、蓑原さんの子供 3 人が煙を吸って病院に運ばれ、3 人とも 25 日午前 0 時過ぎに一酸化炭素中毒で死亡した。 4.25

これだけの例で断定することはできないが、数字の重要度によって NQC 型が選択されて使われているのではないかと予想は可能である。

(24) の例などは、Q の NC 型と NQC 型が使い分けられている。つまり SARS の蔓延という事件にとって、死者の数というのは注目度が高く、感染者の数よりも重要度が高いので NQC 型が使われているという説明ができるのではないだろうか。もうひとつの解釈として、この例文では、感染者の数は 45 人であるが、高齢者の数は 2 人ではない。つまり不特定数の高齢者の中から、死亡した 2 人を取り出しているとも考えられる。こう解釈しても Q が重点であるという仮説で説明は可能であろう。

3. 3. 実例：その 3～目録としての NQC 型

Downing (1996) でも紹介されているが、NQC 型には、いくつかの NQC 型を並列助詞‘と’で結んで使用する「目録，リスト (inventories and lists) としての用法 (Downing1996)」がある。

(33) ベッド一つとテーブル一つで部屋はいっぱいで・・・ (Downing1996)

この例はあくまで周辺的なものとして扱われており、スタンダードは (13) (14) のような代名詞的なものとか、(15) のような数が予測できるものであるとしていた。ところが、実際にはこの、目録やリストとしての例はよく目に付く。

(34) 民間の経験や知識を地域の活力につなげたいと募集は昨年から始めた。昨年は事務系 10 人と技術系 5 人を採用した。2003.9.11. (朝) ⁵⁷

(35) 団体の指導者と見られる女性 (69) を含む女性 24 人と男性 25 人が分乗していた。他に猫 10 匹とインコ 2 羽がいた。2003.5.7 (朝)

⁵⁷ この例は 3.2. で用いたデータとは別に収集したものである。

(36) 志乃「赤城くんからプレゼントされたのは」「自転車だけじゃないのよ。」

三四郎「…」

志乃「クマのプーさんのぬいぐるみとウサギさんのキーホルダーと石焼きいも 3 個
とズワイガニ 1 ぱいとマツタケ 2 本と…」(1・2の)

これらの例で NQC 型が使用されるのも、仮説 (12) から説明が可能である。目録やリストといったものは、その性質上、全く無関係なものをつらつらと並べるわけではなくて、目録の中の項目には一貫性、統一性といったものが当然ある。ここで並列助詞‘と’についての説明を引用してみると、「同種のを対等の関係で並立させ、それらを一まとまりにし、一体言の資格とする。(阪田 1971 : 540)」とある。つまり、「A と B」というふうに並列させるときは、‘A’ と ‘B’ が同種のものであるという前提があるのである。この ‘A’ と ‘B’ に数量表現が使用されるとき、Q の NC 型だと、一貫性や、統一感といったものが見えにくくなる。

‘(34) ?…去年は 10 人の事務系と 5 人の技術系を採用した。

‘(36) ? 志乃「…3 個の石焼きいもと 1 ぱいのズワイガニと 2 本のマツタケと…」

‘(34) ‘(36) は、同種のもので並んでいるとは解釈しにくいし、それらが一まとまりになっているという感じがしない。NQC 型にすると、仮説 (12) から、数字に重点を置いた形式となる。つまり、「A と B」という並列において、Q である数字が連続しているという一貫性、統一感が出てくるのである。‘A’ や ‘B’ といった項目のそれぞれの重点は Q (数字) であり、それぞれの項目間は数という共通カテゴリーで一貫性が成立するのである。これは並列助詞を使わなくても、目録やリストなら、すべて当てはまる特徴であると言える。以下のような例においても、目録、リストとして使われる場合はまず NQC 型が使用されるのである。

(37) レイエス国防相によると、派遣団は国軍兵士 300 人、警官 100 人、医師や看護師
など専門家 100 人で構成される。2003.4.11. (朝)

(38) 米国防総省は米軍の死者を 102 人、捕虜 7 人、行方不明 11 人と発表した。

2003.4.11. (朝)

ここでは、目録、リストとしての文脈で数量表現が使用される場合は、それぞれの一貫性、統一感を成立させるために NQC 型が使われるということを主張した。

4. 名詞としての数量詞

ここまで、NQC型はQに重点を置いた表現であるという主張を行ってきた。1節の奥津(1969)の指摘に従い、NQC型のQは名詞的なものであるという立場で議論を進めてきた。ただし、一言で名詞といってもさまざまなものがあり、名詞性の濃いものから薄いものへといくつかの段階が見られるという指摘がされている(寺村1968)。そういった指摘を踏まえて、この節では、Qの名詞性について論じたい。その段階はどの程度のものであるか、ということをお明らかにしておきたい。

寺村(1968)は、名詞を下位分類するにあたって、その基礎となるいくつかの特性をたてている。その中で(39)のワクにはまる名詞の特性を、「実質(実体)性」と呼んでいる。

(39) コ(ソ, ア)レハ———デス。(寺村1968)

「実質(実体)性」と呼ばれる特性は、「最も広範囲の名詞を入れることのできる枠のようである(寺村1968:7)」と指摘しており、「納まらないのは代表的にはいわゆる形式名詞で、「時」を表すもののうち副詞性のもものなじまない。(同上)」としている。普通名詞はどんなものでも入るが、確かに形式名詞や時の名詞は違和感がある。

(40) これはペンです。

(41) これ(こちら)は学生です。

(42) ?これはところです。

(43) ?これは昨日です。

もちろん特別な文脈を考えれば(42)(43)の例も使用可能ではあるが、普通の状況では不自然である。数量詞もここに納まらないものではないだろうか。

(44) ?これは3人です。 ?これは3個です。

特別な文脈がないと納まらないという点では形式名詞や時の名詞と共通している。名詞的になったり副詞的になったりという点では時の名詞と共通しているし、実質的な意味を欠いているという点では形式名詞と共通している⁵⁸。数量詞は数詞と助数詞からなるが、数詞が表すのは「1,2,3,4…」という数の情報で、助数詞が表すのは「人, 個, 本…」などといったカテゴリ情報である。どちらも情報量としては非常に低く、実質性のなさにつながるのである。実際に例を見ても、代名詞的な用法が使用できる文脈がなければ、単独で使用されると非常に抽象的になる。

(45) 五人のキャンプは労働力が多いから楽だ。一人が何か一つのことをやればいい。(川)

⁵⁸ 木枝(1937) 他で数量詞を形式名詞であると指摘している(第2章参照)。

この例は、数量詞が何か特定の指示物を指して代名詞的に使われているのではなく、ただ漠然と「五人の人間が集まって行こう」という意味で使われている。数量詞の単独使用は、代名詞的な場合を除き、このように意味の抽象性を伴う。

NQC 型は「課長島耕作」「正義の味方月光仮面」などのように二つ並べて同格的に表現する用法に近いという指摘がされていることを 1. で紹介した。固有名詞が後ろに来ているこれらの例は、言い換えれば実質性の高い名詞（固有名詞）が後ろに来ている。つまり名詞の連続では実質性の高い名詞が後ろに来るのに、NQC 型においては、実質性の低い Q が後ろに来ているのである。ここが単独で使用したときの NQC 型のすわりの悪さにつながっているのではないだろうか。例を再掲する。

(46= (9)) 「三匹の子豚」「二人のロツテ」「七人の侍」「白雪姫と七人の小人」

‘(46= ‘(9)) ? 「子豚三匹」「ロツテ二人」「侍七人」「白雪姫と小人七人」

Q に重点を当てるような文脈の中で使用されると、これらのすわりの悪さが解消されるというのは、本節で繰り返し主張してきたことである。ここでは、名詞として見たときの数量詞を考えると、「実質（実体）性」という特性が低いという特徴があることを指摘しておく。

5. 重点について

本章で述べた仮説では、Q に重点を置いて表現したいとき NQC 型を用いるとした。これは第 4 章で述べた NCQ 型数量表現の特徴と類似している。ここではその違いを指摘しておきたい。第 4 章では以下のように NCQ 型の仮説をたてた。

(47) NCQ 型は数量表現の基本形であり、無標のフォーカスである名詞句に関連する Q を焦点化した形式である

本章の NQC 型に関する仮説は以下に再掲する。

(48= (12)) NQC 型は N と Q の連続において、Q に重点を置いて表現したいときに用いる

例文を再掲する。

(49) 学生ガ 3 人反対シタ (NCQ 型)

学生 3 人ガ反対シタ (NQC 型)

本章で行なった重点という主張は、2.1. で述べたように、焦点化や強調といった操作を想定している点で、(47) における焦点化と類似している。相互の表現を言い換えてもかまわな

い。ただ、本章の主張は、あくまで名詞句内での重点であり、NCQ 型の場合は文レベルにおける重点である。本章で扱った名詞句内に存在する数量詞と名詞句外に存在する数量詞は本質的に異なり、これらの違いは 8 章で改めて論じたい。

本章で主張した重点という議論は、「名詞+名詞」という構造からの類推を NQ に当てはめることによる意味論レベルでのものであると考える。しかし、焦点や強調といった操作のために、Q の NC 型ではなく NQC 型を選択するのは語用論レベルの問題であると考え。ただしここでは、意味論と語用論は連続するものであると考えているので、この両者の境界線を明確に定めるための議論は行なわない。

6. まとめ

この章では、NQC 型の数量表現について先行研究を概観し、3.節で「NQC 型は Q に重点を与えるものである」という仮説を立てた後、それを支持する実例を 4.節で見してきた。5.節では数量詞が名詞として使われるときの特性について、「実質（実体）性」という概念で説明を試みた。そこでは、数量詞と、形式名詞や時の名詞との共通点を指摘した。これは以後の議論とも関わってくる重要な特徴であるので、改めてここで確認しておきたい。

第7章 NのQC型数量表現*

本章では、NQC型と似ているが少し違う、NのQC型を扱う。「出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ」のようなタイプを例として第1章で紹介したが、こういった部分数を表すタイプ以外にどのようなものがあるのかを見ていく。結論としてはこのタイプには全部で3種類あることを示す。また、NのQC型と連体修飾の外の関係との共通点を指摘する。そして、外の関係の意味を考察することで、NのQC型に関わる使用制限も明らかになるという主張を行なう。

1. 先行研究

先行研究を概観する前に、NのQC型は形式だけで規定すれば広く雑多なものが含まれるので、ここで対象となるNのQC型を定義しておく。第1章で述べたように、本論文の対象となる数量表現は「Nについてその数とカテゴリー情報をQが表すもの」であった。よって、以下のようなものは対象にならない。

(1) ジャージの二人，屋上の二人，荒野の二人…

これらの例は、Qの助数詞がNと一致していないので、Nの数をQが表しているものではない。‘ジャージの二人’では、Nであるジャージの数は、‘一人，二人’と数えるべきものではないからである。

この形式は他の形式に比べて、非常に使用例が少なく、先行研究もさほどない。また、具体的に例を見ていくと、使用に制限があることがわかる。それらの制限を明らかにした上で、その制限がどこからくるのかを明らかにするのがこの章の目的である。

本章の目的：NのQC型にはどのようなタイプがあるかを記述し、それらの使用にかかわる文脈条件を明らかにする。

* 本章は岩田一成 (2006b) 「日本語数量表現 N の QC 型に関する一考察」を基に、一部加筆修正を加えたものである。

1. 1. 慣用的な N の QC 型

N の QC 型を扱っている論文は少ない。少し古い山田 (1908) では、数量表現の様々な形式のひとつとして、N の QC 型らしきものをあげている。そこでは「名詞を連体語として数詞の上におく (山田 1908 : 220, 引用元の漢字は旧字体)」という説明をして、以下の例がひとつだけあげられている。

(2) かかる時に友の四五人も来れば嬉しからむ。(山田 1908 : 引用元の漢字は旧字体)
現在、実例を探してみても同様の例はいくつか見つかる。

(3) 「女の二人や三人いないようでは、部下が統率出来ないでしょう」

と笹川良一が言うと、山本は、

「君は一体、何人ぐらいいるんだ？」

と聞き返して来た。(山本)

(4) 豪太のエピソードは本人が忘れても周囲の人が忘れてはくれない。本の二冊や三冊は出来るくらいだ。(ネット : セーラ)

このタイプは慣用的に用いられて、それぞれ Q の数がたいした数ではないという意味を含意している。(2) では、「四五人というのは少ないけれど、それでも私はうれしい」という意味である。(3) (4) も同様に、(3) では「女性を二人や三人持つというのはたいしたことではない」、(4) では「エピソードがたくさんあるから、本を書くにも二冊や三冊は簡単である」といった意味で用いられている。このタイプは、(3) のように、助詞がないことが多く、あったとしても‘は’‘も’などの取立て助詞であり、なんらかの数量強調以外は、助詞が付加できない。つまり、N の QC というように数量詞 Q が助詞 C に接続するような形式ではない。また、すべての例において、以下のような言い換えができ、これは NCQ 型として扱うことができる。

(2)' かかる時に友が四五人も来れば嬉しからむ。

Q の後ろに助詞 C が付加できないこと、NCQ に書き換え可能なことなどの理由により、これは本稿の対象となる N の QC 型には含めない。

1. 2. 部分数を表す N の QC 型

NCQ 型の数量表現が他のタイプから遊離して派生されると考える移動の議論 (第 2 章 2 節参照) において、奥津 (1983) は、以下のような規則を立てている。

(5) NQC 型 ⇒ NCQ 型

N / QC 型 ⇒ NCQ 型

(6) 1. 昔或ル所ニ 仔豚3匹ガ 住ンデイマシタ

⇒ 昔或ル所ニ 仔豚ガ 3匹 住ンデイマシタ

2. 或ル日悪イ狼ガ ソノ仔豚ノ(中ノ)2匹ヲ 食ベテシマイマシタ

⇒ 或ル日悪イ狼ガ ソノ仔豚ヲ 2匹 食ベテシマイマシタ (奥津 1983)

そこでは、NのQC型は、定名詞をNとする(6)2.のような文の基底形として提示されている。遊離や派生関係といった議論はここではしないが、(6)2.のようにQが部分数を表すときの基底形をNのQC型としているところを見ると、NのQC型が部分数を表すという特徴だけを取り上げているということである。第1章で紹介した『日本語百科大事典』に出てくる例もこれと同じで部分数を表すものである。ここに再掲する。

(7) a 3人ノ 学生ガ 反対シタ (QノNC型)

b 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ (NノQC型)

c 学生ガ 3人 反対シタ (NCQ型)

d 学生3人ガ 反対シタ (NQC型)

(『日本語百科大事典』1988)

1. 3. 付加的同格 (summative appositive)

これまでの先行研究は、NのQC型を研究の対象としているわけではなく、他の議論との関わりで少し触れているといった程度のものであった。この形式について詳しく論じているといえるのは、Downing (1996)がある。そこでは多くの実例をもとに、NのQC型の特徴を説明している。そこで、NのQC型としては、以下のような例が挙げられている(例文は原典においてすべてローマ字表記)。

(8) 彼女と妹のかえこの二人は、その土地を元手に食べているのです。

(9) ただ違うのはさ、テレビは赤と緑の二色の代わりに、赤と緑と青と三色の像を‘同時に常に’出しているわけなのよ。(Downing1996)

そして、これらの例を基に、NQC型との類似点はあるものの、決定的な違いは(8)(9)のようにNの部分に individual referents を示さねばならない点にあるという指摘をしている。また、Downingは、1.2.で述べた部分数を表すものは対象ではないと述べている。

Because I wish to restrict my attention in this section to cases in which both the numeral-classifier pair and a *co-referring* nominal appear, I have excluded from consideration those morphologically identical examples in which the *no*

intervening between the noun and the numeral-classifier pair expresses a possessive or partitive relation, rather than an appositive one.

(Downing1996:230)

つまり、1.2.で述べた部分数の例は、N (nominal) と Q (numeral-classifier pair) が互いを refer しているわけではない(N の数と Q の数が一致しない)ので、対象からはずすということである。よって、対象となる (8) (9) のようなものを付加的同格 (summative appositive) と呼び、N の QC 型として扱っている。本稿の立場もこれと同じで、(8) (9) のような例が N の QC 型の中心的なものであると考える。ただ、部分数を表すものが N の QC 型ではないと結論付ける積極的な理由もないので、2 節では一つのタイプとして扱う。

ここまで見てきた、1.2.部分数を表すもの、1.3.付加的同格のものという 2 タイプ以外には、N の QC 型はないのだろうか。結果を先取りすると、全部で 3 タイプに分けられる。それらは一体どういった文脈で用いられて、どういった制限があるのだろうか。次の節では、集めたデータをもとに N の QC 型を分類し、使用に関わる制限を明らかにする。

2. N の QC 型の数量表現

ここでは実際に例文を見ながら、N の QC 型数量表現というのは、大きく三つのタイプに分けられることを見ていく。第 5 章 I 部の 1. 節で述べたとおり、このタイプは他のタイプに比べて例文が少ないので、本章では、主にコーパス『新潮文庫の 100 冊』やインターネットを用いて例文を検索した。

2. 1. N が固有名詞などで Q の内訳を説明するもの (タイプ 1)

これは 1.3.で紹介した Downing (1996) が指摘したものである。

(10) 「A さん(29), B さん (28), C さん (28), D さん (29) の 4 人が、趣味で写真や CG などを学ぶために通っていた学校で知り合ったのがそもそもの始まりだった。4 人の共通点は…⁵⁹」 2004.9.30 (朝)

(11) 二十九日の朝七時十分、海軍省副官実松讓少佐の出迎えを受けて東京駅に着き、大臣官邸に赴くと、待っていた米内光政が風呂がわいているから入れと言ひ、吉田が風呂に入っている間に次官の山本も顔を出し、それから米内吉田山本の三人は一緒に朝粥を食って話をした。(山本)

⁵⁹ ABCD にはそれぞれ 4 人の本名が入る。

(12) 同行は、海軍省官房の書記官で山本の友人であった榎本重治、副官役の光延東洋少佐、海軍省囑託の溝田主一の三人、ほかに、彼らの荷物、タイプライター、暗号機などを持った海軍一等兵曹の横川晃が、別途、九月十六日横浜出帆の郵船宮崎丸で、スエズ経由ロンドンに向っていた。(山本)

(10) は、Q の 4 人という数量詞の内訳として、‘A さん(29), B さん (28), C さん (28), D さん (29)’ という N が修飾している。‘A さん (29), B さん (28), C さん (28), D さん (29)’ というところは、‘A さん(29), B さん (28), 私, 私の妹’ というように、代名詞や普通名詞で入れ替えることも可能であるが、実際には (10) (11) (12) のように、固有名詞の例が圧倒的に多い。どんな名詞が来たとしても、Q の内訳を説明しているという点で共通しているのがこのタイプである。以後の考察では、このタイプをタイプ 1 と呼ぶ。

『新潮文庫の 100 冊』の中から 20 冊を取り出し、検索語「の三人」で検索すると、N の QC 型が 52 例見つかった⁶⁰。その全 52 例のうち 50 例 (96%) がタイプ 1 である。タイプ 1 ではない残りの 2 例は 2.2. で扱うタイプ 2 である。更に、検索語を「の二人」にすると 23 例すべてがタイプ 1 であり、100% になる。このタイプのみを N の QC 型として扱っている Downing の考察は量的にも支持される。

2. 2. N が Q の属性的に解釈できるもの (タイプ 2)

このタイプは先行研究のどれもが扱っていないタイプである。使用例が少ないので見逃されがちであるが、N と Q が互いを refer している (in which both the numeral-classifier pair and a *co-referring* nominal appear:1.3. の引用より) という点では、タイプ 1 と同様に N の QC 型の中心的なものとして扱えるものである。詳しいことは 2.4. で論じる。

(13) 五人の内、中年者の三人は大工、左官、足袋屋であった。(さぶ)

(14) 貴い血すじの姫に惹かれる男ごろの常として、誰もかれも、見ぬ恋に心を焦がすのであった。その中の有力な求婚者の三人は、ことにも、自分こそはと躍起になっていた。(新源氏)

(15) 昨日、高三のときのクラスメート四人で飲んでました。…それにしても、四人のうち社会人は一人だけ…、自分も含めて学生の三人は思考回路がスローだなあとつくづく思いました。(ネット: ブログ 1)

⁶⁰ この検索語では、‘あの三人’ ‘その三人’ といった、代名詞的用法に指示詞がついたものが大量に検索されるが、もちろんそれらは除外している。「指示詞+代名詞的用法」については第 9 章で論じる。

タイプ1と違って、Nが普通名詞になるのがこのタイプであり、Qの属性をNが表しているという解釈ができる。(13)では、‘三人’というQがどれも‘中年者’であるという共通の属性を有している。(14)では‘有力な求婚者’、(15)では‘学生’という属性をそれぞれ‘三人’に付与している。

またこのタイプは、文脈に条件があり、先行文脈である集合が提示され、その中からNという属性を持つQを取り出して、それについて叙述するような状況で使用されている。

(13)では、‘五人’の中から、中年者という属性を持つ‘三人’を取り出している。(14)も同様、不特定数の‘求婚者’の中から、有力な求婚者である‘三人’を取り出している。(15)では飲み会参加者‘四人’から学生の‘三人’を取り出している。

このタイプは、ある属性を持ったQだけを取り出すことにより、他のメンバーと区別を行なうことになる。結果として、他の属性を持つものとの対比のニュアンスが出てくることもある。(15)の例がわかりやすいが、‘社会人’と‘学生’を対比している。学生について「思考回路がスローだ」と述べることで、社会人はそうではないという含意が出てくる。

これらは2.1.で述べた通り、検索結果52例中たったの2例しかなく、タイプ1に比べると圧倒的に例が少ないということがわかる。

(16) 学生の3人は、1000円だけでいいからね。

こういった作例をみても、この発話が教員によってなされているだろうという含意が感じられる。例えばこれは、学生3人、教員3人の集合が文脈として与えられているなら自然な発話として理解できる。逆にいえば、そういう文脈無しでは成立できないということである。以後このタイプをタイプ2と呼ぶ。

2. 3. 定のNの部分数をQが表すもの：Nの中のQ (タイプ3)

奥津(1983)や『日本語百科大事典』の先行研究で扱われているNのQC型はこのタイプである。これはQが部分数を表すというものであり、以後タイプ3とする。

(17= (7)) 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ

(18) 研究グループでは、教授一人の下で三人の大学院生がそれぞれ別の研究を行っていました。学生の二人は、自宅から大学へ通っており、もう一人も隣のウィスコンシン州から来た人でした。(ネット：ブログ2)

奥津(1983)でも指摘しているように、このタイプは‘Nの中のQ’という意味で使われており、他の形式が表面上NのQC型をしているとも考えられる。

2. 1. で述べた『新潮文庫の 100 冊』の検索でも実例はなく、量的に見てもやや周辺的なものといえる。検索結果を見ると、このタイプを表すときは‘学生のうちの三人が’というように、部分数を表していることをはっきりと明示しており、N の QC 型が‘N の中の Q’という意味を表している例はない。しかし、インターネットでよく探せば‘三人’ではないにしても(18)のような‘二人’の例ならたまたま見つかるので、実例が全くないというわけではない。また、検索語を「の一人」とすると、このタイプの実例は、たくさん見られる。これについては第 10 章で詳しく扱う。

(19) 「ねえ、みどりまだ来ないの？」と、ホステスの一人が苛々した声を出す。(女社長)

(20) そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を上げていて貰う事にした。(羅)

使用状況から判断すると、このタイプ 3 は数詞が‘一’の時に限って使われるかなり制限の強い用法であると言えそうである。

2. 4. 連体修飾としての N の QC 型

3. 節以降の考察は、タイプ 1、タイプ 2 に絞って行なう。その理由は二つある。まず一つ目は、1. 3. で Downing が用いた基準による。N (nominal) と Q (numeral-classifier pair) が互いを refer しているという点を考慮すると、タイプ 1 もタイプ 2 も N の数と Q の数が同じである(部分数を表さない)という点で共通している。またこう考えることで、他の名詞的用法、Q の NC 型や NQC 型と同様に扱うことが可能になる。

二つ目の理由は、この二つのタイプはどちらも N が Q の特徴付け (characterization) を行なっているという点で、典型的な連体修飾であるといえるからである (Bolinger 1967)。タイプ 1 は、Q の内訳を N が表すことで、Q がどのような構成員からなっているかという Q の特徴を示している。タイプ 2 も、属性を表すというところからわかるように、N は Q の特徴付けを行なっている。それに比べてタイプ 3 は、N の QC 型をしているものの、‘N の中の Q’という意味で N が Q の母集団を表しているだけであり、N が Q の特徴を表しているとは言いがたい。このタイプは他の例とは少し質が違うので、本稿では以後の議論で対象からはずす。

タイプ 1 とタイプ 2 を以下のように文脈なしで並べれば、タイプ 1 のほうが若干落ち着きがいいことをここで指摘しておく。

(21) a. 太郎，次郎，三郎の 3 人

b. ?学生の 3 人

- (22) a. えんぴつ, ボールペン, マーカーの3本
b. ?ペンの3本

2.1.で述べたように, コーパスにおいて圧倒的に使用率に差が出るのも, この落ち着きの悪さと無関係ではないと考える。もちろん 2.2.で指摘したように, ある集合からの抜き出しという文脈があれば, 落ち着きの悪さは解消され, タイプ2も使用されることになる。

ここまでタイプ1とタイプ2について, すわりがよく使用率も高いタイプ1, 使用に文脈制限があるタイプ2という性質を明らかにしてきた。以後本章では, タイプ1のすわりのよさはどこから来るのか, タイプ2の文脈制限はどうして存在するのか, という問題設定をして考察を進めたい。

3. 日本語の連体修飾における意味構造とNのQC型

ここでは, 従来から指摘されている内の関係, 外の関係といった日本語の2タイプの連体修飾を, 意味的に再定義することによって, NのQC型数量表現と外の関係との共通点を明らかにする。また, それをもとに仮説を提示したい。

3. 1. 日本語における2タイプの連体修飾

寺村(1975・1977ab)では, 日本語の連体修飾には2つのタイプがあるという指摘がされている。

(23) a さんまを焼く男

b さんまを焼くにおい

(24) a 晩年の検校が記憶の中に存していた彼女の姿

b 宮女たちが群って水を掬み, 布を洗っていた姿も画のように想像できる。

(寺村 1975)

(23)aのように, 底の名詞が修飾部の用言に対して補語と考えられるものを内の関係, (23)bのように, 底の名詞が修飾部のどこかから取り出されたとは言えないものを外の関係と呼んでいる。つまり, (23)aは「男がさんまを焼く」という文ができるのに対して, (23)bはそれができない。(24)も同様に, aが内の関係でbが外の関係である。

このように内の関係, 外の関係というのは統語的な構造から定義されているが, それぞれの関係は, 意味的にも違いがあり, それらは以下のように説明されている。

まず、内の関係、すなわち、修飾部と底の名詞とが、同一の文を構成し得るような関係を含んで成り立っている連体修飾構文では、修飾節は、底の名詞を‘特定する’、つまり単に他と区別する、という点で修飾しているのに対し、外の関係では、修飾部が底の名詞の内容を述べている、あるいはその内容を補充している、という点にその特徴がある。(寺村 1977b : 265)

つまり、日本語の連体修飾は意味的に見て、「底の名詞を他と区別するための修飾」と「底の名詞を内容補充するための修飾」という2種類があることになる。

底の名詞の内容を補充するという外の関係は、底の名詞に制限があり、以下のような名詞に限られている。

- (25) i 発話・思考の名詞：言葉，噂，思い，期待…
- ii 「コト」を表す名詞：事実，運命，癖，方法…
- iii 感覚の名詞：におい，姿，音，絵，…
- iv 「相対性」の名詞：理由，結果… (野田 1992 を基に一部改)

これらは、内容補充される側であるから、必然的に抽象的なものが多い。よって、抽象的な底の名詞に具体的な修飾部を連体させているのが、外の関係であると言える。

以上をまとめると、日本語には、「比較的具体的な名詞を底とし他と区別するための修飾」と、「比較的抽象的な名詞を底とし内容補充するための修飾」の2タイプがあることになる。

- (26) a さんまを焼く 男 ← 内の関係
他と区別 底
- b さんまを焼く におい ← 外の関係
内容補充 底

3. 2. 底としての Q

奥津 (1969) では、以下の例をもとに、数量詞は単独ではあいまいな意味になるということを描している。

- (27) 太郎ガ3冊買ッタ本 (ハ オモシロカッタ)
- (28) *太郎ガ本ヲ買ッタ3冊 (ハ オモシロカッタ)

このようにして「本3冊」が分離された場合、本来の名詞的機能を保持しているのは「本」の方であり、「3冊」は名詞としてはあいまいな役割を果すようになるので、… (奥津 1969 : 47)

ここでいうあいまいな意味というのは、NのQC型についても言える。「学生の三人が」という表現を見ると、構造上は‘三人’というQが名詞として底になっている。これは6章の4節で論じた名詞の「実質（実体）性」と関わっており、「実質（実体）性」が低いゆえに意味があいまいになるのである。これは意味が抽象的であると言い換えてもかまわない。

意味的に見ると‘学生’という名詞に比べて、‘三人’という数量詞の方が情報量が少なく抽象的である。‘三’という数情報と、‘人’というカテゴリー情報しかないので、それを単独で助詞と接続しても、指示物が何であるかははっきりとは伝わらない。数情報は、‘三’を例に取ると、数が‘三’である指示物すべてが指示対象の候補としてあげられることになる。また、カテゴリー情報の‘人’は、人という属性をもった指示物すべてをその指示対象とするわけであるから、数情報と合わせて‘三人’としても、指示物の外延ははっきりと決められない。その証拠に、まったく文脈のないところで、‘三人が’という表現を用いても、何か指示物を指すことはできない⁶¹。よって、奥津（1969）でいう‘あいまいな役割’というのは、数量詞の意味の抽象性ということで説明ができる。

3. 3. NのQC型と外の関係の共通性及び仮説

3. 1で見たように、外の関係における底は意味的に抽象的なものであった。よって、修飾部なしで発話されると、聞き手は指示物が何なのか分からないので、疑問を抱き質問したくなる。(23) bの‘さんまを焼くにおい’という外の関係の例から修飾部をとった‘におい’をもとにして例文を作成し、以下にあげる。

(29) ころらへんはにおいがする。

どんなにおい？

同様に、NのQC型においても、Qが抽象的であるがゆえに何の文脈もなしに(30)のような発話をすれば、聞き手は何か質問をしたくなるであろう。

(30) 三人はかわいいよ。

三人って誰？

発話を聞いた聞き手が何か質問したくなるということは、発話がそれ自体で完結していないということではないだろうか。どちらも文脈のない状態で修飾部をとってしまうと、発

⁶¹ 先行詞が文脈などから明らかであれば、‘三人が’という表現が代名詞的に使われる(第9章)。

話としては何か欠けている感じがするのである⁶²。それらは、修飾部を付加することで内容を補足しているのである。

また、6章4.節で引用した寺村（1968）の「実質（実体）性」を見るテストを使ってみても同じ結果が得られる。

(31) ?これはにおいです。

(32) ?これは三人です。

どちらも「実質（実体）性」が低いのである。寺村は形式名詞や時の名詞なども「実質（実体）性」の低い名詞として紹介していたが、形式名詞はまさに、内容を補充しないと成立できない名詞であり、外の関係との共通点が確認できる。一応定義を引用してみると「形式名詞：名詞の中で、実質的な意味を欠いているためその意味を補充する語句が上にないと用いられないもの（池上 1971a : 193）」とある。また、2章1.節で見たように、数量詞を形式名詞や形式体言としていた研究もあり、そこから形式名詞と数量詞の類似性も確認できる。外の関係における底、NのQC型のQ、形式名詞はすべて、「実質（実体）性」が低い点で共通している。それゆえに、内容を補充する修飾部を要求するのである。以後、外の関係とNのQC型に絞って、それぞれの修飾部を見ていく。修飾部を見ていくにあたって、ここで仮説を提示する。

(33) 本章の仮説：NのQC型は修飾部が底の内容を補充するという点において外の関係と同じ意味的構造を持っている。

4. 考察

(33)の仮説に基づいて、NのQC型は外の関係と共通点があるという前提でこの考察を進めていく。では、修飾部について見てみよう。タイプ1はNが固有名詞や代名詞でQの内訳を説明するものであった。つまり、寺村（1975）でいう、外の関係の意味解釈と類似しているのである。外の関係における修飾部の内容補充という解釈はタイプ1によくあてはまる。

(34) 米内吉田山本 の 三人
内容補充 底

⁶² これらは西山（2003）でいう、非飽和名詞という概念と共通点がある。「太郎の上司」における‘上司’がそれで、単独では意味が完結せず‘太郎の’というパラメータを要求するとされている。ここでは本稿の議論との類似性を指摘するにとどめておく。

2. 4で指摘したように、このタイプのすわりがタイプ2よりよく、実例でも圧倒的に使用されているという状況は、(33)の仮説から説明ができる。このタイプも外の関係も、底が抽象的なものであり、修飾部がその内容を補充することを必要とするのである。では、使用例が非常に少なく、単独でもすわりの悪いタイプ2はどうだろうか。

(35) 学生 の 三人
内容補充? 底

タイプ2は、Nの部分に普通名詞がきて、三人に共通の属性を付与しているだけである。ここでは、NがQの内容を補充しているとはいいがたい。つまり、底が抽象的であるという外の関係との共通点を持ちながら、修飾部は内容を補充するような情報ではない。この矛盾がすわりの悪さに関わっているのではないだろうか。ただし、2.2.で指摘したようにある集合からQを抜き出すような状況では、この形式が使えるようになった。これは内の関係の意味解釈を援用することで説明ができる。内の関係とは「比較的具体的な名詞を底とし他と区別するための修飾」であった。

(36 = (16)) (学生3人、教員3人という集合で) 学生の3人は、1000円だけでいいからね。

この状況というのは、(37)のように説明できる。(37)ではある要素と別の要素が存在しており、それぞれの要素は、‘学生’‘教員’といった属性を持っているのである。そして、それぞれの要素をQが表しているということになる。

(37) 要素1 学生3人 : 要素2 教員3人

ここでは、要素1を抜き出すことで、要素2から区別するという、内の関係的な意味解釈が可能になるのである。(36)の例でいうと、‘学生’という属性を持った‘3人’をある集合から抜き出している。つまり、‘学生’と‘教員’を区別していることになる。この区別するという解釈が読み込まれると、内の関係との類似性が生じ、日本語の連体修飾としてすわりがよくなるのではないだろうか。

以上のように、抽象的な底Qを連体修飾するには、外の関係のように内容補充という解釈ができるタイプ1がすわりがよく、圧倒的に使用例も多い。ただし、タイプ2のように、内容補充解釈ができなかったとしても、ある集合からQを抜き出す状況なら、使用が可能になる。つまり、内の関係のように、他と区別する解釈ができるような文脈を持ち込めば、タイプ2のNのQC型は成立するのである。ただ、タイプ2の使用率の低さは、デフォルト状態では、NのQC型は外の関係と共通するという仮説を支持するものである。

5. 内・外の関係と制限・非制限的連体修飾

第5章で主張したのは、QのNC型は非制限的連体修飾であるということである。本章ではNのQC型と外の関係の共通点を指摘した。ここでは、それらの連体修飾構造について少し触れておきたい。制限・非制限的連体修飾とは、底となる名詞の同定可能性によって決められるものであった。内・外の関係とは、その名の通り、底名詞と連体修飾句との統語的・意味的關係によって決まるものである。よって互いに相関関係はないものと考えられる。

内関係については、制限・非制限的連体修飾の対立がありうる。

(38) さんまを焼く男は人気がある。 制限的

さんまを焼く夏目漱石を見かけた。 非制限的

しかし、外関係になるとこの対立が中和されるのではないだろうか。

(39) さんまを焼くにおいがする。

‘におい’という底名詞だけでなく、外関係で底として用いられる抽象名詞はすべて同定可能性が低く、非制限的な解釈がしにくい。連体修飾構造に関しては、まだまだ興味深い点があるが本論文ではこれ以上関わらない。

6. まとめ

本稿で中心として扱ったNのQC型は2タイプに分けられ、それぞれの底を内容補充したり、特定化（他との区別）したりすることで成立しているという主張を行った。外関係、内関係というのは、その名前から統語的に分類されたものであるという印象が強いが、意味的にもはっきりとした区別があり、その違いをNのQC型の説明原理として使用した。

今回3節以降で議論からはずしたタイプ3については‘一’の問題として10章で扱いたい。2.3.で見たように、このタイプは実例がほとんど見つからないにも関わらず、数量詞を‘一人’とすると例がたくさん見つかるのである。また、5.節で扱った連体修飾構造に関する問題は、今後の課題としたい。

第8章 名詞句内数量詞の位置と意味*

本章では5章・6章・7章で扱ってきたQのNC型・NCQ型・NのQC型の共通点を指摘した上で、それぞれの比較を行なう。すべてQとNが名詞句を形成するという共通点を持ちながら、どういった使い分けがなされているのかを明らかにするのが目的である。ここでは、集合物の均質性（同質か異質か）によって、それぞれの表現が使い分けられているという主張を行う。また、それらはカテゴリー認知の方法としても使われていることを指摘する。

1. 名詞句内数量詞

1. 1. 名詞句内数量詞とは

本章で扱う名詞句内数量詞とは、5章・6章・7章で見てきたQのNC型・NCQ型・NのQC型におけるQのことである。『日本語百科大事典』（1988）の例を再掲すると、①②④のタイプが本章で扱う対象となる。

- | | |
|--------------------|---------|
| (1) ① 3人ノ 学生ガ 反対シタ | (QノNC型) |
| ② 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ | (NノQC型) |
| ③ 学生ガ 3人 反対シタ | (NCQ型) |
| ④ 学生3人ガ 反対シタ | (NQC型) |

これらの三つのタイプはすべて、NとQが名詞句を形成するという共通点を持つので、これらのQを名詞句内数量詞と呼ぶ。また、名詞句内数量詞が用いられているQのNC型・NCQ型・NのQC型をまとめて名詞句内数量詞用法と呼ぶ。

Kim (1995) ではこれら三つのタイプをまとめて‘NP-internal Q’と呼んでいる。呼び名はどうかあれ、この三つのタイプがすべて名詞句であるという共通点を持っているということをここで確認したい。名詞句を形成しているかどうかのチェックのために助詞を付加してみると、①②④の三つはどれも助詞が接続できるが、③タイプはそうではない。ただし、第7章で詳しく見たように②タイプのNのQC型は、実際には「須田、山本、岩田

* 本章は岩田一成 (2006c) 「日本語数量詞名詞的用法の位置と意味」の一部を基にしている。

の 3 人」といった、N をリストアップする形式が一般的であり、「学生の(中の)3 人」のように、部分数を表す用法には制限があるので、例文を少し変える。また、例文を平仮名に直す。

- (2) ① 3 人の学生が／を (Q の NC 型)
 ② 須田, 山本, 岩田の 3 人が／を (N の QC 型)
 ③ *学生が 3 人が／を (NCQ 型)
 ④ 学生 3 人が／を (NQC 型)

神尾 (1977) では、「学生が 3 人」のような NCQ 型も名詞句の場合があるという指摘をしている。

- (3) 私は年賀葉書を二百枚と大きなゴム印 (と) を注文した
 (4) 学生が三人と一人の教師 (と) がつかまった 神尾 (1977)

これらの例文を見ると、確かに並立助詞で名詞 (句) と並列した使用が可能であり、NCQ 型も名詞句を形成しているといえるかもしれない。しかし、これらの用法は並立助詞しか使用できないので、本研究で扱う他の名詞句内数量詞用法とは同一には扱わない。

- ‘(3) ??私は年賀葉書を二百枚を注文した
 ‘(4) ??学生が三人がつかまった

このように、格助詞 ‘を’ や ‘が’ で受けるとすわりが悪くなる。よって、本研究で扱う用法は、特に助詞に制限を受けないものだけとする。

1. 2. 名詞句内数量詞用法の共通点と本章の目的

1.1. で見たように、助詞が付加できるかどうかで名詞句内数量詞の共通点は明らかであったが、以下のように連体修飾をしてみると、さらに共通点が明らかになる。Q が N の全体数か部分数かという違いが出てくるのである。

- (5) ① 昨日会った 3 人の学生を招待した (Q の NC 型)
 → 昨日会った学生 = 3 人
 ② 昨日会った須田, 山本, 岩田の 3 人を招待した (N の QC 型)
 → 昨日会った学生 = 3 人
 ③ 昨日会った学生を 3 人招待した (NCQ 型)
 → 昨日会った学生 \geq 3 人
 ④ 昨日会った学生 3 人を招待した (NQC 型)
 → 昨日会った学生 = 3 人

①タイプが名詞句「昨日会った学生」の全体数を表すのに対し、③タイプが、名詞句「昨日会った学生」の部分数を表すということは井上（1978）ですでに指摘されているが、ここで確認したいのはその他のタイプである。②タイプにおいても④においても名詞句の全体数を表すことが確認できる。③のように部分数を表すことはない。これらの点からも、名詞句内数量詞用法の共通点は明らかである。第4章で述べたことであるが、QのNC型が、Nの全体数を表すという事実は、一定の数をもつ集合物を仮定することで、説明ができた。つまり、QのNC型の議論で使用した集合物認知という概念は、NQC型、NのQC型にも適用できるということになる。

ここまでで名詞句内数量詞用法の共通点を確認したが、それでは、その三つのタイプにおける意味の違いはどこにあるのだろうか。これら三つのタイプの違いに関して統一的に説明を試みるのが本章での目的である。

本章の目的：3タイプある名詞句内数量詞の位置と意味の関係を明らかにする

2. 先行研究

本章で扱う3つのタイプをすべて取り上げている先行研究にKim（1995）、Downing（1996）があり、どちらもコーパスデータからそれぞれのタイプの特徴を記述している。どちらも、様々な数量詞の形式を網羅的に記述しているが、名詞句内数量詞用法だけでなくNCQ型も含めてすべてを扱っており、名詞句内数量詞用法のみに焦点を当ててその意味の違いを記述しているわけではない。ここではより細かく記述をしているDowning（1996）を簡単に紹介する。細かい内容は、5章・6章・7章で論じているので、ここではおおまかに名詞句内数量詞用法における意味の違いを指摘している部分に絞って内容をまとめる。

まず、NQC型のNがindividual referentsを表すのに対して、QのNC型のNはcategoryを表すという指摘をして、以下のような例文を挙げている。

(6) *二人の彼らが来た。

(7) 彼ら二人が来た。

ここでいうcategoryとは普通名詞のことで、「二人の学生」などというときは、Nの部分がcategoryを表しているが、「彼ら」というようなindividual referentsを表す場合は、NQC型が使われるという指摘をしている。さらに、NQC型は、individual referentsでrepeated informationを表すことが圧倒的に多いという指摘もしている。

(7) では、‘彼ら’という代名詞が使われていることから明らかなように、新情報ではなくすでに導入されている情報を表すのが NQC 型であるという指摘である。この例などを基にして、NQC 型は Q に際立ちを与えない用法であるという指摘もしている。これについては 6 章で詳しく述べた。

N の QC 型についても、NQC 型と同じように individual referents で repeated information を表すとしているが、N の表示の仕方が違うとして、以下のような例を挙げている。

(8) 彼女と妹のかえこの二人は、…

N の QC 型がこのように N の内容を列挙するタイプであることについては本稿 7 章でも同様の指摘をしている。

以上非常に大雑把にまとめてみたが、Downing (1996) では他にもたくさんの細かい指摘をそれぞれのタイプについて行っている。本章でも議論に関わる部分は、適宜紹介したい。一連の指摘は非常に興味深いものであるが、会話と小説のみからなるコーパスデータを利用しており、収集された例に偏りがあるのは否めない。また、それぞれの形式を個別に指摘しているのみで、名詞句内数量詞用法に統一的な説明を与えるのがその目的ではない。そもそも、名詞句内数量詞用法は、三つものタイプを使い分けることで何を言い分けようとしているのだろうか。本研究では、名詞句内数量詞用法に統一的な説明を加えるにあたり、N と Q の修飾関係に注目する。

3. 考察

3. 1. 名詞句内数量詞用法の修飾関係

本章で扱う三つのタイプを並べてみると、一番に気がつくのは、それぞれの修飾関係が違うということである。Q の NC 型については底が N であり、N の QC 型については底が Q であり、それぞれははっきりしている。つまり、N を中心にするか、Q を中心にするかという違いである。NQC 型については、他の二つほど修飾関係がはっきりしているわけではないが、6 章で述べたように Q を重点にして意味解釈をするタイプである。

- | | |
|---|-----------------------|
| (9) 3 人ノ 学生 ガ | (Q の NC 型) …N が底 |
| 出席シタ学生ノ 3 人 ガ | (N の QC 型) …Q が底 |
| 学生 3 人ガ | (NQC 型) …底は不明だが Q が重点 |

6 章 4 節で詳しく論じたように、N と Q は名詞の実質性において大きく異なる。Q とい

うのは時の名詞や形式名詞と同様に実質性の低い名詞であった。よって、実質性の低い Q を底にする N の QC 型や Q を重点として解釈する NQC 型というのは不安定になる。6 章で挙げた例に N の QC 型も加えて再掲する。

(10) 「三匹の子豚」「二人のロッチェ」「七人の侍」「白雪姫と七人の小人」

‘(10) ? 「子豚三匹」「ロッチェ二人」「侍七人」「白雪姫と小人七人」

“(10) ? 「子豚の三匹」「ロッチェの二人」「侍の七人」「白雪姫と小人の七人」

これらの不安定さを解消するための文脈を探るのが 6 章・7 章での目的であった。これまでの議論を踏まえた上で、これらの意味の違いは何か、そして、それらの違いは修飾関係という構造からすべて説明できるということを以下に述べていく。

3. 2. Q の NC 型と NQC 型

説明の便宜上 Q の NC 型と NQC 型の違いから始める。6 章で見たとおり、これらのタイプの違いは、意味の重点をどこに置くかというところであった。3. 1. でも見たとおり、修飾関係がはっきりとして、N を底としている Q の NC 型に対して、NQC 型は修飾関係がわかりにくい、Q を重点にするというものであった。意味の重点はどこかという議論では、名詞句だけを抜き出した例はかなりうまく説明できた。

(11) 中国語助数詞の解説

～个 (ge) 一个面包 (パン 1 個)

～杯 (bei) 两杯咖啡 (コーヒー 2 杯)

(12) (缶の絵を見せながら) 「これはジュースの缶です。何と数えますか？」

「缶ジュース 1 本」

どちらも 6 章で挙げた例なので、詳しくは説明しないが、重点を Q においた文脈だとこれらのタイプが使用可能になった。しかし、重点がどちらかというだけでは、Q の NC 型と NQC 型の違いをはっきり説明したとは言えない。「3 人の学生」と「学生 3 人」では重点が違うというだけで、指示している集合体自体は同じものである。ここからは、これら二つのタイプの違いがはっきり出てくる例をもう少し見たい。

意味の違いが出る例として Downing(1996)が以下のような例を挙げている。そこでは、(13) のように NQC 型だと「太郎と仲間」という読みができるが、Q の NC 型にすると、「すべて太郎」という読みになるという指摘をしている。

(13) 太郎たち 5 人が入ってきた。

‘(13) 5 人の太郎たちが入ってきた。

確かに、「太郎たち5人」だと、「太郎・次郎・三郎・四郎・五郎」といった可能性があるが、「5人の太郎たち」というと「太郎・太郎・太郎・太郎・太郎」といった読みしか許容されなくなる。‘太郎’という名前は一昔前は一般的な名前だったので、同じ名前の人が5人いるという可能性も許容されるが、「5人の風志たち」というと、許容度が落ちる。これは同じ名前の方が5人もいるという状況が想定できないからであろう。

‘太郎たち’に使われている日本語の複数接尾辞‘たち’は一般に「すべて太郎」読みでも、「太郎と仲間」読みでも可能であると言われている。「お母さんたちが来た」という例でも、「すべてお母さん」読みと「お母さんと仲間」読みとどちらも許容される。両方の読みが許容される「名詞+接尾辞」構造に、付加する数量詞の位置を変えることで、どちらかの読みが優先されるというのが Downing(1996)での指摘である。Qを前置すれば「すべてN」読みになり、Qを後置すれば「N+その他」読みが許容されるというものである。つまり、ある集合物があるときに、それらが同質なのか、異質なのかという違いを両タイプは区別しているということになる。以下、異質な集合物を表すときは NQC 型が使われているということを確認していく。

3. 2. 1. 固有名詞とその他からなる集合物

実際に同質か異質かという観点から説明できる例は多い。(13)の例で見たように固有名詞が使われる場合は、固有名詞とその他からなる集合を表す。

(14) その頃になるとたいていの者はこの榎の大木に登れるようになっていたが、体の小さなヨシツグとか四郎など七、八人がまだ努力中だった。(手)

(15) 拉致被害者の蓮池薫さん(45)ら5人が参加し、… 03.5.8(朝)

(16) …ロンドンからイラクに帰国したばかりのイスラム教シーア派の反体制指導者アブドルマジド・アルホエイ氏ら2人が10日、故郷のイラク南部ナジャフのモスクで武装グループに襲われ、刺殺された。 03.4.11(朝)

(13)のように「太郎たち」だと、太郎が複数いるという可能性も想定できたが、これらの例のように氏名が明示されている場合は、なかなか同姓同名の人がたくさんいるという想定ができず、QのNC型にはできない。

‘(15) *5人の蓮池薫さん(45)らが参加し、…

ここまで固有名詞の例を扱ってきたが、普通名詞でも同様のことが言える。ただし、固有名詞に比べると「N+その他」の解釈が弱くなる。

(17) 先生たち 5 人が入ってきた。(先生とその他 or すべて先生)

‘(17) 5 人の先生たちが入ってきた。(すべて先生)

Q の NC 型は「すべて先生」という同質な集合物を表す点は固有名詞と同じであるが、NQC 型は同質でも異質でもどちらでも表せるのではないだろうか。ここで注意したいのは、解釈は状況や我々の経験に依存していることである。

(18) 学生たち五人が入ってきた。

これは「すべて学生」という解釈が優先されるだろう。学生は連れ立って歩いていることが多いといった我々の経験があり、「代表+その他」という解釈がしにくい。同一の文でもどちらの解釈をしているかが文脈によって変わる。

(19) (事務所内で銃撃戦を行った後) 組員ら 5 人が逮捕された。 同質な集合物

(20) (弁護士と結託して企業をゆすった後) 組員ら 5 人が逮捕された。 異質な集合物

以上で見てきたように、Q の NC 型は同質な集合物しか表わさないが、NQC 型は、固有名詞が N に来ると異質な集合物だけを表すが、普通名詞の場合は経験や文脈によりどちらにもなることを見てきた。つまり、NQC 型は状況が許せば「N+その他」からなる異質な集合物を表すことも可能である。

3. 2. 2. さまざまな構成要素からなる集合物

また、さまざまな構成要素からなる集合を表す場合も、NQC 型が優先的に使われる。

(21) 部会は矢崎義雄国立国際医療センター総長が部会長を務め、産婦人科医や法学者、
カウンセラーら 20 人が… 03.4.11 (朝)

(22) でもその(日本画の)存在を「問題」とし、研究者や学芸員、画家ら計 24 人が 2
日間論じ合うシンポジウム「転移する日本画」が横浜市で開かれた。 03.4.8 (朝)

(23) 工場内にいた 32 歳と 36 歳の男性 2 人が煙を吸って病院に運ばれたが、軽症という。
03.4.10 (朝)

これらは NQC 型で表されることが多いが、Q の NC 型に絶対変形することができないというわけではない。

‘(21) 部会は矢崎義雄国立国際医療センター総長が部会長を務め、20 人の産婦人科医や
法学者、カウンセラーらが… 03.4.11 (朝)

ただし、実際に使われている事例は NQC 型で表されることが多い。ここではその傾向だけを指摘しておく。「3人の学生」「学生3人」というときは、どちらも同質なメンバーからなる集合物であった。そこでは、重点はどちらかという使い分けが行われていた。それに

加えて、3.2.1. 3.2.2 で見てきた例をまとめると Q の NC 型は同質なものを表すが、NQC 型は同質なものと異質なものを表すということになる。

3. 3. N の QC 型

ここでは、N の QC 型について論じる。詳しくは7章で論じたとおりでだが、ほとんどの例が (24) (25) のように Q の要素として N を列挙して提示するものであった。7章では‘Qの内訳をNが表すタイプ’という呼び方をした。Downing (1996) では‘summative appositive’ という呼び方をしているが、命名の意図は同じである。7章の例文を再掲する。

(24) それから米内吉田山本の三人は一緒に朝粥を食って話をした。

(25) 彼女と妹のかえこの二人は、その土地を元手に食べているのです。

このタイプを用いれば、全く異なった要素からなる集合物をも表すことができる。例えば、教員と会社員と学生からなる集合物を指して、「先生と山下さんと山本くんの3人」という言い方は可能である。また「山本と岩田と須田の3人」が3人とも学生であったとしても、その個人個人を個体として取り上げており、集合物自体を異質化して捉えているということになる。よって、このタイプは積極的に集合物の異質性を表すということができるだろう。

(26) a. 太郎，次郎，三郎の3人

b. ?学生の3人

(27) a. えんぴつ，ボールペン，マーカーの3本

b. ?ペンの3本

これは7章で扱った例文であるが、このように同質なものの集合よりも、異質なものの集合のほうがすわりがよくなることから積極的に異質性を表すという指摘が支持される。

3. 4. 仮説

3.2., 3.3.での指摘を基に、本章では集合物の均質性（同質か異質か）が名詞句内数量詞用法の違いを説明する原理になると主張し、以下の仮説を立てる。

(28) 本章の仮説：数量詞名詞句内数量詞用法において、集合物の均質性（同質か異質か）がそれぞれのタイプの使い分けに関わっている。

そもそもこの仮説にあるような違いが出てくるのはどうしてだろうか。ここでは、名詞的

用法3タイプの違いを修飾関係に着目して説明したい。説明は、第7章で立てた仮説を基にして行う。3.1.で説明したように、QのNC型はNが底となっていた。それに対してNQC型は修飾関係はわからないが、Qを重点としていた(第7章仮説参照)。6章4.節で論じたように、Qというのは実質性の低い名詞であった。QのNC型のように実質性の高いNを底にすると、指示対象が狭まり、Nが指示する対象のみしか許容できなくなる。ここではNを質的情報と呼ぶ。それに対してQを重点としているNQC型は、実質性の低いQが重点になることで、指示対象は広がる。つまり、Qのカテゴリーに入るものであれば、何でもNに入れることができるようになる。ここではQを数・カテゴリー情報と呼ぶ。

重点

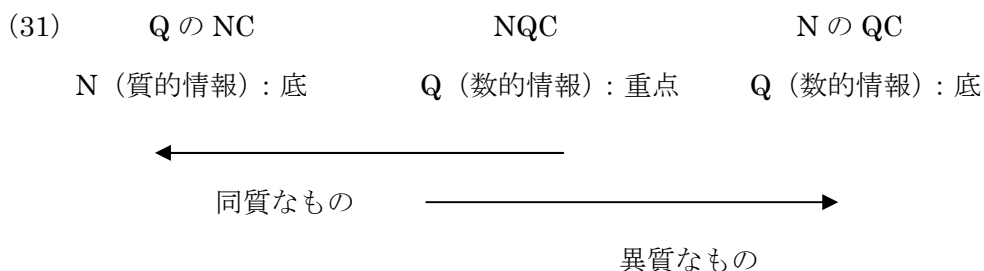
- (29) 学生たち $\boxed{3人}$ →とにかく3人である→数・カテゴリー情報重視→異質性の許容
 3人の $\boxed{学生たち}$ →とにかく学生である→質的情報が底

(29)のように、数・カテゴリー情報を重点とするNQC型は、とにかく3人であればNは何でもいいという解釈が可能になり、同質な集合物も異質な集合物も許容するのである。QのNC型はそうはいかない。質的情報に重点を置くことで、同質性しか許容しないのである。さらにNのQC型になると、Qが底となっており、NQC型よりもはっきりとQに重点が置かれることがわかる。

- (30) 岩田, 山本, 須田の $\boxed{3人}$ →数・カテゴリー情報が底→積極的に異質性を要求
 NCC型よりはっきりと明示的にQに重点がおかれることにより、積極的に異質性を要求するようになるのである。これは3.3.で見たとおりである。

3.5. 考察のまとめ

ここまで、数量詞の名詞句内数量詞用法3タイプについて考察した。それぞれの意味の違いはどこからくるのかを、3タイプの修飾関係に着目して一貫した説明を加えた。まとめると以下の図のようになる。

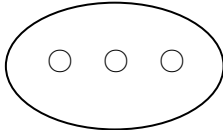


日本語数量詞の名詞句内数量詞用法は Q と N の位置を変化させることで、集合物の構成要素間における均質性（同質か異質か）を調節しているというのが主張である。NQC 型は同質なものと異質なものとどちらも表すことができるが、Q の NC 型は同質なもののみ、N の QC 型は主に異質なものを指示した。

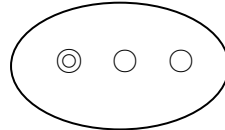
4. 表現の使い分け

名詞句内数量詞用法を使えば、(32) のような異なった集団（学生だけの集団、先生と学生の集団、先生と会社員と学生の集団）を区別して表現することができる。本章で見てきたように、集合物が、同質なものからなるか異質なものからなるかという違いをこれらの数量表現を用いることで区別することができるのである。同質な場合は、Q の NC 型も NQC 型も使用が可能であったが、繰り返し述べてきたように、これらは重点をどちらに置くかということで、使い分けがなされていた。

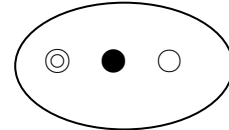
(32) 3人の学生
学生3人



鈴木先生たち3人



先生と山下と山本くんの3人



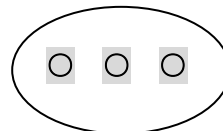
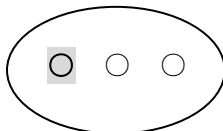
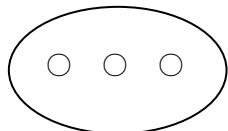
また、これらは同じ集合物を異なった表現で言い分けることも可能であり、認識の仕方を反映しながら、集合物を違った角度から区別するのである。(33) の例のように、すべてが学生である集合物を、「3人の学生」「山本たち3人」「山本と岩田と須田の3人」というふうに呼び分けることも可能である。ここでは、同質と捉えるか、異質と捉えるかという認識主体の捉え方が言語表現に反映されているといえる。この使い分けはカテゴリー認知の方法を表していると言えるだろう。この場合も、同質だと捉えている場合は、Q の NC 型も NQC 型も両方使用が可能であり、重点をどちらに置くかによって使い分けができる。

(33) 3人の学生

山本たち3人

山本と岩田と須田の3人

学生3人



5. おわりに

本章で主張した内容は名詞句内数量詞用法において、集合物の均質性（同質か異質か）がそれぞれのタイプの使い分けに関わっているというものであった。集合物が同質か異質かによって異なった言語表現を使う例は他言語にも見られる。アジェージュ（1982）によるとラオスのプノン語では「私」「私たち2人」「均質な私たち」「均質でない私たち」を区別する。（125）」とあり、オーストラリアのラルディル語とアランダ語では『私たち2人』と『君たち2人』と言うとき、その2人が対等の世代に属しているか、それとも父系親族関係にあるかによって、異なる形を使い分ける。（134）」とある。どちらも短い記述で具体例などがなく、詳細はわからないが、集合物の均質性が言語表現に関わっているという一つの例にはなるだろう。

また4.節では、日本語数量表現の名詞句内数量詞用法を使い分けることで、集合物を同質であると捉えたり、異質であると捉えたりすることができる指摘した。集合物を同質であると捉えたり、異質であると捉えたりするのは、言い換えれば、カテゴリーの共通性を認識したり、個別性を認識したりしているわけである。これに関しては坂原（2006）が興味深い指摘をしている。

坂原はトートロジの例を挙げて、カテゴリーの再構成について述べている。

(34) 「ワインはワインだ」(同質化)

(35) 「赤ワインは赤ワインだ」(異質化)

お客が赤ワインを注文した際、ウェイターが赤ワインと白ワインを間違えて持ってきたという状況を設定する。その時に間違いを指摘されたウェイターが(34)のように言ったとしたら、赤でも白でも同じであると言っていることになり、そこにはカテゴリーの同質化作用がある。また、そのウェイターに対して客が(35)のように言ったら、赤と白は違うと指摘していることになり、カテゴリーの異質化作用がある。これらの例を基に、坂原はカテゴリーは共通性の認識と、個別性の認識を恒常的に再構成しているという主張を行っ

ている。

カテゴリーの共通性認識と個別性認識が人間のカテゴリー化に関わる認知操作を背景としているならば、本章で用いた集合物の均質性（同質か異質か）という説明原理は、アドホックなものではないと言えるであろう。

第9章 代名詞的用法*

これまで数量表現としての数量詞の用法を見てきた。本章では今までとは視点を変え、数量詞が代名詞として用いられる用法を見ていく。本章はⅠ部とⅡ部に分けられる。Ⅰ部では数量詞の代名詞的用法というものの特徴を記述することを目的とする。使用に関わる制限や利点、代名詞との比較などが議論の中心である。Ⅱ部では、数量詞が裸で代名詞的用法になるときとそうではないときの違いを論じる。裸ではないとき、指示詞や人称代名詞が数量詞に付加されることが多い。そこでは文脈における個性性が関わっており、話題において、指示詞や人称代名詞などの場指示語が取立て機能を持っているという主張を行なう。

Ⅰ部 日本語数量詞の代名詞的用法

1 はじめに

1. 1. 数量詞の代名詞的用法とは

- (1) やがて二人は丘を登って右に曲がろうとすると、そこに牛が一匹立っているのに出会いました。
- (2) 狐はまだ網をかけて、樺の木の下に居ました。そして三人を見て口を曲げて大声で笑いました。
- (3) けれども、父は二人に逢おうとはしなかった。 加藤[美] (2003)

これらの例のように、数量詞が既出の人物の代わりに用いられることがある。上の例文だけでは先行する人物が誰なのか具体的にはわからないが、これらはそれぞれ代名詞に置き換えが可能なことから、これらの数量詞は代名詞のような機能を有するとされている(井上 1999・2003, 加藤[美]2003, Downing1986)。それが本章でいう数量詞の代名詞的用法というものである。井上(2003)では、これを‘指示物追跡’と呼び、本稿でもこの用語を用いる。ただし、井上(1999, 2003)ではこの機能を指摘しているのみで、詳しい定義は見られない。

* 本章Ⅰ部は岩田一成(2005)「日本語数量詞の代名詞的用法」を基に、Ⅱ部は岩田一成(2006a)「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」を基に、それぞれ加筆修正を加えたものである。

加藤[美](2003)では三人称代名詞になるもののみを取り上げて三人称代名詞的用法としているが、Downing (1986) では三人称代名詞のみではなく、先行文脈に既出の ‘specific referents’ すべてを対象にして、それらを数量詞が表す用法を ‘the anaphoric use of classifiers’ として記述している。確かに助数詞は、‘人’ だけではなく ‘匹’ ‘本’ など様々なものがあり、人称代名詞だけに限って代名詞的用法を認める必要はないが、後に述べるように ‘人’ の使用が圧倒的多数であることも事実である。

上の先行研究はどれも先行文脈に既出のものを数量詞が追跡するという照応表現だけを扱っている。小説などの文章をデータとして用いていることから、どうしても照応表現に注目が集まってきたが、代名詞というのは当然、照応表現だけに限定する必要はない。会話の場面では直示表現もあり、本章で扱う数量詞の代名詞的用法でも同じことが言える。漫画などの会話をベースとするデータに当たればすぐ、(4) のように現場の参加者を追跡する直示表現も数量詞で表現されている。このことから、(4) のような直示表現も代名詞的用法に含めることが可能であると考えられる。

(4) (女性→聞き手二人への発話)

「待って！！」「二人には言わなかったけど、ベイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようにお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」

(続いて、女性→ベイマーさんへの発話)

「ベイマーさん、今度は二人を手伝って！！」(マスタ)

最初の ‘二人’ は ‘あなたたち’、次の ‘二人’ は ‘彼ら’ と置き換えは可能である⁶³。本稿では、この現場に参加している指示物 (referents) も代名詞的用法が追跡する対象として扱う。

照応表現であれ、直示表現であれ、指示物そのものの代わりに用いられるものが代名詞であることから、数量詞の代名詞的用法は指示物そのものを表す名詞によって、置き換え可能なものとする。代名詞との置き換えが可能かどうかのみで定義してしまうと、代名詞との使い分けを説明できなくなってしまうので、数量詞代名詞的用法を以下のように定義する。

⁶³ ただし、この文を代名詞で置き換えるとニュアンスが若干異なるが、このニュアンスの違いはここでは議論しない。

(5) 数量詞代名詞的用法の定義

文脈に既出である，または現場に参加している指示物（referents）を数量詞が追跡する用法で，数量詞を，代名詞もしくは指示物そのものを表す名詞に置き換えることが可能なもの。

1. 2. 数量詞単独使用と代名詞的用法

「数詞＋助数詞」からなる数量詞が単独で使われているからといって，必ず代名詞的用法になるわけではない。ここでは 1.1. で定義した代名詞的用法とそうではないものの境界をはっきりさせたい。

(6) 五人のキャンプは労働力が多いから楽だ。一人が何か一つのことをやればいい。(川)

(7) ヒッラ周辺で多数の市民の死傷者が出た模様で，AFP 通信は現地の情報として 33 人が死亡したと報じた。03.4.2 (朝)

(8) 東郷「明日…？ずいぶん急な話だな…何かあるらしいが…」「それで，どうして俺なんだ？」

依頼者「最初からきみに頼めばよかったのだが…実は，この 2 週間の中に，君と同業のものが二人…」「一人はライフルでしくじり，もうひとりのナイフ使いは…」「なぜかゴドノフの間近まで行きながら，心臓麻痺で急死！」

(ゴルゴ)

(9) …，兵庫県警は，同県明石市内の市立中学 3 年の男子生徒 (15) を殺人未遂容疑で逮捕し，女子生徒も共犯として逮捕したと 15 日，発表した。2 人は同じ中学の生徒で，… 05.3.16 (朝)

(5) の定義から考えると，(6) はまったく指示物がなく，数量詞が何かの代わりに用いられているわけではないから代名詞的用法ではない。「五人の人間で行なう」というような意味であり，‘五人’が誰なのかは決められなくてもかまわない。(7) (8) は指示物が先行文脈にあることはあるが，照応表現ではない。数量詞は先行文脈中の指示物からその一部を取り出している。これらは代名詞に置き換えもできないし，指示物そのものを表す名詞を入れても文脈的におかしくなる。

‘(7) …33 人 (*彼ら / ? 市民たち) が死亡した…

‘(8) …一人 (*彼 / ? きみの同業者) はライフルでしくじり，…

これらの例はどちらも先行する指示物の中の内訳を説明している。特に (8) の例は不定代

名詞と言われるものであり、代名詞に準ずるタイプである。これについては 2.1.でもう一度論じる。(5) の定義によって規定すると、上の中では (9) だけが数量詞の代名詞的用法ということになる。(9) では、先行する指示物（‘男子生徒’ ‘女子生徒’）を追跡する照応表現として使われている。また、1.1.で挙げた (4) のような直示表現も数量詞の代名詞的用法となる。

1. 3. 先行研究と本章 I 部の目的

井上 (1999, 2003), 加藤[美](2003)では、代名詞的用法の存在を指摘しているに留まっている。ここでは、この用法を詳細に記述している Downing (1986) を概観する。そこでは、英語の代名詞に当たるものは日本語では省略であると指摘し、日本語で一度出てきた名詞を繰り返すとき一番多いパターンは省略してしまうことであるとしている。その省略に代わるものとして代名詞をあげ、数量詞代名詞的用法との比較を行っている。そこで指摘されていることはまず、名詞のようにかなりはなれたところからでも指示物を指示できるということである。さらに、スタイル的に中立な ‘anaphoric option’ であるという指摘もしている。これについては Hinds (1975)⁶⁴の研究を引用して、Hinds が指摘した日本語三人称代名詞の持つさまざまな ‘heavy social constraints’ を数量詞は避けることができると主張をしている。また、男女がペアの時には、代名詞では指示しにくいという指摘も最後に追加している。これらの指摘についてはのちに検証する。

Downing (1986) をはじめ先行研究では、1.1.で述べた通り、照応表現の代名詞的用法のみを扱っている。(4) のように現場の参加者を追跡する直示表現については全く触れられていない。また、統計的にデータから言えることを述べており、そもそも数量詞がどうして代名詞的に使われるのかという視点では書かれていない。そこで本章 I 部の目的を以下のように立てる。

本章 I 部の目的：数量詞がなぜ代名詞的機能を持つのかを論じる。数量詞の代名詞的用法の特徴を記述することで、代名詞との違いを明らかにする。

2. 数量詞代名詞的用法に関わる制約

代名詞的用法は、どんな数字でもどんな助数詞でも使えるというわけではなく、使用に

⁶⁴ 日本人の高校生、大学生 297 人に 7 パターンのアンケートをとって、どんなときに代名詞を使うかを詳細に記録している。

は制限がある。ここでは代名詞的用法の数詞に関わる制約と助数詞に関わる制約を先行研究を交えつつまとめる。

2. 1. 数詞に関わる制約

ここでは、‘一’が代名詞的用法に使用できないことをまず論じたい。数字の‘一’は他の数字と少し振る舞いが違う。Downing (1986) は、統計的に‘one’は代名詞的用法（照応表現）に使われていないと指摘している。理由としては、‘indefinite marking flavor’があること（例 そこに一人の漁師がありました。）、‘one’は他の数字に比べて‘contrastive information’が低いことを挙げている。確かに（10）のように‘一’では指示物を追跡することができない。

（10）私のクラスには劉さんという留学生がいます。（彼／劉さん／*一人）はとても明るく…

以下のように同様の例でも指示物が‘二’になると追跡が可能になることがわかる。

（11）私のクラスには劉さんとジョンさんという留学生がいます。（彼ら／劉さんとジョンさん／二人）はとても明るく…

井上（1999）では、数量詞の代名詞的機能について、以下の例を挙げ、「1 + 助数詞」が代名詞的用法として使えるかのように紹介されているが、これは明らかに間違いであろう。

（12）オオクワガタはかつて幻の昆虫として扱われていましたが、一九八六年の『月刊むし』「オオクワガタ特集号」で詳細な生態と採集方法さらには累代飼育手法が公開されるや、バブルの最盛期と相まって、一時期には一匹数十万円から時には数百万円で取引され異常に高価な虫になってしまいました。（井上 1999）

これを代名詞的用法としてしまうと、議論が混乱してしまう。既出の指示物を照応表現として追跡しているわけでもないし、直示的なわけでもない。本章の研究対象がぼやけてしまうため（5）の定義に従い対象から外したい。（12）の‘一匹’を‘それ’や‘オオクワガタ’で置き換えることはできない。

‘（12）…バブルの最盛期と相まって、一時期には（*オオクワガタ／*それ）数十万円から時には数百万円で…

この‘一匹’は、‘オオクワガタ’の代名詞として使われているというより、‘一匹’という数量単位に焦点が当たっている。

‘一’と‘二以上’の違いは、例えば‘その一人’と‘その二人’の意味の違いにも現れる。先行する指示物が二人なら‘その二人’で追跡することができるが、一人なら‘そ

の一人’で追跡することはできない。‘その人’と言ったほうがわかりやすいところからも、‘contrastive information’が低いとする Downing (1986) の先行研究を支持できる。

(13) a 私の友達は真田さんです。*その一人はいつもごはんに誘ってくれます。

b 私の友達は真田さんと斎藤さんです。その二人はいつもごはんに誘ってくれます。

このような、指示詞と数量詞の関係については本章のⅡ部で詳しく論じる。

ここで注意したいのは、‘一’が使われているかのような例が少し見つかることである。以下のように‘一人で’という形で使われる例である。

(14) 私は一人で大阪に住んでいます。

これは一見、‘一’が代名詞的に使われているように見えるが、この‘一人で’は、‘自分の力で’‘家族と離れて’といったニュアンスがあり、純粹に何か指示物を追跡しているわけではない。また、1.2.で見たように不定代名詞としてなら代名詞的用法は‘一’でも使用が可能になるが、定義から本章の考察対象に入れたい。ここで指摘した‘一’の特殊性については第10章でまとめて論じる。

また、‘二’以上ならずべて均等によく使用されるというわけではなく、実際には‘二’が圧倒的に多く、数詞が‘三’以上になると、次第に使用が減っていくことも Downing (1986) で指摘されている。本稿で扱う二人称直示表現では一層この傾向が強い。

2. 2. 助数詞に関わる制約

Downing (1986) の指摘によると、助数詞は‘人’の使用が圧倒的に多くて、独占状態であるとしている。その理由としては話題になりやすいからとしている。そして、‘人’以外の助数詞を使う場合には、指示詞をつけて明示的に‘definiteness’を成立させないと使えないという指摘もなされている。確かに、助数詞‘人’は一般に裸のまま代名詞的用法に使用されているし、それ以外の助数詞は使用例自体が少ないが、あったとしても指示詞を伴っている。

(15) チャーリー「それで…あ…あ…あ…のな…タイチ…」
「列車が突っ込んで来た時、俺が何か叫んだこと、覚えてないよな…」

タイチ 「ああ、君が“マンマー！！”って叫んだのは、二人だけの秘密だよ。」
(マスタ)

(16) 荷造りをほどいて中を改めると、第一の梱包からは二十数着のオーバー、第二の梱包からは百数十点の子ども服、第三の梱包からは五十数点の婦人服が出て来た。

…ぼくをさえ欺いて、全国あて数十の梱包の中に、この三個をしのび込ませておい

ただ！ (モッキン)

ただし、個性性が上がれば、‘人’以外でも裸で使用できるし、また‘人’に指示詞をつけない場合もあり、ここでの指摘は一概に支持することはできない。

(17) 「ようし、3びき いっぺんに くってやるぞ。」(3匹のこぶた)

(18) 甲：ドイツ語のできる人を探しているんですが。

乙：それならうちの科にいますよ、西尾君と桜井君。

甲：？彼ら／？二人／その二人，通訳したことがあります？

(田窪・木村 1997 の例を基に作成)

(17) の例は人間ではない‘ぶた’を主人公として描かれている話であり、動物を人間扱いしていると言える。また逆に (18) の例のように、話し手が知らない指示物であれば、人間であろうと裸での使用が制限される。これら個性性に関わる条件はさらなる検討が必要であり、本章Ⅱ部で細かく論じる。本章Ⅰ部では細かい議論は行わず Downing (1986) の指摘を大筋で認めた上で、先の議論に進む。なお、照応表現では圧倒的に人称代名詞の 3 人称、直示表現では 1・2 人称の例が多い。次節以降は‘人’のみを対象として議論を進めていく。理由は先行研究で指摘されているように、圧倒的に代名詞的用法は‘人’の例が多いことと、‘人’に絞ることで人称代名詞との比較が可能になり、代名詞的用法の特徴が明らかにできることの 2 つである。

3. 数量詞が代名詞的機能を持つプロセス

3. 1. 数量詞の抽象性

助数詞は類別詞とも呼ばれるところからも分かるように、あるカテゴリーを表す意味を有している。助数詞‘人’には‘人間’というカテゴリーを表わす意味がある。言うまでもなく助数詞とそれに共起する名詞は一対一対応ではなく、(19) のように助数詞のほうが意味がより抽象的で広い。

(19) 助数詞‘人’と共起する名詞：職員，学生，住民，教師，市民，女性，日本人…つまり、名詞からそれに対応する助数詞を決定することはできるが、助数詞から名詞をひとつに決めることはできない。こういった抽象性⁶⁵は数詞を付加してもさほど変わらず代名詞的用法のときにもその特徴として現れる。人称代名詞と比較してみると、数量詞代名詞的用法の抽象性は明らかであることをこれから見ていく。

⁶⁵ 数量詞の抽象性については、第 6 章 4 節で論じている。

まず、Downing (1986) でも指摘されていることであるが、日本語の三人称代名詞「彼・彼女」は性が特定できないと使えない。男性か女性かわからない場合は人称代名詞で表現することができない。また、「彼ら・彼女ら」という複数形を用いると、「代表+その他」のニュアンスが出てしまい、カップルなどの二人組を表現することができない。それに対して数量詞代名詞的用法は、性が特定できなくても数さえわかれば用いることができるし、カップルを‘二人’で指示することもできる。

(20) A 「クラスには田中という名前の人が二人いるんよ。」

B 「二人は男の子？」

(21) 新郎新婦は、高知市の会社員高見良児さん (29) と小学校教諭育恵さん (28)。踊りが縁で出会ったことから 2 人が企画し、友人や親類ら約 140 人が参加した。

04.8.12 (朝)

(22) エドワード「あなたも。僕のことを信じてくれない！！」「お父さんとお母さんは、僕をお兄ちゃんのお葬式にも呼んでくれなかった！」

祖父「フー」「いい加減に、二人を許してやらないか。」(マスタ)

次に、人称に関する区別を見たい。人称代名詞は、当然であるが一人称・二人称・三人称で異なった語を用いる。しかし数量詞は人数だけわかれば、人称に関わらず同じ形で使用ができる上に、人称の複合があってもかまわない。

(23=(4)) 「二人称→三人称」へ移動する例

(女性、そのご主人、キートン、ベイマーの会話)

女性→主人とキートン (二人称の例)

「待って！！」「二人には言わなかったけど、ベイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようにお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」

女性→ベイマー (三人称の例)

「ベイマーさん、今度は二人を手伝って！！」(マスタ)

(24=(15)) 「一人称+二人称」の複合の例

チャーリー「それで…あ…あ…あ…のな…タイチ…」「列車が突っ込んで来た時、俺が何か叫んだこと、覚えてないよな…」

タイチ「ああ、君が“マンマー！！”って叫んだのは、二人だけの秘密だよ」

(マスタ)

(25) 「一人称+三人称」の複合の例

娘 「ねえ お父さん……どうしてお母さんと一緒に暮らさないの？」

耕作 「ん？」 「それはね…今二人が暮らしたくないからそうしてるんだ」 (島)

(23) の例は、同じ談話において‘二人’が二人称になった直後、今度は三人称として用いられている例である。(24) (25) はそれぞれ人称を複合して用いられている。数量詞は、人称代名詞ほど指示物を細かく区切っておらず、ここからも意味的に抽象性が高いことがわかる。

3. 2. 数量詞代名詞的用法の間接性と仮説

1.2.で扱った例はすべて「数詞+助数詞」で、数量詞が単独で使用されていたが、すべてが代名詞的用法になるのではないということを指摘した。そこからも明らかのように、数量詞が語彙として代名詞のような機能をもっているわけではない。代名詞的に解釈するか違う解釈をするかというのは、指示物があるかないかなどの文脈によって決められる。ここでは語彙として代名詞機能を持たないということ、間接的な追跡と呼ぶことにする。語彙として代名詞機能を持っている人称代名詞とはこの点において、大きく異なる。では、どうして数量詞が代名詞的な機能を持てるのであろうか。

数量詞が数量表現として用いられるときは、第8章まで見てきたように、基本的に「三人の学生」「学生三人」「学生が三人いた」のように、センテンス内で名詞と共起する。この共起関係の片側が欠けたときに、もう片側を探すことになり、それが代名詞的機能につながるのではないだろうか。「昨日うちに三人が来たわ。」と何の文脈もなしに言われたら、「誰がきたん？」と聞きたくなくなってしまいうように、‘三人’が何を表すのか追跡したくなくなってしまふ。もちろん1.2.で見たように、何かを追跡できる場合ばかりではないが、共起関係が背後にあるのは確かである。

(26) のように、最初に数量詞と名詞が共起した後、二回目に名詞だけ省略するという形は、指示物と数量詞の結び付きを明示的に示している。また、(27) のように先行する普通名詞を受けて、数量詞が使われる場合もある。これは指示物と数量詞の結び付きが明示的ではなく、聞き手の解釈に委ねられている。つまり(27)において‘2人’が先行文脈中の誰と誰を指すのかは(26)ほど明示的ではない。

(26) 阪神大震災の被災者に国や神戸市などが貸し付けた災害援護資金の滞納問題で、神戸市が進める悪質滞納者に対する差し押さえの対象に市職員2人が含まれていることがわかった。2人は返済についての相談に一切応じなかったという。…市による

と、2人は30代と40代の男性職員。2005.3.2（朝）

(27= (9)) …, 兵庫県警は、同県明石市内の市立中学3年の男子生徒(15)を殺人未遂容疑で逮捕し、女子生徒も共犯として逮捕したと15日、発表した。2人は同じ中学の生徒で、…

(26) の例では‘市職員’という名詞のカテゴリーを表わす助数詞‘人’が使われている。この‘人’は3.1.で見たように抽象度の高い情報であり、それだけで追跡する指示物を特定することはできない。しかし文脈があれば、助数詞(カテゴリーに関する情報)に数情報を足すことで、対応する名詞をある程度追跡できる。数量詞(数詞+助数詞)の代名詞的用法とは、このように文脈を基に聞き手が対応する名詞を検索して解釈することで、指示物を追跡している。ここまでの議論をまとめて以下のように仮説を立てる。

(28) 本章I部の仮説：数量詞代名詞的用法は、「数詞+助数詞」による抽象的な情報と文脈を基に聞き手が解釈して指示物を特定する、間接的な指示物追跡である。

4. 人称代名詞と数量詞代名詞的用法

ここでは人称代名詞に関わる制限を概観しながら、それらの制限が数量詞の代名詞的用法では回避できることを見ていく。

4. 1. 照応表現

ここでは、1.3.で紹介した先行研究の指摘を具体的に検証してみたい。Downing(1986), ではHinds(1975)を引用して、数量詞代名詞的用法は人称代名詞の使用制約(heavy social constraints⁶⁶)から逃れられるという指摘をしているが、それらの制約について具体的な議論は見当たらない。Hinds(1975)では、日本語人称代名詞の‘彼’について、7つの仮説を立てている。それらの中からいくつかをピックアップしてその制限が数量詞代名詞的用法にはかからないことを見ていく。

Hinds(1975)では、家族に対して、社会的上位者に対しては‘彼’は使えないという指摘がある。個人差はあるだろうが、確かに家族や社会的上位者について言及するときには、人称代名詞が使いにくいのではないだろうか。以下のように、数量詞の代名詞的用法

⁶⁶ Hinds は日本語人称代名詞の使用に関して7つの仮説をたてて実証している。仮説は、young adultsは高校生よりも‘彼’をよく使う、女性は男性よりもよく使う、‘彼’は家族に使えない、社会の上位者には使えない、共有領域にいる人には使えない、翻訳によく使われる、何回も使うとよくないといったものである。

を使った例なら見つかる。(29) は自分の子供に対して、(30) は当時の社会的上位者である宮内省の職員に対して、数量詞の代名詞的用法が用いられている。

(29) 私には慧生と婿生という二人の娘がいます。その二人には中国と日本の血が流れています。私は日本に帰ってこの二人の娘をしっかりと育てていこうと決意しました。

(流転)

(30) 宮内府には、建国の初期、宮内省から選ばれて入江、加藤の両氏が来満されていました。お二人は、天皇陛下の「皇帝に仕えることはすなわち朕に仕えるのと同じである」というお言葉に従い、風格ある宮内府を作り上げようと尽力されましたが、… (流転)

これらを人称代名詞に置き換えると、少しすわりが悪くなるのではないだろうか。

‘(29) 私には慧生と婿生という二人の娘がいます。？彼女たちには中国と日本の血が流れています。

‘(30) 宮内府には、建国の初期、宮内省から選ばれて入江、加藤の両氏が来満されていました。？彼らは、天皇陛下の…

？を付けるほどではないかもしれないが、数量詞ほどニュートラルではなくなる。

また、Hinds には人称代名詞‘彼’は、繰り返し使用することはできないという指摘もあるが、数量詞の代名詞的用法ならこれも避けることができる⁶⁷。

(31) (本のまえがきより)

そのような過程において光を与えてくれたのが、寺村秀夫と彼の師である三上章だった。その後、この二人の日本語文法研究者が何をなしたのかを折りに触れて考えてきた。二人がいかなる目標のもとに… (三上)

(31) の書き出しで始まるこの本は、最後まで‘二人’という数量詞を人称代名詞の代わりに使用している。つまり、一冊の本が終わるまで繰り返し繰り返し使用が可能であるということである。

日本語の人称代名詞はかなり西洋言語に影響を受けており、翻訳ものでよく使用されている。そういったところから逆に使用制限が生まれているのは事実である。数量詞の代名詞的用法がそれらの制限を避けることができるのは、3. で議論したように、何かを直接

⁶⁷ 金田一 (1988) では、日本語では一人称代名詞を何度も繰り返して使うことができないという指摘をしており、この性質は一・三人称だけではなく人称代名詞一般について言うことができるのであろう。

指示するものではないからであろう。人称代名詞の指示範囲は狭いのに対し、数量詞の指示範囲はとても広いことを 3.1. で確認したが、それは数量詞の意味の抽象性を示している。人称代名詞が語彙として指示物を追跡するのに対し、数情報とカテゴリー情報だけを提示して、後は文脈から指示物を追跡するという間接的な方法だと、指示物に対する制限が発生しないのである。ここで見てきた一連の例はすべて、(28) の仮説で説明ができる。

4. 2. 直示表現～2人称

ここでは、直示表現の中でも特に数量詞が多く使われている二人称の用法に的を絞って議論したい。多くの研究で指摘されているように、日本語の二人称代名詞は、聞き手相手には使いにくい。例えば「日本人の頭の中には、西洋人と違い、代名詞という単語で相手を指すのは失礼に当たるといふ考えがあるようだ。(金田一 1988 : 167)」というような指摘がある⁶⁸。そこでは、その理由については詳しく述べられていない。また、日本語では一般に代名詞の代わりに、人を指すなら、実名・愛称、地位・役職、職業・役割名、親族名、年齢階層語などの多彩なバリエーションの中から選べる(金水 1989) という指摘がある。これによって、二人称代名詞の失礼さは避けることができるだろう。

(32) (職場の同僚(真仁田さん)に町でばったり会ったとき)

「(?あなた/真仁田さん) がこんなところにいるなんて珍しいですね」

(33) (先生が待ち合わせ場所に着いている。その後に到着した学生)

「(??あなた/先生) はやはり早いんですね」

(34) (友人の祖父に会ったとき)

「(??あなた/おじいさん) はいつもお元気ですね」

確かに、単数の時には代名詞を避けて、実名や地位などで表せばいい。しかし、これが複数になると、代名詞が使いにくいのは同じであるが、実名や地位で呼ぶのは少ししつこい感じがする。ここでは数量詞の代名詞的用法はすわりがいい。

(35) (先生と先輩が待ち合わせ場所に着いている。その後に到着した学生)

「(?あなたたち/?先生と先輩/お二人) はやはり早いんですね」

聞き手が先生と先輩なのだから、先輩を包含してしまう形で‘先生方⁶⁹’という言い方もできるかもしれない。しかし発話時に、複数いる聞き手の実名や地位、及びそれらの組み合わせ

⁶⁸ 金谷 (2002), 三輪 (2005) にも同様の指摘がある。

⁶⁹ この例文は人物などの設定がさほど細くないので、聞き手二人をまとめてしまう形で‘先生方’と呼ぶのも可能に見えるが、実際に個性が高くなり聞き手二人をまとめてしまえない状況だと‘先生方’とは呼べなくなっていくのではないだろうか。

わせを考えるのは容易ではなく、むしろうまく組合せができない場合が多い。例えば (36) の例は、ある女性（宿屋の主人の妻）がその主人と、客であるキートン相手に代名詞的用法を使っている。この場合、話し手の女性にとってキートンは宿屋のお客であり、主人と客をまとめて表わすには実名や地位ではいいにくい。(37) の例も同様に、3人のサラリーマンが会話している状況で、3人はそれぞれ違う会社に所属している。この場合も実名や地位では呼びにくい。

(36= (4)) (女性とそこご主人とキートンの会話)

主人の妻「待って！！」「二人には言わなかったけど、ベイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようにお願いしたんです。」

(37) (モレル、アングス、キートンの会話)

キートン「お二人は、知り合って長いんですか。」…「とにかく二人は、ライバル同士って訳ですね。」(マスタ)

ここで二人称代名詞の失礼さをどうして数量詞代名詞的用法が避けられるのか考察したい。二人称代名詞‘あなた’は、遠称‘あれ’の方角を表す形‘あなた’から来ている(岡村 1972)とされている。よって、背景には話者を起点に対象を指し示すベクトルのようなニュアンスがあるのではないだろうか。ここでは、話者が直接、指示物である聞き手を指示するという自体になんらかの使いにくさに関わっていると指摘するとどめる。それに対して数量詞は3.で議論したように、「指示物の数とそのカテゴリー」という情報を聞き手に伝えて、それをもとに聞き手が指示物を追跡する。両者の違いは、指示物を話し手が直接指示するか、聞き手が間接的に追跡して決定するかの違いである。

また、‘二人’には‘お二人’という対応する丁寧な形があるが、人称代名詞には対応する丁寧形がない。丁寧形があることで初対面の人や目上の人に対しても使用が可能になり、‘あなた’という人称代名詞よりも使用しやすくなるのではないかという考え方もできるだろう。しかし‘お’を付けなくても数量詞だけで失礼さを避けることはできる。

(38) (職場の同僚(真仁田さんと川添さん)に町でばったり会ったとき)

「(?あなた／真仁田さんと川添さん／二人)がこんなところにいるなんて珍しいですね」つまり丁寧形を持つことが主要因になって失礼さを避けられるのではなく、数量詞だけでも‘あなた’の持つ違和感を避けることができることを確認した。これはやはり、間接的な追跡であるという仮説(28)から説明ができるであろう。

5. まとめ

本章Ⅰ部では、これまではっきりと定義されていなかった数量詞の代名詞的用法に定義付けを行い、その機能を持つプロセスを考察した上で、人称代名詞との違いを指摘した。そこでは数量詞の代名詞的用法は、聞き手が受け取った情報から指示物を追跡するという間接性によって、直接指示する代名詞の使い難さを避けると結論付けた。

今後の課題として挙げられるのは、2. 節で触れた制約についてである。まず、2.1.で触れたように、数詞には制約があり、‘一’は使用できず‘二’の使用が多くなるということであった。また、‘三以上’でも使用例が途端に少なくなるということであった。特に今回扱ったものの中でも、二人称の用法では‘一’はもちろん用例がないが、相手が三人以上になっても用例が見つからなかった。これは、‘お二人’は言えるけど、‘お三人’⁷⁰‘お四人’が言いにくいのと関連するであろう。「三人はあっちへ行って、四人はここを手伝え！」というような、命令的な状況では、‘三’以上も使用可能であるが、今回扱ったような対話の状況とは少し違いがあるように感じる。‘三以上’については今後の課題としたいが、‘一’については章を改め次の10章で詳しく論じる。

また、2.2.で触れたように数量詞の代名詞的用法には、指示詞を付加しなければならない場合とらない場合がある。用例を見ていくと、指示詞だけでなく人称代名詞も同じように付加されることがある。指示詞や人称代名詞といった場指示語の付加に関わる条件は本章第Ⅱ部で詳しく論じる。

⁷⁰ ‘お三方’という言い方はあるが、何か独特のニュアンスが感じられる。例えば、筆者が口頭試問において、論文の査読者3人に「お三方には感謝しています。」とは言いにくいのではないだろうか。少なくとも‘お二人’と同じレベルでは論じることができないと考える。

II部 日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語⁷¹

1. はじめに

日本語の数量詞が代名詞のように使用されることはすでにI部で指摘した。これを数量詞の指示物追跡機能と呼んだが、ここでは、指示物追跡に付加される場指示語について掘り下げて論じたい。

1. 1. 指示物の個性

まず照応表現と直示表現の例を一つずつ挙げたい。

(1) (先行文脈で野口と秦という人物が出てきている) いかにも優秀だとはいえ、医院では二人は最も後輩であったから、雑用も多かった。(落日)

(2) (女性→聞き手二人への発話)「待って!!」「二人には言わなかったけど、ベイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」(マスタ)

I部の3.1., 3.2.で述べたように、(1)の例における‘二人’という数量詞は、‘二’という「指示物の数」と、‘人’という「指示物のカテゴリー」から聞き手が解釈を行い、指示物を特定すると言ったものであった。つまり、‘二人’という数量詞自体が、指示物を指し示す機能をもっているわけではないのである。よって指示物を特定できるかどうかは文脈などの要素が関わってくることはすでに指摘した。

(1)で‘二人’が追跡しているのは、小説の主人公とその同僚である。つまり、主人公は話題において個性が非常に高く、聞き手(読み手)にとっても指示物が追跡しやすい。

(2)の場合も、現場に存在する聞き手二人を指しているため、この場合も指示物が何であるか明白である。このように文脈における個性というものがこの数量詞代名詞的用法に関わっているのではないだろうか。ここでいう個性というのは一種の卓立性である。

1. 2. 代名詞的用法と場指示語

多くの場合、数量詞の代名詞的用法は(1)(2)のように裸で用いられる。これは裸でも聞き手が指示物を的確に追跡できることを意味している。では、数量詞が裸ではないとき、どういう形で使われるのであろうか。例えば、(3)のような実験説明の書き出しや、(4)のように突然話題が変わった時など、数量詞は裸では使われなくなることがある。

(3) (実験の説明)

⁷¹ 場指示語 (deictic words) は、本章において、主に指示詞と人称代名詞の上位概念として用いる。

①まず、現地協力者を二人探し出し、この二人に同じ方向を向いて隣同士に座ってもらう。

②その二人の間についたてを置き、お互いが見えないように視界をさえぎる。

③男の人と木のさまざまな位置関係を写した 12 枚の写真を用意し、二人に同じものを一組ずつ渡して、…。これで、二人の前には、写真がバラバラになって置かれていることになる。… (右や左)

(4) (流転の後主人公が船に乗って大陸を去るシーン)

それにしても、あとにした中国大陸には、日清戦争以来、どれほどの中国人と日本人の血が流されてきたのでしょうか。なぜ、日本人は中国人と手を結んで仲よくしようとはしなかったのでしょうか…。

私には慧生と嫣生という二人の娘がいます。その二人には中国と日本の血が流れています。私は日本に帰ってこの二人の娘をしっかりと育てていこうと決意しました。

(流転)

(3) は実験説明の書き出しで、「現地協力者が二人必要である。」と述べた後、それを数量詞で追跡しているが、はじめは‘この二人’‘その二人’という指示詞付きの数量詞が用いられ、それ以降は‘二人’という裸の形式が使われている。また (4) は、主人公が中国大陸を離れる時に戦争についての感想を述べてから、話題を転換して子供の話をしている。その話題が変わった後に、指示詞付きの数量詞が使われている。両者に共通しているのは、話題としての定着度が低いときに指示詞が使われているということである。Ⅱ部の 1.1.で述べたように、数量詞の代名詞的用法には指示物の個性性が関わっていると考えると、個性性が低い時には、裸では指示物を追跡できなくなり指示詞が付加されると言えそうである。3 節で詳しく見ていくが、用例を集めてみると、指示詞だけではなく人称代名詞も数量詞と共に使用され、指示詞と同じような機能を持っているように見える。指示詞だけでなく人称代名詞も関わっているということが、本章Ⅱ部のタイトルに‘場指示語’という言葉を使った所以である。

ここで扱う場指示語の存在は必ずしも必須のものではなくて、例えば上の (3) (4) の例文において、指示詞を取り去ってもさほど違和感はない。ここから先の議論では、場指示語が必須のものもあればそうでないものも出てくる。必須ではないものに関しては、なくてもいいのになぜここで指示詞が使われるのかという立場で議論を進めていく。实例に関して、説明を加えていくのが目的であり、完全に使用を予測するものではない。

1. 3. 本章Ⅱ部の目的と仮説

Ⅱ部では、先行研究の指摘や実例をもとに、数量詞代名詞的用法が裸で用いられる場合と場指示語が付加される場合、その違いはどのように説明が出来るのかを見ていく。

本章Ⅱ部の目的：場指示語の付加に関わる条件を明らかにする

以後、場指示語が付加されるかどうかの違いに注目していくものであり、指示詞‘こそあ’の違いなどは議論の対象とせずに進めていきたい。

場指示語には‘指示物を取り立てて個性性を高める機能’があると仮定して議論を進める。これを本稿では取り立て機能と呼ぶ。指示詞にこのような機能があることは、フランス語の指示詞の研究ですでに指摘されている。フランス語の「指示形容詞 ce+N」についての指摘を引用する。

つまり,ceN は,未だ指示対象としての資格が確立されていない名詞句を繰り返す時に用いられると考えられる. つまり ceN は先行文脈の中からある名詞句を“取り立て”るのである. (春木 1986 : 19)

この指摘が日本語にもあてはまるということを、数量表現の代名詞的用法を考察することで明らかにしたい。ここまでの議論を仮説として以下に提示したい。

(5) 本章Ⅱ部の仮説：数量詞代名詞的用法に付加される場指示語は、取り立て機能で説明ができる

なおここで言う取り立て機能とは、topicalization⁷²のことであり、一般に取り立て詞といわれるものの機能とは異なる。「は、も、こそ、さえ」などの取り立て詞は、様々な語に付加し、主題、対比、強調、評価といった機能を与えるものである⁷³。それに対して、本稿で扱う取り立て機能は、取り立てるプロセスに関わるものである。Ⅱ部の 1. 2. で見たように、

⁷² 本稿における topicalization とは、Givón(1983)などで使われている topic (文の中で際立ちを与えられているもの) の概念に基づく。

⁷³ 澤田 (2000) では、取り立て詞において「とりたて」という用語を研究者がどのように創出し、使用してきたかを概観している。

話題として定着度が低い時に指示詞が付加されていた。つまり、数量詞が裸では指示物を追跡できないような状況で使われて、その指示物の個性性を上げるというのが、本稿でいう取り立て機能である。機能が異なるので、場指示語と取り立て詞は「この二人は」「僕ら二人こそ」というように共起可能である。

1. 4. 場指示語について

すでに述べたように、場指示語 (deictic words) とは指示詞と代名詞の上位概念として、本章では用いている。指示詞も代名詞も 'deictic' であるという点において共通しているが、「この二人」と「僕ら二人」を同一のものとして扱うことに関しては異論が出る可能性があるだろう。ここでは、本章での立場を述べておきたい。

「この二人」と「僕ら二人」というのは、それぞれ「指示詞+数量詞」と「人称代名詞+数量詞」である。「指示詞+数量詞」に関しては、指示詞が連体の形をしており、数量詞との修飾関係が明らかである。よって、(6) のように指示詞の部分だけで助詞に接続しても文は作れない。それに対して人称代名詞は連体形がないということもあり、(7) のようにそのまま助詞に接続できる形である。つまり、形式としては NQC 型であり、後ろに来る数量詞との修飾関係がわからない。

(6) この二人は仲がいいですね。

*このは仲がいいですね。

(7) 僕ら二人は仲がいいですよ。

僕らは仲がいいですよ。

本章ではこういった統語的な相違点は認めつつも、機能的に見ると同じものであるという立場で議論を進めていきたい。その機能というのは 1.3. でも述べた '指示物を取り立てて個性性を高める機能' のことである。(8) (9) の例を見ると、どれも同一談話内において数量詞が単独で用いられたり、指示詞や代名詞が付加されたりしている。取り立て機能については、これから検討していくが、ここでは、指示詞も人称代名詞も同じ談話内で数量詞に付加したり消えたりするという点で共通していることを確認しておきたい。

(8) 「指示詞+数量詞」

a. ジュリアス「お母さんには頼りになる騎士が二人もいるじゃないか。」

母 「ああ・・・あの二人・・・大切な幼馴染をトラブルに巻き込むわけにはいかないわ。」(マスタ)

b. キートン「(写真を見ながら) この二人の身元はわかりましたか？」

シュルツ「ああ、二人とも殺されたベルガーの釣り船屋の客だった。」(マスタ)

(9) 「人称代名詞+数量詞」

a. 百合子「お父さん、おじいちゃん、あなた達二人には共通の欠点があります！！」

「二人とも、奥さんに逃げられ、そのくせ今でもその女性に未練タラタラ！！」(マスタ)

b. ジーン「社長はパリの本部長に私達三人の誰かをすすめるつもりよ。」…

ブライアン「まさか、登山で人事を決めるなんて・・・」

ウォルター「・・・あの社長のやりそうなことだ。三人はライバルってわけさ、ハハハハ。」(マスタ)

もうひとつ確認したいのは、「場指示語+数量詞」の主従関係についてである。「指示詞+数量詞」の例は修飾関係が明らかであり、数量詞に指示詞がついたものだということは明らかであろう。だが、「人称代名詞+数量詞」ではどうだろうか。(9) a.b.のような実例を集めて見ていくと、談話内で消えるのは人称代名詞のほうだということがわかる。「人称代名詞+数量詞」なら複数回使われるときに数量詞が落ちるということもあってもよさそうであるが、(9) a.で‘あなた達二人’という形で用いられていた代名詞が二回目には‘二人’になっているように、‘あなた達’が落ちている。(9) b.もそうである。実際には「人称代名詞+数量詞」で導入されたものが、直後に数量詞だけ落ちて人称代名詞が残るという例は見つからない。I部の4.1で紹介したHinds(1975)が指摘しているように、代名詞が複数回使われることは好まれないという仮説からも説明はできると思うが、ここでは数量詞に人称代名詞が付加されているのであり、代名詞に数量詞が付加されているのではないということを確認しておきたい。

比較的長い談話を通じて数量詞代名詞的用法が用いられると、「人称代名詞+数量詞」が使用された直後は数量詞だけで指示物を追跡しているが、談話が進んでいくと人称代名詞との交代が起こることもある。

(10) 「私には二人の親友がいた。」「ミハイルとニコライというモスクワのレーニン記念第一一七学校時代からの親友だ。」「ニコライは陽気な性格で、いつも冗談を飛ばしていた。」「それに対してミハイルは物静かだったが意志が強く、忍耐力のある奴だった。」「そして私…私達三人はいつも一緒だった。」…「私達三人はナタリア先生にすっかり夢中になった。そして、三人はそれぞれ思いをつづった手紙を先生に送った。」「ある日の放課後、先生は三人を教室に呼び、私達に言った。」…「私達は

その言葉を受けて、先生の名において誓いをたてた。」…「三人は別々の道を歩むことになったが、誓いは三人を結ぶ強い絆となっていた。」(マスタ)

(10) では、「私達三人→三人→私達→三人」という交代をしている。ただ、この例も‘私達三人’の直後に‘三人’が使用されている点において、(9) a.b.の例と同じであり、また、全体としては‘三人’が多用されていることから、数量詞に人称代名詞が付加されているという本章での立場は変わらない。これは人称代名詞が比較的使いやすい一人称の‘私達’であることも関わっていると考えられる。

2. 指示詞による取り立て

照応表現や一部の直示表現においては、指示詞が個性性を上げるために使われる。ここでは具体的に指示詞の付加に関する条件を見ていく。

2. 1. 人間名詞以外の指示物

I 部の 2.2.で指摘したように、‘人,匹,個,つ,本,冊…’などの様々な助数詞の中で、数量詞の代名詞的用法で使用されるのは圧倒的に‘人’という助数詞である。先行研究でも会話の中で話題になりやすいからだとされていた。助数詞‘人’が圧倒的に使用されるという事実からも、人間名詞とその他の名詞の違いは明らかであるが、さらに Downing (1986) では、人間名詞以外を表す助数詞が使われるときは指示詞を伴うという指摘をしていた。一概には言えないが、確かに‘人’以外の指示物を数量詞が追跡するときは指示詞を伴っており、伴っていなかったとしても理由は説明可能である。

(11) 荷造りをほどいて中を改めると、第一の梱包からは二十数着のオーバー、第二の梱包からは百数十点の子ども服、第三の梱包からは五十数点の婦人服が出て来た。…ぼくをさえ欺いて、全国あて数十の梱包の中に、この三個をしのび込ませておいたのだ！(モッキン)

(12) こうした工業製品を作ると同時に、文化を維持することは大変難しいはずだが、興味深いことに、日本はこの二つを両立させている。03.4.2 (朝)

(13) 野生の日本猿の生態研究におけるパイオニア的な存在である京都大学の伊谷純一郎氏に、今では古典的名著となった『高崎山のサル』という著書がある。この研究に続いて、水原洋城氏の帝釈峡の野生猿を調査した報告が『ニホンザル』として出版されている。この二冊を比べて読むと、…(教養)

(14) 我が家に2匹のネコが遊びに来ます。(野良さんです) 寝る場所などを用意してあげたら毎日2匹で寝に帰ってくるようになりました。行動をいつも一緒にしているのですが、この2匹の関係は何なのでしょう?? (ネット: はてな)

もちろん、‘人’がすべて裸で使われるというわけではないが、人間以外の助数詞の場合、指示詞が使われない例はほんのわずかである。収集した例では‘匹’に限られている。

(15) 「ようし、3びき いっぺんに くってやるぞ。」(3匹のこぶた)

(16) 「2匹は本当に仲がいい」

(15) のように、動物が主人公になっているお話での使用はすでに I 部 2.2. で指摘したとおりであるが、ペット愛好家のブログなどを見ると、(16) のように裸で代名詞的に使用されている例が非常に多い。そこではペットを人間に準ずるものとして扱っているわけで、指示詞の付加はそういった認識主体によって左右されるものである。

ここで挙げた例は、指示詞がないと文が成立しないというほど必須のものではない。ただ、人間名詞とその他の名詞ではそれらを追跡する助数詞によって指示詞の付加が説明できるという全体的な傾向をここで指摘しておきたい。また、人間以外の指示物を表す助数詞‘匹’でも、人間に準ずる扱いをしている場合は指示詞が付加されないことも確認した。

2. 2. 現場に存在しない指示物

ここで数量詞代名詞的用法の直示表現(三人称)の例を見たい。裸の例と指示詞がついた例を比べてみると、追跡する指示物が現場にいるかどうかは指示詞の付加に関わっているように考えられる。指示詞が付くときは現場にいない指示物で、付かないときには現場にいる指示物を追跡すると考えると実例がうまく説明できる。(17) は現場にいる指示物の例、(18) は現場にいない指示物の例である。

(17) (女性→ベイマーさんへの発話)

「ベイマーさん、今度は二人を手伝って!!」 (マスタ)

(18) 夫「結局お父さんと柳沢君は同じタイプなんだよ。どっちも職人だし自分の世界をもってるし、だからぶつかるんだと思うな、逆にね」

妻「そうかもしれないね」

夫「僕に言わせれば 似たもの同士だな あの二人は」 (みんな)

(17) において現場には、発話者の女性と、女性の主人、物語の主人公キートン、そして聞き手のベイマーさんがいる。当然、この‘二人’というのは、現場にいる‘女性の主人とキートン’を指す。(18) の例は夫と妻の会話で、その場にはいない‘お父さんと柳沢君’について話し合

っているシーンである。同様に、現場にいない三人称の指示物に、指示詞が付加される例は多く見つかる。

(19) (現場に不在の男女 2 人について話している)「実はね 私偶然聞いちゃったんです あの 2 人がクリスマスイブの日に 会う約束をしているのを……」(島)

(20) (発話者は日本にいる)「フィリピンには檜村と島がいる…あの 2 人なら うまくやってくれるだろう…」(島)

(21) (クラスでお別れ会をしている最中の学生のセリフ)「あの三人授業おわったとたん すっとなで帰っちゃったよ。」(こちら)

(22=(8)a.) (現場には母と子供だけがいる)

ジュリアス「お母さんには頼りになる騎士が二人もいるじゃないか。」

母「ああ・・・あの二人・・・大切な幼馴染をトラブルに巻き込むわけにはいかないわ。」(マスタ)

(23) (男性からかなり離れたところにいる二人について述べている)

男性「あの二人, 水を上までひいちゃったぞ。」(マスタ)

(19) (20) (21) (22) はすべて、現場にいない三人称の例である。すべてに指示詞‘あの’が付加されている。(23) については現場から遠く離れたところにいる指示物の例で、他の例とは少し異なるが、発話現場にいないということに変わりはない。よって、他と同様に指示詞が付加される。ここで挙げている例も、(17) に指示詞があってはいけないとか、(18) (19) (20) (21) (22) (23) に指示詞がなくてはいけないというような必須条件ではない。ただ、実例の傾向を捉えた上で、現場での存否を考慮すればうまく説明できるのではないかとこのことを指摘したい。

現場にいないだけでなく、すでに指示物が死亡している場合も同様に指示詞が付加されることが多い。

(24)「私はダットン沼で発見された男女の死因を調べにこの町に来たんだ。」「あの二人は、君のおじいさんが釣りをしていた辺りで消息を絶ったのに、方向違いのダットン沼で発見された。」(マスタ)

2. 3. 役割指示

金水 (1989) で、役割を指示する場合には日本語の代名詞が受けられないという指摘をしている。役割指示というのは特定の個体を指示しないものであり、(25) の例が挙げられている。

(25) 最高裁においては,一人の判事が二〇歳以下である。一九三六年には,*彼／その判事はカリフォルニア出身であった。金水 (1989)

この例文の前半が表しているのは,最高裁の判事の構成についてである。この決まりによると,常に最高裁には20歳以下の判事が一人いることになる。例文の前半にある‘判事’は誰か特定の人を指しているのではなく,値のない判事について述べている。その値のない判事を代名詞で受けることはできない。

金水 (1989) のこの例文における論点は,代名詞の使用に制限があるということであるが,数量詞の代名詞的用法の使用についても何か制限がありそうである。I部の2.1.で述べたように,‘一’の場合は数量詞を代名詞的に使用できないので,例文を‘二’に変えてみると代名詞的な使用が可能になる。ここでは指示詞が付加されないと違和感が出てくる。

‘(25) 最高裁においては,二人の判事が二〇歳以下である。一九三六年には,*彼ら／? 二人／その二人はカリフォルニア出身であった。

この例における指示詞は,前の文脈の中から‘二人’を取り出してきて,役割として提示している。ここで,以下のように特定の個体を追跡する例文に変えてみると,裸の数量詞でも許容度が上がるのではないだろうか。

(26) 現在最高裁には,カリフォルニア出身の判事が二人いる。二人／その二人はどちらも女性である。

以上の例から,役割指示というのも指示詞の付加に関わる要因として挙げられるのではないだろうか。

2. 4. 未知の指示物

田窪 (1989), 田窪・木村 (1997) などでは,日本語の三人称代名詞の使用に関わる制限として,対話の始まる前から話し手,聞き手に共通の要素か,現場で指し得る要素でなければならないことを挙げている。

(27) a. 僕の友人には田中というのがいます。英語がよくできるので,この仕事にピッタリだと思うんですが。

b. (その人／この人／*彼／*あの人) は独身ですか。じゃ,その田中という人に頼んでください。田窪 (1989)

(27) の例では,代名詞の使用制限と,指示詞 (こそあ) の違いについても言及している。本章は指示詞 (こそあ) の違いについて考察するものではないので,指示詞が付加されるかどうかだけに注目して,以下議論を進める。I部の2.2.で指摘したことであるが,指示物が‘二

人’になるような例を作ってみると、やはり裸の数量詞だけではすわりが悪くなる。

(28) 甲：ドイツ語のできる人を探しているんですが。

乙：それならうちの科にいますよ、西尾君と桜井君。

甲：？彼ら／？二人／その二人、通訳したことあります？

(田窪・木村 (1997) の例文を基に作成)

話し手のよく知っている指示物だと、裸の数量詞でもかなり許容度が高まるのではないだろうか。

(29) 夫 (夫婦の間に子供が二人いる) 「ただいま。」

妻 「おかえりなさい。」

夫 「あの二人／二人は元気にしてた？」

指示物が未知かどうかというのは、はっきりと二分できるものではなく、程度に差がある。

(28) は指示物を全く知らない例で、(29) は指示物を非常によく知っている例であり、どちらも極端な例である。実際の例では、これほどはっきりしているものばかりではない。ただ、この極端な例を比べてみる限りにおいては、指示物について未知かどうかというのも、指示詞の付加に関わる要因として認めても良さそうである。

(30) の例は、どちらも指示物を知っているが知識に差があるというような例である。ここでは知識が多いほうが裸の数量詞を使うという形で会話が進行していく。

(30) ダニエル 「四年前の SAS (英国特殊空挺部隊) のベイリー、ウッズ事件覚えているか？

キートン。」

キートン 「ああ、覚えているよ。」 「二人ともフォークランド戦争の英雄だ。」

ダニエル 「そう、その二人が何をとち狂ったか、オマーンに赴任した時パキスタンからの麻薬密輸に手を出した。」 「五十万ポンド稼いでジブラルタルまで運んだところで事件発覚…」

キートン 「そこで二人は MP 数人を虐殺して逃亡中……」 「俺も腹減ったな、何か食おうかなあ。」

ダニエル 「その二人が秘かにこの国に舞い戻ったらしい。」 (マスタ)

この会話をしている、キートンとダニエルは ‘二人’ が追跡しているベイリーとウッズを知っているが、親友であるというような深い関係ではない。ただ、キートンは元 SAS (英国特殊空挺部隊) の隊員という設定なので、この話題の ‘二人’ をダニエルよりは詳しく知っている。つまり、キートンの方が ‘二人’ に対する知識が多いわけである。知識量の差を考慮す

ると、この会話における指示詞の付加をうまく説明できるのではないだろうか。

2. 5. 個性との関係

2.1.で論じた助数詞‘人’の優位性は、人間は動物やものに比べて個性が高いということで説明ができる。言語を発するのが人間である以上、人間が話題になりやすいのは当然である⁷⁴。2.2.,2.3.,2.4.で論じた、現場に存在しない指示物、役割指示、未知の指示物などは、大きくまとめると抽象的な存在ということが出来る。2.2.の現場に存在しない指示物は目に見えないわけで、現場にある指示物よりも具体性に欠けるであろうし、2.3.の役割指示は、特定の指示物を持たないわけであるから、これも具体性に欠ける。そこでは指示物が何なのかというイメージがかなりぼやけてしまう。また、2.4.で論じた未知の指示物についても同じで、話し手が指示物自体を知らないのであるから、具体的に指示物を捉えることはできない。どの場合も、抽象的な指示物に指示詞がついて取り立てているということが出来る。指示物が抽象的であるから、個性が低くなりなにか取り立てるマーカーが必要になってくるのである⁷⁵。

3. 人称代名詞による取り立て

ここまでは指示詞による取り立てを見てきた。ここでは指示詞以外にも人称代名詞が直示表現において同じような機能を果たすということを見ていく。

3. 1. 人称代名詞の使用

照応表現と三人称の直示表現において数量詞代名詞的用法には指示詞が付加されることを2.節で見てきた。では他の直示表現ではどうなるのだろうか。ここでは人称代名詞が指示詞と同じような機能を持つことを見ていく。直示表現の一・二人称で数量詞代名詞的用法が使われる時に、指示詞が付く例はなかなか見つからない。以下のように裸で使われている例が多い。

(31) 一人称 (ナラダッタからタッタとチャブラの母への発話)

「きょうじゅうにたべものと水が見つからなければ三人ともゆき倒れだ」
(ブッダ)

⁷⁴ 言語表現において、人間を際立たせる仕組みがあるということは多くの研究で指摘されている。金水 (2005) ではこれを人間の言語的卓立性として、日本語の例を詳しく論じている。

⁷⁵ 人間名詞は他の名詞より個性が高いことや、具体名詞は抽象名詞より個性が高いことは Hopper and Thompson (1980) で指摘されている。

(32) 二人称 (キートンからモレル, アンダスンへの発話)

キートン「とにかく二人は, ライバル同士って訳ですね。」(マスタ)

しかし裸で使われない時, 指示詞の代わりに, ‘私達〇人’ ‘俺達〇人’ というように人称代名詞が付加される場合がある。

(33) 「そんな男は俺達 2 人とも知らないわけだし…」(島)

このように指示物が一人称の時, 人称代名詞が付加される例が多い。しかし, 二人称になるとかなり制限が出てくる。例えば, (34) (35) のように上下関係の上から下へ使う場合や, 非常に親しい間柄の例である (36) のような場合である。結果的に二人称では裸の使用が多くなっている。

(34) (社長から社員 3 人への発話) 「君達三人は私の期待以上の業績をあげてくれた。」

(マスタ)

(35) (4 人のやくざがきて, 親分のセリフ) 「それじゃお前ら二人で十分だろ, かたづけ
てこい。」(マスタ)

(36=(9)) 百合子「お父さん, おじいちゃん, あなた達二人には共通の欠点があります!!」

また, 三人称の直示表現では (37) のように指示詞とともに使われ, 人称代名詞が付加される例はほとんどない。

(37= (23)) 男性 (離れたところにいるキートンと父を見ながら)

「あの二人, 水を上までひいちまったぞ。」

女性「これでまたわさびが作れるねえ。」 (マスタ)

2.2. で挙げた例のように, 三人称は裸ではない時, 「指示詞+数量詞」という形で用いられることが圧倒的に多い。ここまで述べてきたことは集めたデータから言える傾向を指摘したのみである。よって, ここまで見てきた例に関して, 一・二人称の例で絶対に指示詞が付加できないわけではないし, 三人称を人称代名詞で置き換えることができないわけではない。

‘(33) ? 「そんな男はこの 2 人 (が) 知らないわけだし…」

‘(34) (社長から社員 3 人への発話)

?? 「この三人は私の期待以上の業績をあげてくれた。」

‘(37) 男性 (離れたところにいるキートンと父を見ながら)

? 「彼ら二人 (が), 水を上までひいちまったぞ。」

‘(33) ‘(37) に関しては例文の許容度を上げるために助詞‘が’を加えてある。それぞれ元の例文と比べると、少し座りの悪さがあり、また明らかに元の文とニュアンスが違ってくる。ここではこれらのニュアンスの違いを細かく論じる余裕はないが、直示表現における場指示語の使い分けは非常に興味深い。

ここでは集めたデータから、直示表現の一人称・二人称では基本的に裸のまま使用されており、必要なとき指示詞の代わりに人称代名詞が用いられること、また、三人称が裸でないときは「指示詞+数量詞」という形になることの二点を指摘しておきたい。

数量詞代名詞的用法に付加される場指示語

	一人称	二人称	三人称
照応表現	指示詞	指示詞	指示詞
直示表現	人称代名詞 (指示詞)	人称代名詞(制限付) (指示詞)	指示詞 (人称代名詞)

ここまでの指摘をまとめると、二人称では人称代名詞の付加に関して制限があり、三人称では指示詞が付加されるので、共に人称代名詞が付加されることはあまりない⁷⁶。よって、「人称代名詞+数量詞」の形で使われることが比較的多いのは一人称の例である。以後、一人称の例に絞って見ていく。

3. 2. 範囲指定による取り立て

一人称の複数が(38)のように使用されている場合、現場にいる参加者を全部含むなら数量詞は裸で使われることが多い。例文をここに再掲する。

(38=(31)) 一人称 (ナラダッタからタッタとチャプラの母への発話)

「きょうじゅうにたべものと水が見つからなければ三人ともゆき倒れた」

(38)の例は話し手が聞き手二人を包む形で‘三人’という数量詞を使っている。(39)の例も同じく現場には二人だけしかいない状況での発話である。

(39)「ああ、君が“マンマー！！”って叫んだのは、二人だけの秘密だよ。」(マスタ)

ここまでの例に共通するのは現場にいる人の数と使用される数詞の数が同じであることで

⁷⁶ 日本語の二人称代名詞自体に使用制限があり(金田一(1988)、三輪(2005)など)、三人称代名詞も同様に制限があるという指摘(金水(1989))がされている。その制限が「二・三人称代名詞+数量詞」の使用を減らしている原因のひとつではないだろうか。

あった。では、現場にいる参加者の数を基準とし、その全部を含まない場合はどうなるのだろうか。例えば、現場にいる参加者の一部しか含まない時は、以下のような人称代名詞を付加された例が見つかる。

(40) (場面には3人の参加者がいる：ダニエルからサムへの発話)

ダニエル「いや、美女にビールは似合わない、カクテルだ。」「サム、マティニをくれ。俺とこちらのレディにはベルモットを多めにな。」

サム「かしこまりました。」(ダニエルはルイーズの方を向く)

ダニエル「僕達二人に苦味は用がないからね。」

ルイーズ「え・・・ええ」(マスタ)

(41) (現場には沢山の部員がいる)

「へへへ」「まあ 当分は俺達三人のカベは破れねえだろうけどな」(柔道)

(42) (グラウンドにたくさんの野球部員がいる)

「わかったか！ 婦警チームなんかわしら3人でも勝てるぞ」(こちら)

(40) では、ダニエル、サム、ルイーズという三人が現場にいて、その中の二人だけを取り出しているのが‘僕達二人’になる。(41) は、柔道場で練習している場面である。たくさんいる部員のなかから、‘俺達三人’を取り出している。また、(42) では大勢の野球部員の中から‘わしら3人’を取り出している。

実際の現場にいる参加者ではなくても、想定した数の中から数人を取り出すタイプの例もたくさん見つかり、同じように取り出して説明ができる。

(43) ブレンダ「大丈夫よ、やり直しましょう！」「私達二人でもう一度…」「あなたならできるわ。」

モリスン「ブレンダ…」「君と一緒になくても仕事が元通りになるわけじゃない。」

(マスタ)

(44) 「いざとなったら俺達二人でも登ろうぜ。」(マスタ)

(45) 「オレたち三人で先生にしてあげられることを考えるんだよ。」「クラスのみんなじゃできないことを！…」(こちら)

(43) は今まで大勢でやってきた仕事を‘私達二人’でやりなおそうとするシーンであり、会社で働いていた大勢の人を背景として、‘二人’を取り出している。(44) は普通大勢で登山チームを組んで登るべき山に‘俺達二人’だけで登ろうとするシーンである。(45) はクラスのメンバーを背景として、‘オレたち三人’を取り出している。このように、想定さ

れる数の中から数詞の数を取り出すときにも、人称代名詞が用いられている。

反対に、現場にいないものを含む場合も人称代名詞が付加される例が見つかる。このタイプの例はそれほど多くはないが、以下のようなものである。

(46) (プルマーから子供達に向けての発話)「私達三人は競馬場で知りあった。コネリーとランドルはすでに友達同士だった。」(マスタ)

ここではプルマーがコネリーとランドルを含めて‘私達三人’と言っているが、コネリーとランドルは現場にいない。発話者は自分と、現場にいない二人を加えて、‘私達三人’という言い方をしている。また、作者が読み手に語りかける形で進行するタイプの小説も、人称代名詞が付加されていることがある。

(47) それまでの二年半、ぼくら三人は師に迷惑ばかりかけていた。(モッキン)

このような小説では、現場に誰と誰がいるのかはっきりしないまま代名詞的用法が使われることが多い。(47)の例もそうで、‘ぼくら三人’の話し手である‘ぼく’以外の二人は、その場にいるのかどうか分からない。このような例は、現場にいないものを含む(46)の例に準ずるものと考えられる。

一見反例に見えるかもしれないが、現場にいる参加者の数と同じ数詞でも「人称代名詞＋指示詞」という組み合わせになることがある。3.1.で紹介した例文を再掲する。

(48=(33))「そんな男は俺達2人とも知らないわけだし…」

この文は‘とも’が使われていることから明らかなように、‘両方とも’といった全体を強調するニュアンスがある。このような強調のニュアンスと相性がいいのは、範囲指定を行なうという人称代名詞の機能で説明ができるのではないだろうか。

(49)「世界は僕ら二人のものさ。」

このような(49)の例も範囲を強調するという説明ができるであろう。この発話が現場に‘二人’だけの状況でされたとしても、人称代名詞が共に使用されることは考えられる。ここでも強調といった操作が関わっており、それがなくなると、やはり現場にいる参加者の数が基準になると考えられる。

以上見てきたように、現場にいる参加者の数を基準として、現場の一部、または、現場にいない参加者をまとめる時に人称代名詞が使われていると考えれば、例がうまく説明できる。そうではない場合も、強調といった意味といっしょに用いられていた。この人称代名詞の機能は、ある部分を範囲指定し、その指定された範囲の中にあるものを取り立てているといえる。現場にいる参加者を全部まとめるなら、わざわざ範囲指定などしなくても

まとめりとして存在しているので、裸のまま数量詞が使われるのである。

3. 3. 個性性との関係

ここまで、人称代名詞が数量詞に付加されると、ある一定の範囲を指定することになりその範囲の中を取り立てるという主張をしてきた。そして、そこでは現場にいる参加者の数が基準になっていることも見てきた。具体的には、現場にいる参加者の一部しか含まない時、または現場にいないものを含む時に人称代名詞が付加されるということを指摘した。いずれにせよ現場にいる参加者の数というあらかじめ存在する範囲とは違う形で範囲を指定し直し、その範囲内にある指示物の個性性を上げるという点では同じである。

現場にいる参加者というのは、一定の個性性を持っているものと考えられる一方で、現場に不在のものは個性性は低いであろう。2.2.の指示詞の例を基に2.5.でも同様の指摘をしてきた。範囲指定による取立てとは、現場にいる同等の個性性を持ったものの中から、ある部分だけをさらに上げる操作、もしくは現場になくて個性性の低いものを上げる操作が関わっているということの説明ができるであろう。

4. 「指示詞+名詞」について

ここまで「場指示語+数量詞」について考察してきた。1.4.でも述べたが、人称代名詞は普通名詞などに付加したりはしないので、「人称代名詞+数量詞」は数量詞代名詞的用法のみに関わる現象である。しかし、指示詞は以下のように名詞にも付加できる。

(50) 自分が野々宮君であったならば、この妹のために… (三四郎)

(51) ところがその富士山は天然自然に昔から… (三四郎)

(52) あの君の知ってる里見という女があるでしょう。 (三四郎)

ここでも話題に定着していない指示物の個性性を上げるという取り立て機能で、説明が可能である。

‘(50) 自分が野々宮君であったならば、妹のために…

‘(51) ところが富士山は天然自然に昔から…

‘(52) 君の知ってる里見という女があるでしょう。

指示詞をとって見た文と比べるとわかるが、例えば (50) の文を ‘(50) と比較してみると ‘妹’ の部分の個性性が明らかに違ってくる。

春木 (1986) によると、フランス語の場合は、「指示形容詞 ce+N」と「定冠詞 le+N」との区別という議論の中から、指示詞の取り立て機能という主張が出てきている。しかし、

上の日本語の例を見ていると、どうしても指示詞自体の機能よりも、‘こそあ’の違いに注目してしまう事は予想できる。日本語には定冠詞のような指示詞と比較されうる対象がないゆえに、どうしても指示詞内部の使い分けに目が行くのであろう。日本語の指示詞研究において、‘こそあ’の区別について膨大な論文が書かれている事実からこれは明らかである。

5. まとめ

ここまで、指示詞や人称代名詞が指示物の取り立てに関わっているという点を示してきた。「指示詞+数量詞」も「人称代名詞+数量詞」も、場指示語 (deictic words) が数量詞に付加されて指示物の個性性を上げるという点において同じである。「指示詞+数量詞」は、個性性の低い指示物、具体的には人間以外の指示物や、抽象的な指示物 (現場に存在しない指示物、役割指示の指示物、未知の指示物) を数量詞代名詞的用法で追跡する時に使われて、それらの指示物を取り立てる。「人称代名詞+数量詞」は、現場にいる参加者の一部、または、現場にいない参加者を含むときに使われて、それらを取り立てる。以上の二点が、場指示語の付加に関わる条件である。

指示詞の取り立て機能は、複数ある指示対象の候補の中から、他より個性性が低い、または同等のものに付いて、その個性性を上げるというものであり、主に照応表現において使われていた。複数の既出の指示物の中から任意のものを取り立てるには、それが‘どれ’なのか指示しなければならない。‘どれ’を取り立てるか選ぶわけであるから、指示詞が使われることになるのである。人称代名詞による取り立て機能は、指示詞の取り立てと違い、‘僕達’がどの範囲を指すのか示すことで、その範囲内の指示物の個性性を上げるというものであった。人称代名詞は直示表現において、眼前に複数存在する人間の中から範囲指定することを確認した。

3.1.で指摘したように、直示表現の一・二人称の場合、「人称代名詞+数量詞」がよく使われており、指示詞を付加してみるとニュアンスが異なった。三人称では逆に「指示詞+数量詞」が使われており、人称代名詞を付加するとニュアンスが異なる。このように、直示表現における指示詞と人称代名詞の交代については今後の課題としたい。

第10章 数詞‘一’に関する一考察

ここまで見てきた数量詞に関わる議論で、数詞が‘一’の時だけ振る舞いが異なる現象がたびたびあった。ここではそれらをまとめた上で、どうして‘一’は異なった振る舞いをするのかについて論じる。

本章では‘一’という概念には2つのタイプがあるということを述べる。それぞれのタイプを要素包含型、要素取り出し型と呼び、それらのイメージスキーマを提示することで、数詞‘一’に関わる現象を説明できるということを主張する。

1. 数詞‘一’について

数詞‘一’に関しては、他の数詞と振る舞いが異なるということを指摘している研究がある(Downing1996, 加藤[美]2003, 建石 2006)。小説などから数量表現を集めて統計的に論じている研究では、「数『一』は、二以上のかずと比べ、その用法において非常に特殊な位置を占めている。(加藤[美]2003: 51)」というような指摘があり、いくつかの興味深い例が挙げられている。例えば、(不定)冠詞的な機能として、以下のような例が挙げられている。

(1) 京都の下鴨に一軒の寿司屋がある。

京都の下鴨に寿司屋が一軒ある。(意味が変わる) (加藤[美]2003)

QのNC型の例とNCQ型の例を比べると、NCQ型の例は、数を問題にしていることがわかる。「下鴨に寿司屋は何軒あるのか？」を述べるときには「京都の下鴨に寿司屋が一軒ある」というNCQ型を用いるであろう。それに対して上のQのNC型の例は、単に‘寿司屋’という名詞を導入している不定冠詞的な意味がある。

この章では、数詞‘一’の特殊性を数量詞の出現位置との関わりから論じたい。本論文ではこれまで、様々な数量表現を形式別に扱ってきた。各章で指摘したものもあるが、数詞を‘一’にすると意味・使用状況が変わったり、特殊な意味が付加されたりすることをここでまとめたい。また、それらがどう変わるのかをここで詳しく記述したい。数量表現ではないが、第9章で扱った代名詞的用法も加えて、数詞‘一’の特殊性を論じる。以後本章では、Qの数詞が‘一’の場合と‘二以上’の場合を分けて論じるが、表記は数詞が‘一’の場合は‘(1Q)’として、特に何も説明がなければQは‘二以上’を表すことに

する。

(2) 本章における表記

(1Q) のNC型	1人の学生が
Nの(1Q)C型	学生の1人が
NC(1Q)型	学生が1人
N(1Q)C型	学生1人が

2. 先行研究と本章の目的

1. 節冒頭で述べた先行研究の指摘をここでまとめたい。(2)で示した形式が本章で対象となるものであるが、先行研究は‘一’について指摘するものであり、本章で扱う形式と必ずしも同一ではない。

加藤[美](2003)では、①冠詞(不定冠詞)的な働きをする場合、②「先行する名詞の表すものただそれだけ」といった意味で用いられる場合、③「ヒトツ」の陳述副詞的な用法、④「ヒトツ」で「同じ」という意味を表す場合といった4つの用法を指摘している。それぞれの例を以下に挙げる。

(3=(1)) 京都の下鴨に一軒の寿司屋がある。(①)

(4) 今の波一つでどこか深いところにながされたのだということを、私たちは言い合わさなくても知ることができたのです。(②)

(5) 「次の飛行機で帰るんだったら、ひとつお願いがあるんだけど」(③)

(6) エビ天も蕎麦もツユも、一つ屋根の下、親子三代和気あいあいといっしょに暮らしている。(④)

この中で①②④の用法については3. 節で詳しく論じる。

Downing (1996)では、“Special Uses with the Number ‘One’”という節をたてて、数詞‘一’については他の数詞とは別に扱っている。そこで指摘されている‘一’の用法は、①純個体化 (sheer individuation)、②定阻止 (Definiteness Blocking)、③ぼかし表現 (Hedging) の3つが挙げられている。

①の純個体化については、以下のように説明している。

Pre-Nominal constructions containing the number ‘one’ are often used in contexts where no numeral-classifier pair is required grammatically, but

where the speaker wishes to emphasize the fact that s/he is talking about one instantiated member of the category denoted by the noun.(同 : 223)

「名詞カテゴリーのなかの一つの例示されたメンバーについて述べているという事実を話し手は強調する」という指摘をした後、以下のような例を挙げている（原典の例文はすべてローマ字表記）。

(7) 私を一人の患者ではなく、なにか実験の物体でも取り扱っているような正確さ、非情さがあった。

ここでの Q は単に「生きている肉体や血液としての自分」という話し手の視点を強調するという説明をしている。また、メタファに関わる (8) のような例も挙げられており、実物の棒として比較の焦点が提示されると、メタファがずっと生き生きとするという説明をしている。

(8) 自分の体が次第に硬直をおこして、一本の棒のようになってゆくを感じる。

②の定阻止について、指示対象が名詞句のカテゴリー全体を表しているという解釈を避けるためや、聞き手に指示対象を同定させないために数詞‘一’が使われるという説明をしている。前者の例は (9) で後者の例は (10) である。

(9) それが、あたしたちの、おとなの一つのつとめでもあるんですよ。

(10) この家は一人の少女を吸い込んでしまったことを思い浮かべ、その白さが少女を壁に塗りこめたばかりの新しさのような幻覚を持った。

(10) の例はすでに導入されている人物を指示しているが、不定化していると指摘している。

③のぼかし表現については、②のバリエーションであるとして、その理由を両者において Q は referent がただ one member や one type of member にすぎないという情報を供給するからであるとしている。

(11) 自分がはげでていやだと思って手入れをする、じゃぶじゃぶいろんなものをかけたりするってのはね結局ま、一つの差別構造である、…

(12) 彼は自分には関係のないこれら教授たちの暗闘が明日は一つの峠にかかるのだと考えて、…

建石 (2006) では、それまでの研究で指摘されてこなかった数詞‘一’の独自性について明確に論じている。そこでは西山 (2003) を援用して、非指示的名詞句の時には数量詞

‘一’しか使えないという主張を行なっている。

(13) 私が言ったことはあくまで{意見の一つ／一つの意見／一意見}なので、あまり気にしないでください。

(14) ??私が言ったことと彼が言ったことはあくまで{意見の二つ／二つの意見／二意見}なので、あまり気にしないでください。 建石 (2006)

西山 (2003) でいう指示的名詞句とは「対象を指示する機能を持つもの (西山 2003 : 59)」, 非指示的名詞句とは「そのような機能を一切もたないもの (西山 2003 : 59)」とあり, コピュラ文の措定文の述部にくるようなものが非指示的名詞句の一例として紹介されている。

(13) の例がまさにそうであり, そこでは確かに数詞 ‘一’ しか使用できない。

数詞 ‘一’ の独自性を指摘した後, 建石は, 非指示的名詞句にくるときの数詞 ‘一’ が持つ意味とそれが生じる原因を細かく分析している。対象としている形式は (13) の例にある三つのタイプで, それぞれ「N の + 一 + 助数詞」, 「一 + 助数詞 + の + N」, 「一 + N」と呼んでいる⁷⁷。

以上のように, 数詞 ‘一’ の特殊性についてはある程度の指摘がなされている。特に建石 (2006) では, それを非指示的名詞句という概念で明示的に説明している。しかし, 先行研究では, それぞれの特徴を個別に指摘しているのみで, 全体として数詞 ‘一’ がどういった共通の特徴をもっているのかという視点は見当たらない。また, 非指示的名詞句以外に数詞 ‘一’ の独自性はないのであろうか。本章では以後数詞 ‘一’ の特殊性を論じるにあたり, まず 1. 節で述べた 4 つの形式と代名詞的用法において, 数詞 ‘一’ が持つ特徴を記述した後, それらが全体として共通する特徴を抜き出しどうして数詞 ‘一’ がそういった意味を持つことになるのかを考察したい。

本章の目的 : 数詞 ‘一’ が持つ特徴を記述し, その共通点を明らかにし, それらの説明を試みる。

3. ‘一’ と ‘二以上’ の違い

数詞 ‘一’ の特殊性を見るにあたり, バリエーションの最も多い (1Q) の NC 型から始めたい。

⁷⁷ 本章では, ここまで本論文で扱ってきた現象と数詞 ‘一’ との関わりを論じる。よって, 非指示的名詞句にくる数量表現を対象にはしていない。

3. 1. (1Q) のNC型

3. 1. 1. 不定を表す数詞 ‘一’

1.節, 2.節で紹介した加藤[美](2003)が指摘していた不定冠詞的な働きについてここで論じる。

(15=(1)) 京都の下鴨に一軒の寿司屋がある。

第5章で詳しく論じたように, Q の NC 型には使用制限があり, どんな場合でも自由に使用できるというものではなかった。その制限は, N が定表現のとき Q が非制限的になるということで説明を試みた。その中で第5章の3.4.では旧情報を Q の NC 型が同定する例を挙げていた。文脈に既出であることを明示するためにページ番号を入れてある。

(16) (自転車が三台並べられてあった。p30) → ぼくはいったん納戸を閉めて, ガスレンジを拭き始めたが, そのうち, どうやって三台の自転車を納戸の中に運べたのだろうと考えた。p30 (避暑地)

(17) (氷海の中に巨大な冰山が二つ浮かんでいる。p 152) →何日かして, 二つの冰山は各々六機の円盤に鎖で引きずられてやってきた。p 155 (バンド)

(18) (劇場の前には幟が数本立っていた。p200) →数本の幟も微かな夕風に敏感に反応し, いまやすっかり生気を蘇らせている。p204 (モッキン)

少し前に談話に導入された N とその数量 Q をもう一度言うときは, Q の NC 型が使われているということであった。これらの例はたくさん見つかるが, ここで注意したいことは, すべて数詞が ‘二以上’ であるということである。また, Q の NC 型を使うことで, 指示詞がなくてもすでに導入されている N と同定することが可能である。数詞が ‘一’ の場合はむしろ新情報として談話に導入されるときに使われている。以後これらを不定用法と呼ぶ。

(19) 若い刑事は, 一枚のぶあつい封筒をぼくに手渡し, … (避暑地)

(20) ガニア「今から百年くらい前の話だ。 一人の男がこの近くの海で座礁して村人に命を救われた。」(マスタ)

(21) 「(会議の席で) 我々総合宣伝課からも ひとつのアイデアを持っています」(島)
少なくとも, ‘(19) のように一度導入された N を (1Q) の NC 型のみで同定することはできない。ただ, “(19) のように指示詞を付加すれば可能になるが, Q の NC 型単独で導入済みの N と同定ができる ‘二以上’ の場合とは違いがある。

‘(19) 若い刑事はぶあつい封筒を一通僕に手渡し, … 僕は (*一通の手紙 / 手紙 / そ

の手紙) をビリビリに破いた。

“(19) … 僕はその一通の手紙をビリビリに破いた。

これらは、2. 節で述べた Downing (1996) による定阻止 (Definiteness Blocking) という表現が適切かもしれない。なぜなら、N の導入時に (1 Q) の NC 型が義務的に使われているわけではないからである。主題の議論においても、(1 Q) の NC 型が例文に使われることがある。指し示すものが特定できないときは主題にできないとして以下のような例が (非文として) 挙げられている。

(22) *一人の男は私に話しかけてきた。 益岡・田窪 (1992)

3. 1. 2. 個体の全体性を表す数詞 ‘一’

Q の NC 型数量表現の使用条件に関して、第 5 章の 3.3. 節で論じたタイプは、文脈から「ある集団のその全体数を Q が表す」ということを理解するというものであった。そこで例を再掲すると、以下のように、ある定数を持つ集合を背景として数量表現が用いられていた。

(23) 家内は森財閥の娘だったから、私は自分の会社の千二百人もの社員を救うために、森財閥とつながりを持つしか手だてがなかったんだ。

(24) 二十数名の雄雄しき挺身隊員は、数万点のアメリカ衣料を分類し、整理し、梱包し、日本通運の営業所へ運び、数十の孤児院や母子寮へ発送した。

これらは、Q がある集合の全体数を表すわけであるから、当然‘二以上’でなければならない。ところが、数詞‘一’が使われている例を集めてみても、(1 Q) の NC 型で「ある個体の全体」という意味を表しているものが見つかる。

(25) 「(日本企業で働く外国人を対象に) 会社でどんな役割を果たしていますか」との問いに対しては、「専門知識を活かす仕事」「一つの事務所を任されている」… (ニッポン)

(26) 母は二分間で一人の人間を知り尽したようなつもりになっている。(青春)

(27) だが、ありとあらゆる色合いの昆虫や動物で埋め尽くされたその大きな地図は、なんとおぞましい一幅の曼陀羅絵を構築していたことだろう。(避暑地)

どの例も、‘全体として’とか‘すべて’といった意味で「ある固体の全体」を表している。

(25) については、事務所すべてをまかされているという意味で、責任ある地位にあるということをアンケートの答えとして述べているのである。(26) は、短い間にすべてを知ったつもりになっているという意味であり、同様に全体という意味が含意されている。(27)

は様々な構成要素を説明した後、それらが全体として一幅の曼陀羅絵を構築しているという意味である。

ただし、‘二以上’と‘一’とでは決定的な違いがある。前者の場合 Q が N の全体数を表しているのに対し、後者は Q に数的情報がなく、単に全体性を表すのみである。全体として‘一’であるということを示しているにすぎない。

このタイプは、それぞれの例を NCQ 型にしてもあまり意味の違いは感じられない。

‘(25)「(日本企業で働く外国人を対象に) 会社でどんな役割を果たしていますか」との問いに対しては、「専門知識を活かす仕事」「事務所を一つ任されている」…

‘(26) 母は二分間で人間を一人知り尽したようなつもりになっている。

‘(27) だが、ありとあらゆる色合いの昆虫や動物で埋め尽くされたその大きな地図は、なんとおぞましい曼陀羅絵を一幅構築していたことだろう。

‘二以上’の例の場合、NCQ 型に変えると全体性が消えることは第 5 章で確認したとおりである。よって‘一’と‘二以上’の違いは明らかである。本章 1. 節の冒頭で、不定冠詞的な機能(不定用法)は NCQ 型になるとなくなってしまうことを先行研究から見た。NCQ 型にすると数を問題にしている文になるという指摘であった。これは本論文第 4 章での主張である、NCQ 型は Q に焦点を置くということで説明ができる。しかし、本節で議論している全体性に関しては NC (1 Q) 型になっても保持されるのは興味深い。

また、全体性を表す数詞‘一’については、(28)の例のように抽象的な意味での全体性へと拡張している例も見られる。

(28) 目の前で美しい争いを展開している母親と妻の二人を、青洲は憮然として眺めていた。男が割り込むことの出来るものではないことを既に知っていた。自分を産んだ女と、自分の子供を産む女との間の、べっとりした黒いわだかまりには、カスパル流の剪刀さえ役に立たない。耐えきれなくなったとき男には咆哮があるばかりだった。しかし、彼は次第に医者になりつつ女たちの争いを見ていた。そして全く一人の医者になったとき、彼には女の争いは見えず聞えなかった。(華岡)

この例は少し長いが、医者になりかけだった彼はまだ医者としての完全体ではなかったのだが、後に一人の完全な医者になるという不完全体から完全体への変化が描かれている。そこでも数詞‘一’は抽象的な意味での個体の全体を表しているのである。

3. 1. 3. 共有の意味を表す数詞‘一’

ここで少し違うタイプの(1 Q)の NC 型を見たい。2. 節で紹介した加藤[美](2003)で

は、‘一’が持つ特殊な意味として‘一つ’が‘同じ’の意味を表すという指摘をしていた。

(29=(6)) エビ天も蕎麦もツユも、一つ屋根の下、親子三代和気あいあいといっしょに暮らしている

(30) …親子揃うて一つ竈の飯食へるものやったら、… 加藤[美] (2003)

ここで挙げられている例は、(1Q)のNC型ではなくQとNが連続しているかなり慣用的なものである。しかも助数詞は‘つ’に限っている。しかし‘一’という数が‘同じ’というニュアンスに関わりやすいということは言えそうである。

その理由として複数の人間が「一つのモノ」に関わると、客観的には「同じ」モノに関わっているといえることが考えられる。この用法は、最近ではあまり使われなくなってきたが、数「一」のもつ興味深い用法として指摘しておく。(加藤[美]2003: 54)

(1Q)のNC型でも同じような例が見つかる。また‘つ’に限ったことではない。そう考えると、最近でも例は見つかる。これらは複数の個体が何かひとつの個体を共有しているという意味で共通している。

(31) 戦前と戦後では完全に 世代的な断絶があるが 戦後の人間は今に至るまで1つの流れでつながっている (島)

(32) 当店の麺類は一つの釜にて茹であげております。そばアレルギーのお客様はご容赦くださいませ⁷⁸。

(33) 聖ヨハネ祭の日、私とアレクセイエフは、同時に一人の少女に恋をした… (マスタ)
共有の意味を確認するために、(1Q)のNCの前に‘同じ’というフレーズを入れてみても意味はあまり変わらずしっくりくる。

‘(31) 同じ1つの流れでつながっている

‘(32) 当店の麺類は同じ一つの釜にて茹であげております

‘(33) 同時に同じ一人の少女に恋をした…

大勢のものが何かを共有するとき、それが二つあるということももちろんありうる。ただ、そういうときに共有のニュアンスが出にくいことは、‘同じ’を挿入しにくいことと関連があるのではないだろうか。つまり‘二以上’よりも‘一’のほうが、より共有のニュアン

⁷⁸ 近所の麺屋の壁に貼ってあったお知らせより引用した。

スを持ちやすいのである。

(34) 当店の麺類は (?同じ) 二つの釜にて茹であげて おります。

ここで確認しておきたいことは、(1Q) の NC 型において、3.1.1. で扱ったタイプとここで扱ったタイプは明らかに性質が異なるということである。3.1.1. のタイプは ‘同じ’ を挿入することができない。

‘(19) 若い刑事は、(*同じ) 一枚のぶあつい封筒を ぼくに手渡し、…

‘(20) ガニア「今から百年くらい前の話だ。(*同じ) 一人の男が この近くの海で座礁して村人に命を救われた。」

‘(21) 「(会議の席で) 我々総合宣伝課からも (*同じ) ひとつのアイデアを 持っています」また、3.1.2. で扱ったタイプとも違うことが以下で確認できる。

‘(25) 「会社でどんな役割を果たしていますか」との問いに対しては、「専門知識を活かす仕事」(*同じ) 一つの事務所を 任されている」…

‘(26) 母は二分間で (*同じ) 一人の人間を 知り尽したようなつもりになっている。

‘(27) だが、ありとあらゆる色合いの昆虫や動物で埋め尽くされたその大きな地図は、なんとおぞましい (*同じ) 一幅の曼陀羅絵を 構築していたことだろう。

3. 2. N の (1Q) C 型

このタイプについては第7章で詳しく述べたように、数詞 ‘二以上’ と ‘一’ とでは振る舞いが異なる⁷⁹。第7章の議論を簡単に再掲すると、N の QC 型は大きく三つのタイプに分けられた。

タイプ1 N が固有名詞などで Q の内訳を説明するもの

(35) それから 米内吉田山本の三人は 一緒に朝粥を食って話をした。(山本)

タイプ2 N が Q の属性的に解釈できるもの

(36) 五人の内、中年者の三人は 大工、左官、足袋屋であった。(さぶ)

タイプ3 定の N の部分数を Q が表すもの : N の中の Q

(37) 研究グループでは、教授一人の下で三人の大学院生がそれぞれ別の研究を行っていました。学生の二人は、自宅から大学へ通っており、もう一人も隣のウィスコンシン州から来た人でした。(ネット : ブログ2)

細かい議論は繰り返さないが、タイプ1 とタイプ2 は N の数 = Q であるという共通点があ

⁷⁹ 建石 (2006) では、N の QC 型を対象にしているわけではないが、非指示的名詞句における「N の + 助数詞」に関して、同様の指摘がある。

った。それに対してタイプ3はNの数>Qであり、その結果、「Nの中のQ」という読みになる。このタイプは実例が少なく、コーパス的な手法で考察を行ったが、小説をベースとしたコーパスで、数が‘二以上’の場合、タイプ3が出てこないということはすでに指摘した通りである。(37)の例は、インターネットで数時間探してやっと見つかった例である。ところが、数詞‘一’になると途端にタイプ3がたくさん出てくることもすでに指摘した通りである。また逆に言えば、タイプ1、タイプ2の例がないと言うこともできる。

(38)「ねえ、みどりまだ来ないの？」と、ホステスの一人が苛々した声を出す。

(女社長)

(39)そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。(鼻)

(40)あげくのはてに、女の一人にナイフでメッタ刺しにされ、アパートの前のドブの中で死んでいたよ…(マスタ)

(41)刑事「ああ、そうだよ。マーカムも容疑者の一人にあがっている。」(マスタ)

ここにある例はすべてタイプ3のもので、すべて「Nの中のQ」と言い換えられる。タイプ1はQの内訳を列挙するタイプなので、数詞が‘一’だと列挙する意味がなくなってしまふ。

‘(35) *それから米内の一人は一緒に朝粥を食って話をした。

タイプ2については、数詞‘一’が使われてもよさそうであるが実際に例がないのは、どうしてもタイプ3の部分数解釈が優先されてしまうので、使用が避けられているのではないだろうか。

‘(36)五人の内、中年者の一人は大工であった。(中年者の中の一人)

部分という解釈が出てくるのは数詞‘一’の持つ特徴であると考えられる。その理由については後に4.節で述べる。

3. 3. N (1Q) C型

すでに2.節で紹介したが、先行研究で‘一’が持つ特殊な意味として‘一+助数詞’が「先行する名詞の表すものただそれだけ」という意味で用いられているということが指摘されている(加藤[美]2003)。そこでは、NQC型のみならず絞って指摘しているわけではなく、NQ(格助詞が後続するものも、述部にくるものも分けずに扱っている)の順序で、特殊な意味になるとしている。それらは主に‘で格’で使用されるとしている。

(42= (4))今の波一つでどこか深いところにながされたのだということを、私たちは言

い合わせないでも知ることができたのです。

(43) 全く、吾八はこの宿に八年で、五十に近い。前の前半は包丁一つで、海岸線の町々を渡り歩いていたのだ。

(44) おばあちゃんの話しによると、兩人とも猿股一枚で、あぐらをかいて、まるで博奕打ちのようだったそうです。 加藤[美](2003)

確かに(45)のような‘で格’の例が多いが、「先行する名詞の表すものただそれだけ」という意味を表すものなら(46)(47)のように他の例も見つかる。

(45) …この数の子1個で1升飲める。(島)

(46) 今の仕事も、私一人の力でここまでできましたわ。(私=女性) (マスタ)

(47) A「ったくぜいたくだなあ、高純度のヘロインをそんなに…」

B「売人に渡せば五千ポンドにはなるぜ。」「女一人を殺すのにもったいねえ。」

(マスタ)

ただし、「先行する名詞の表すものただそれだけ」という意味なら、‘一’に限ったことではなくて、‘二’でも文脈次第では表せる。

(48) 女の子2人で夜に外出なんてだめですよ。

ただ、‘二以上’よりも‘一’のほうが、「ただそれだけ」というニュアンスを持ちやすいということを確認したい。明らかに数詞‘一’が数情報を示していない例がある。それらは、固有名詞に数詞‘一’が後続している例で、わざわざ数情報を追加しなくても、数が‘一’であることは明らかである。

(49) そして徹吉一人が、未だに鈴木治衛門の土蔵の中に日を送る身の上となった。

(楡家)

(50) その妹が自分の後継者としてつつがなく育ってき、そのゆえにこそ聖子一人を桃子たちから区別して一種特別の情をそそいできただけに、その落胆、その憤りは根強かったといえる。(楡家)

(51) もし岩殿に霊があれば、俊寛一人を残したまま、二人の都返りを取り持つ位は、何とも思わぬ禍津神じゃ。(俊寛)

これらの例はQが数情報以外の何かを示しているのであり、‘二以上’の数が持つ情報とは根本的に異なるといえる。これらの例においては‘一人’を付加することで、単独性を表していると言えそうである。こういう例を見ると、やはりN(1Q)C型が「先行する名詞の表すものただそれだけ」という意味を持ちやすいことが確認できる。

「ただそれだけ」というニュアンスは、N (1 Q) C型だけに限ったものであろうか。(1 Q) の NC 型についても同様の指摘がされており、それを紹介する。張 (2001) では日本語と中国語を対照することで、日本語の「1 + 助数詞」には特殊な意味があるとしている。その一つとして (52) のような例文を挙げて量が少ないというニュアンスを出すものがあるとしている。

(52) ラジオが音楽を流していたが、あまり好きなものではなかった。しかし、起きている間、ただ一つの声を消すのは寂しかった。張 (2001)

これは‘ただ’が共起しているので量の少なさが出るものと思われるが、こういった‘ただ’を付加した (1 Q) の NC 型と‘N (1 Q) C型’では意味が同じになるのであろうか。

(53) それに同じ野口清作が現実に勉学に励み、村でただ一人の医師になったのだから両親はその名をつけるのに特に不満もなかった。(落日)

‘(53) # それに同じ野口清作が現実に勉学に励み、村で医師一人になったのだから両親はその名をつけるのに特に不満もなかった。

上の例は‘ただ’を付加した (1 Q) の NC 型で書かれているが、それを‘N (1 Q) C型’に変えてみると明らかに非文になる。つまり、量の少なさを表す点において共通すると言いつつも何か違いが存在するのである。‘(53) から‘N (1 Q) C’の部分を抜き出して座りのいい文脈を当ててみると以下のようなになる。

“(53) 村は医師一人になった。(他の人間はいなくなった)

つまり、(1 Q) の NC 型は、「医師のカテゴリーでは 1 人だけ」、NQC 型は、「人間のカテゴリーでは 1 人だけ」という意味解釈になる。背景とするカテゴリーの種類が違うのである。これは第 8 章で論じた意味の重点を考えれば説明ができる。NQC 型は NQ の連続において Q に重点を置くのに対して、Q の NC 型は N を底とするので、N を中心に理解するという主張を行なった。つまり、Q を意味の中心とするか N を中心とするかの違いであった。Q は数情報とカテゴリー情報であり、“(53) の例において‘人’というカテゴリーが意味の中心になる。つまり、人間カテゴリーを意味の中心とするのである。それに対して、(53) は‘医師’という N が意味の中心になるので、医師に当てはまるものしか対象とできない。そこから (53) と“(53) の違いが出てくるのであろう。

3. 4. 代名詞的用法

代名詞的用法については第 9 章で詳しく論じたが、そこですでに指摘したとおり「指示物の数」が‘一’の時は代名詞的な機能が持たなくなるということであった。

(54) 私のクラスには劉さんという留学生がいます。(彼／劉さん／*一人) はとても明るく…

同じような例でも、指示物が‘二’になると追跡が可能になる。

‘(54) 私のクラスには劉さんとジョンさんという留学生がいます。(彼ら／劉さんとジョンさん／二人) はとても明るく…

まず、ここで確認しておきたいのは、こういった代名詞的な用法では数詞‘一’が使えなくなるということであるが、実際は全体数を提示した後なら、代名詞に近い使い方ができる。ただ、第9章の目的は、代名詞と数量詞代名詞的用法の違いを論じることであったので、人称代名詞に置き換えられないこれらの例は代名詞的用法には含めずに考察した。

(55) 東郷「明日…？ずいぶん急な話だな…何かあるらしいが…」「それで、どうして俺なんだ？」

依頼者「最初からきみに頼めばよかったのだが…実は、この2週間の間に、君と同業のものが二人…」「一人はライフルでしくじり、もうひとりのナイフ使いは…」「なぜかゴドノフの間近まで行きながら、心臓麻痺で急死！」

(ゴルゴ)

ただ、これらの例は不定代名詞などと呼ばれることから、言語学では他の代名詞とは区別されつつカテゴリーとしては代名詞に含まれている。数詞‘一’がこういった不定代名詞として使われている例なら非常に多く見つかる。

(56) 「一九三六年、共和政府を支援する唯一の国、ソ連から二人の軍事顧問が訪れた…一人はトムスキーという。流暢なスペイン語をしゃべる前途有望なインテリ…もう一人はたたき上げの軍人で、爆弾の専門家アレクセイエフ。二人の加勢を得、私の小隊は村々を解放した。」(マスタ)

(57) ホフマン：二つの解決法を試している。一つは音楽を聴いたりして気分を変える。もうひとつは問題を書き出してみる。03.4.2. (朝)

(58) 私はこの四日間に、京極堂につられるように本を三冊読んだ。一冊は漬物の発酵に関する専門書である。後の二冊は仏教系の新興宗教の開祖が記した経典と、中国の魚料理の本である。(うぶめ)

代名詞的用法における数詞‘一’の特徴は明らかである。代名詞として先行する名詞を照応することはできないが、先行する複数の名詞から一つを抜き出して照応する不定代名詞としてなら使用は可能である。

4. ‘一’ の概念の成立

ここでは、‘一’ という概念がどうやって成立したのかという先行研究での指摘を取り上げ、それらを基に ‘一’ の解釈に関する仮説を立てる。先行研究で、二の概念の後で一概念は成立したとしている指摘がある（切替 2006）。切替が根拠としているのは、印欧語で数詞 ‘一’ だけは成立が遅れ、またその語源に 2 パターンあるという泉井（1978）の指摘や、ラッセル、ユンクなどが指摘する哲学的な ‘一’ に関する説明である。

泉井の研究では、印欧語に ‘一’ を表す語源が二つある（*sem- と *ei(no)-）として、原印欧語域の内部において、‘二以上’ では共通の表現要素が定着していたのに対して、表現要素が二つある ‘一’ は、定立に選択の余地があったとしている。

すなわち両区域（*sem- を ‘一’ として使用する区域と *ei(no)- を ‘一’ として使用する区域—岩田）の方言はそれぞれ *sem- と *ei(no)- の両要素を、共にみずからの中に持っていた。両区域の方言は、この両要素が本来表すそれぞれの意味に従って、その好むところの一つを〈1〉の数詞として、むしろ意識的に選定した。従ってそこには、はじめから、無意識的に成立していた〈1〉の数詞はまだ存在しなかった。（泉井 1978 : 192）

また、ラッセルやユンクの指摘をここに再掲はしないが、ユンクのを基にした河合（1994）の指摘を見ると、ここでも数詞 ‘一’ が ‘二’ を前提としていることが端的に指摘されている。

二の象徴性について、ユンクは中世の哲学者の考えを援用しながら、人間にとって最初の数は一ではなくてむしろ二ではないかと述べている。つまり一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ「一」の概念も生じてくると考えられる。（河合 1994 : 129）

切替（2006）の目的は、これらの研究を紹介した上で 2 の概念の後で 1 の概念は成立したのではないかと仮定し、アイヌ語の数詞 ‘一’ の語源を探ることである。そこでは、ア

イヌ語の *ár* はもともと「二つ一組の片方」を意味し、後に純粋な数 1 をも示すようになったという主張がなされている。本章では、これらの指摘のなかで、泉井（1978）で述べられている 2 タイプの ‘一’ の祖語に注目したい。

(59) **sem*- と **ei(no)*- の両要素について（泉井 1978 : 190）

**sem*- 「一つにまとめる、集める」意味

**ei(no)*- 「いくつかのなかから特に一つを抜き出して示す」意味

例えば英語においては、**sem*- が *same* になり、**ei(no)*- が *one* や *a* になっているということである。つまり、英語では ‘一’ を表すために **ei(no)*- を選定したことになる。当然他方を選定している言語もある⁸⁰。

これらの指摘をまとめてみると、以下の 2 点になる。

(60) i ‘一’ という概念は ‘二以上’ を前提としていること

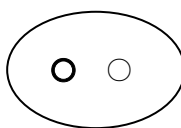
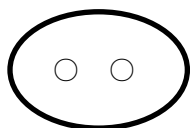
ii 前提の方法は 2 通りあり、‘二以上’ をまとめて ‘一’ にする場合と、‘二以上’ の中から ‘一’ を取り出す場合であるということ

印欧語の議論をベースにしているとはいえ、これらの指摘は ‘一’ の概念を考えるにあたり非常に興味深い観点をもたらす。本章ではこれらの指摘を基に、‘一’ の概念を 2 タイプに分けて仮説を立ててみる。ここでの仮説は、‘一’ の概念に 2 種類あるというもので、この 2 種類の概念が英語などの印欧語では、定冠詞と数詞 ‘一’ に機能分化していったと主張するものではない。

(61) 仮説： ‘一’ の概念には以下のような 2 タイプがある

要素包含型

要素取り出し型



図で表しているのは 2 タイプのイメージスキーマである。この仮説で立てた 2 タイプが連続して表れている例が (62) である。はじめの下線部は要素取り出し型で、次のは要素包含型である。

(62) シラバスを設計する場合には、かならず語彙が含まれるが、その語彙はいわゆるシソーラス、つまり意味分野別体系のかたちで表されることが多い。そのシソーラスの

⁸⁰ 詳しくは泉井（1978）を参照されたい。

各項目あるいはひとつの意味分野をノーションと呼ぶ。たとえば、コソアはいわゆる指示に関することばとしてひとつのノーションであるし、「健康」「病気」「元気だ」「だるい」などは健康に関する語彙としてひとつのノーションを構成する。(日本語)

5. 考察

4.節で立てた仮説をもとに、ここでは3.節でみた数詞‘一’の特殊性を説明していきたい。3.節で見た特徴はほとんどが要素取り出し型で説明できる。仮説で立てた2つのタイプは‘一’のスキーマとして働いており、状況に応じてそのどちらかのスキーマが使用されるというようなシステムを想定して考察を進めたい。

5. 1. 要素取り出し型

仮説で立てた2つの概念のうち、要素取り出し型から先に考察していきたい。こちらのほうが多くの現象に関わっているからである。

5. 1. 1. (1Q) の NC 型の不定用法

まずは、3.1.1.で述べた(1Q)のNC型の不定用法から説明したい。不定というものは新情報であることから考えてみると、談話への導入のためのマーカであるといえる。メンタルスペース理論でも、不定冠詞をスペースへの導入として捉えている。

(63=(20)) ガニア「今から百年くらい前の話だ。一人の男がこの近くの海で座礁して村人に命を救われた。」

この例などは、明らかに新しい要素を談話に導入している。この例において導入というのは、‘男’というNが指示する対象の中からある‘一人’を抜き出して、談話に導入することである。このように不定マーカを集合からの抜き出しで説明しているものに、Givón (1981)がある。そこでは、‘一’が不定マーカになる理由として以下のように説明している。

When a referential argument is introduced for the first time into discourse, the speaker obviously *does not* expect the hearer to identify it by its unique reference. Rather the speaker first identifies it to the hearer by its *generic/connotative properties*, as *one member out of the many within the type*. This is a peculiar situation, where the speaker wishes to perform two seemingly conflicting tasks:

(i) introduce a new argument as *referential/existing*; but

(ii) Identify it by its *generic/type properties* (Givón1981: 52)

このように、集合からの抜き出しで不定マーカを説明するなら、(1Q)のNC型の不定用法は要素取り出し型という概念で説明ができる。数詞‘一’には、集合物からその一要素を抜き出すという概念が内在されているのである。

5. 1. 2. Nの(1Q)C型:「Nの中のQ」という意味

続いて3.2.で扱った、Nの(1Q)C型である。これはNの中のQという意味で、タイプ3の部分解釈しかできないということであった。

(64=(40)) あげくのはてに、女の一人にナイフでメッタ刺しにされ、アパートの前のドブの中で死んでいたよ…

これもまさに要素取り出し型で説明ができる。‘一’という概念には集合からある要素を取り出すという意味があり、そのためタイプ3の部分解釈が優先的に適応されるのである。

5. 1. 3. N(1Q)C型:「ただそれだけ」という意味

3.3.で述べたN(1Q)C型が「ただそれだけ」という意味を持つことも、同様に要素の取り出しという説明ができる。

(65=(49)) そして徹吉一人が、未だに鈴木治衛門の土蔵の中に日を送る身の上となった。

そもそも「ただそれだけ」という意味は集合を前提とする。(65)の例においては、‘徹吉’以外の幾人かのものは土蔵の中にいなくてもいいが、‘徹吉’だけは土蔵の中にいるのである。このように他の参与者との関わりがあってはじめて「ただそれだけ」という意味が出てくるのである。集合の中から、ある要素を取り出して他とは違うという説明をするのがこの用法であるので、これも要素取り出し型との関わりが確認できる。

5. 1. 4. 不定代名詞的用法

3.4.で見たように、数詞‘一’は代名詞的用法には使用できないが、不定代名詞として可能であった。

(66=(55)) 「最初からきみに頼めばよかったのだが…実は、この2週間の間に、君と同業のものが二人…」一人はライフルでしくじり、もうひとりのナイフ使いは…」「なぜかゴドノフの間近まで行きながら、心臓麻痺で急死！」

これもまさに要素取り出し型で説明ができる。ある集合を前提としたときしか代名詞とし

て照応できないということは、‘一’という数が持つ概念から説明ができる。

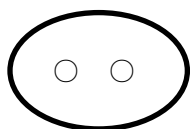
5. 2. 要素包含型

数詞‘一’に関する特殊性を3.節で詳しく見たが、それらはほとんどが要素取り出し型というスキーマにあてはまるということをここまで見てきた。しかし、要素取り出し型では説明できない現象が二つ残っている。3.1.2.で見た、個体の全体性を表す数詞‘一’の用法と、3.1.3.で見た共有の意味を表す数詞‘一’の用法である。これらは要素包含型で説明ができるということを見ていく。

5. 2. 1. 個体の全体性を表す用法

いくつかの要素があり、それらを包含する形で‘一’という概念ができるというのが要素包含型であった。イメージスキーマを再掲する。

(67) 要素包含型



この例として4.節で挙げた例を再掲する。

(68= (62) から抜粋) たとえば、コソアはいわゆる指示に関することばとしてひとつのノーションであるし、「健康」「病気」「元気だ」「だるい」などは健康に関する語彙としてひとつのノーションを構成する。

この例において、全体が一つのまとまりを示しているということだけが(1Q)のNC型で示されており、その要素がいくつあるのかということは明示的に示されていない。(68)においても、「健康」「病気」「元気だ」「だるい」など」というように、要素の数はぼかされている。次の例も同じようなタイプであろう。

(69) バラバラの破片を組み立ててみたら、一体の仏像が出来上がった。

このように要素が何か、またその数はいくつかを不問にして、全体が一つのNになっているということだけを表すのがこのタイプだと考えると、3.1.2.で見た、個体の全体性を表す数詞‘一’の用法との関連性が考えられる。

(70= (25)) 「(日本企業で働く外国人を対象に) 会社でどんな役割を果たしていますか」
との問いに対しては、「専門知識を活かす仕事」「一つの事務所を任されている」…

(71= (26)) 母は二分間で一人の人間を知り尽したようなつもりになっている。

(72= (27)) だが、ありとあらゆる色合いの昆虫や動物で埋め尽くされたその大きな地図

は、なんとおぞましい一幅の曼陀羅絵を構築していたことだろう。

(72) については、昆虫や動物といった様々な要素が明示的に表現されているものの、その数は不明で、(1Q)のNC型が表すのは、全体として‘一幅の曼陀羅絵’になっているということだけである。(70)(71)に関しては、要素の数だけでなくそれが何であるかさえ表現されてはいない。ただ、文脈から想像はできる。(70)に関しては‘事務所’の中の様々な仕事要素であり、(71)は‘人間’の中の様々な部分が要素であり、それらの諸要素を包含する形で、(1Q)のNC型が使用されている。

5. 2. 2. 共有の意味を表す用法

数詞‘一’が共有の意味を持ちやすいということは3.1.3.でみた。この共有の意味というのは、3.1.2で見た全体性を表す意味からの拡張であると考えられる。

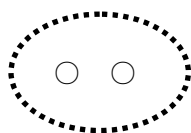
(73=(31)) 戦前と戦後では完全に 世代的な断絶があるが 戦後の人間は今に至るまで1つの流れでつながっている

この例などは、5.2.1.の全体性の場合と説明と同じように説明できる。要素としては、様々な世代(の人間)があり、それらを包含する形で、‘1つの流れ’という(1Q)のNC型が使用されている。ただし、全体性を表す(74)のような例と比べると、(1Q)のNCの部分が、はっきり輪郭を持っていない点異なる。

(74=(25)) 「(日本企業で働く外国人を対象に) 会社でどんな役割を果たしていますか」
との問いに対しては、「専門知識を活かす仕事」「一つの事務所を任されている」…

(74)の例ははっきりとした輪郭を持って‘事務所’が存在しているが、(73)の例は‘流れ’にはっきりとした輪郭が見出せない。これをイメージスキーマで表すと以下のようになる。

(75) 要素包含型の拡張



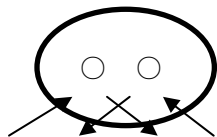
もう少し共有を表す他の例も見てみたい。

(76=(32)) 当店の麺類は一つの釜にて茹であげております。そばアレルギーのお客様はご容赦くださいませ。

この例は、要素がそばや中華めんやうどんであることは明らかであるが、それらは‘一つの釜’を共有しているわけである。ただし、共有しているのは、茹でている時間だけで、

その前や後は釜の外にある。つまり、要素が（1Q）のNC型に包含されているのは一時だけでその前後は包含されていない。

(77) 要素包含型の拡張

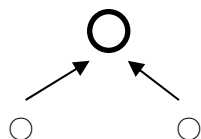


共有を表す例には以下のようなものもあった。この例においては、要素が包含されているという意味は感じられない。ただ、複数の個体が単一の個体に関わっているという意味だけが残っている。

(78=(33)) 聖ヨハネ祭の日、私とアレクセイエフは、同時に一人の少女に恋をした…

この例は共有を表す他の2例と比べてイメージスキーマが適用しにくい。あえて(79)のような拡張タイプを仮定してみたが、もう少し考察が必要である。

(79) 要素包含型の拡張



このように要素包含型の原型イメージスキーマからはかけ離れたように見える例もあるが、共有を意味する（1Q）のNC型は、要素包含型の拡張で説明できることが多い。イメージスキーマの拡張例にどのようなタイプがあるのかはさらなる考察が必要であろう。ここでは5.2.1.で扱ったタイプと5.2.2.で扱ったタイプには連続性があるということだけ確認しておきたい。

6. 追加例：数詞‘一’を含む熟語⁸¹

ここまでは、本論文で扱ってきた数量表現の形式を対象に、数詞‘一’の特殊性、それらが持つ意味の共通性を扱ってきた。そして、それらの共通性を(61)の仮説で立てたスキーマで説明してきた。ここでは追加例として、‘一’を含む熟語を取り上げて仮説を検証したい。

‘一’は、単数としての意味で用いられることもたくさんあるが、これから見ていく例

⁸¹ ここでの議論は大森文子先生（大阪大学言語文化研究科）のご助言によるところが大きく、例文の中にも先生からいただいたものが多く含まれている。

は、数情報だけでなく他に含意を持っている。それらの含意は要素取り出し型と要素包含型で説明ができるということを見ていく。

6. 1. 要素取り出し型

(80) 一部分 一因 一案 一意見

全体があることを前提として用いられる‘一部分’はまさに要素取り出し型のイメージスキーマが当てはまる。‘一因’‘一案’‘一意見’などは、どれもたくさんあるものの中の一つという意味で使われる。これらは不特定多数の中の一つという意味であり、やはり要素取り出し型であろう。

(81) 一個人 一員

このように、ある社会や組織を前提として用いられる熟語も同様に扱える。(81)のタイプと似ているのが(82)で、職業や地位を表す名詞に‘一’を付加している。後ろの名詞が現す職業や地位にある不特定多数の人々を前提としている点で、やはり要素取り出し型であろう。

(82) 一教師 一外交官 一主婦 一社員

6. 2. 要素包含型

(83) 一門, 一味, 一座, 一家, 一派

これらの例はすべて、人間の集団を前提として、その全体を表している。前提とする集団の種類は違えど、どれも同じように集団の全体を表している。「一家を支える大黒柱」のような文にするともっとわかりやすい。これらは要素包含型のイメージスキーマで説明できるであろう。ただ、‘一派’に関しては、「一流派・一流派」という意味で使うのなら不特定多数の中の一つという意味になってしまうが、「一派を率いる」のような使い方なら全体を表す要素包含型の読みになる。

(84) あたり一帯 関東一円 在庫一掃 一国一城の主

これらのタイプは「ある範囲のすべて」という意味であり、やはり全体を表していると考えられるであろう。このように、要素包含型で説明できる用例もたくさんある。

6. 3. その他

ここまで見てきた例のように、すべて(61)の仮説で説明できるというわけではない。‘一’を用いた熟語には(85) a.のように、順序を前提としている例や、b.のようにスキーマが当てはまりそうにないものもある。

- (85) a. 世界一（世界で一番目） 日本一 クラス一
b. 一大事 一波乱 一悶着

これらの分析をどう行なうべきかは現段階で結論が出せていない。今後の課題としておきたい。ただ、多くの例は仮説に挙げた2タイプで説明が可能であるということをここで確認しておきたい。

7. まとめ

本章では数詞‘一’が関わる特殊な用法をまとめた上で、‘一’という概念には2パターンのイメージスキーマが関わっており、そのどちらかが選択されることで‘一’の特殊性が説明できるという主張を行った。ただし、考察すべき内容はまだまだ残されている。

まず、2つのイメージスキーマは同等ではなく、5.1.で見たように要素取り出し型で説明できる例の方が圧倒的に多かった。それらに対する説明はできていない。また、5.2.2.で見たイメージスキーマの拡張に関しては、もっと用例を増やした上での詳細な検討が必要であろう。さらに6.節の熟語の例も更なる検討が必要である。すべて今後の課題としたい。

第 11 章 結論

最後に、結論としてここまで論じてきた各章をまとめる。日本語数量詞の諸相とは、大きく分けて、数量表現の使い分けに関する議論と、数量表現以外の数量詞の使用に関する議論からなっていた。それらを順に概観した後、名詞が担う情報には一体どういうものがあるのかについて議論したい。数量詞類別型言語と名詞類別型言語では形式は違えど、普遍的な部分があるという指摘を行なう。

1. 日本語数量詞：位置と意味の関係について

第 1 章で本論文の中心テーマとして挙げたのは、数量表現の使い分けに説明を与えることである。数量表現には四タイプがあった。

- ① 学生を 3 人招待した (NCQ 型)
- ② 3 人の学生を招待した (Q の NC 型)
- ③ 学生 3 人を招待した (NQC 型)
- ④ 須田, 山本, 岩田の 3 人を招待した (N の QC 型)

第 8 章で論じたように、NCQ 型以外はすべて名詞句内に数量詞があるという共通点があった。つまり NCQ 型だけは名詞句を形成せずに、数量詞が名詞 (句) の外にある。文レベルで数量詞が焦点化されるのが NCQ 型であり、これが数量表現の基本形であるという主張を第 4 章で行なった。数量を伝えるための表現が NCQ 型であるとも言える。

では、Q の NC 型、NQC 型、N の QC 型はどのようなのであろうか。第 8 章の議論で、これらは名詞句内にあり、かつ Q が N の全体数を表すところから、集合物認知を表すという共通点を確認できた。つまり、これらはある集合物について叙述する文であると言える。集合物の数がいくつあるのかは二次的な情報となる。この点において数量を伝えるための NCQ 型とは大きく異なる。

名詞句内数量詞の三つの用法については、それぞれ第 5 章、第 6 章、第 7 章で論じた後で、第 8 章にまとめた通りである。まず、意味的な中心 (重点) が N にあるのか Q にあるのかで Q の NC 型か NQC 型が使い分けられると主張した。名詞句だけを取り出して Q の N と NQ を比較すると、数量を焦点化したり、強調したりする文脈に NQ が使われることは 6 章で確認したとおりである。次に、意味的な中心の違いから、同質な集合物を要求す

る Q の NC 型, 異質な集合物を要求する N の QC 型, どちらも許容できる NQC 型という性格が明らかになった。これは名詞句内数量詞は集合物の均質性によって使い分けられるという主張である。

2. 日本語数量詞：数量表現以外の使用

日本語の数量詞が数量表現だけでなくさまざまな機能を持つことも見てきた。本論文ではそれらを、大きく三つに分けて論じてきた。一つ目は数量詞の中の助数詞（類別詞）が持つ名詞を分類する機能である。二つ目は代名詞的な機能、三つ目は数詞‘一’が持つ特殊な機能である。

第 2 章において、カテゴリー化という観点で見れば助数詞（類別詞）は名詞を分類する機能を持っており、名詞分類辞やジェンダーなどとの共通点が指摘されていることを見た。その分類する機能とは、個体を数える機能と連続体の量をはかる機能に分けられることを第 3 章で論じた。そこではそれぞれを分類類別詞、測定類別詞という用語で呼び分けた。これらの使い分けは個体・連続体という名詞の有界性に関わるという指摘をした後、その使い分けを背景として解釈がなされている表現が属性 Q であると主張した。

日本語数量詞が代名詞の代わりに広く使用されていることは第 9 章で見たとおりである。照応表現に限らず直示表現でも広く使用が確認できた。数量詞の代名詞的用法は、日本語の人称代名詞が持つ制限を補う形で存在していた。9 章 I 部で確認したのは、数量詞が抽象的な情報しか持たないことから文脈を頼りに聞き手が指示物を追跡するというプロセスである。直接指示物を特定しないことにより柔軟にさまざまな指示物を表せることを主張した。文脈依存的な使用であることから、個性性が低くて聞き手が追跡できない時には場指示語の付加が必要になってくることは 9 章 II 部で論じた。

数量表現の数詞を‘一’にすると、数量情報以外の情報が加えられることを見たのが第 10 章である。その数詞‘一’の特殊性は、‘一’という概念が二つのイメージスキーマを持つということで説明が可能であると主張した。ある集合を前提とし、その全体を表す要素包含型、集合の中の‘一’を取り出す要素取り出し型、この 2 タイプによって説明を試みた。要素取り出し型で説明できるとした不定用法は、(1 Q) の NC 型で表された。興味深いのは、第 5 章で論じた Q の NC 型との対照的な振る舞いである。5 章では、 N が定表現になることで Q が非制限的連体修飾になり、 Q の NC 型が成立しているという主張を行なった。つまり、数詞を‘一’にするか‘二以上’にするかで定・不定を分けていることに

なる。ただし、日本語の不定用法は義務的ではないことは10章で確認したとおりである。

ここまで1.節・2.節で、数量表現と数量表現以外に分けて、本論文の主張を概観してきた。各章のまとめで残された問題については指摘しており、ここで改めてそれらを掲載はしない。ただ、残された課題を一つ一つ解決していくことが、今後の進むべき方向であることは間違いないだろう。

3. 名詞が担う情報の普遍性解明に向けて

飯田（2005）では、日本語を含む東アジアの言語には数え方が豊富にある（助数詞がたくさんある）という指摘をした後で、これらの言語の共通点として以下のような特徴を挙げている。

- ①冠詞（英語の“a”や“the”にあたるもの）がない
- ②名詞の複数形がない（あっても文法上の厳しいルールがない）
- ③名詞のジェンダー（男性・女性・中性）が存在しない

これらを飯田は東アジアの言語の“三ナイ特徴”と呼んでいる⁸²。本章2.節で確認したように、定・不定の区別には数量表現が関わっていることを5章・10章で確認した。名詞の複数形は個体・連続体を区別する有界性を表しており、日本語・中国語においてはそれらを助数詞（類別詞）が区別していることは第3章で見た。ジェンダーや名詞接辞と数量詞の関係は第2章で紹介した。つまり、日本語のような数量詞類別型言語においては、名詞と数量詞を組み合わせることによって、名詞類別型言語の名詞や冠詞が持つ情報を担っているということになる。

飯田の指摘した、東アジア言語の“三ナイ特徴”は、数量詞がある程度補っているのではないかというのがここまでの主張である。本論文は日本語について論じたものであり、主張を数量詞類別型言語一般に広げることにはできないが、少なくとも日本語においては、ある程度関連が確認できるのではないだろうか。本論文は、日本語数量詞の諸相を記述するのが目的であるが、同時に定・不定、有界・非有界、名詞のカテゴリー化といったものが言語の普遍的な性質であることを示す一例として存在できるなら幸いである。

⁸² 第3章で紹介したとおり、②の複数形と助数詞の相補分布については松本（1993）で詳しく扱っている。③のジェンダーと助数詞の相補関係については井上（1999）でも詳しく論じている。

あとがき

当初、博士論文の構想として頭の中にあったものは、なんとか形にすることができた。とにかく現段階でこれが自分の全力投球である（ストライクゾーンに入るかどうかは別として…）。素敵な人たちとの出会い、素敵な本との出会いがこの論文の基礎になっている。

指導教員である春木仁孝先生と大森文子先生、お二人の授業を軸として、この3年間研究活動を行ってきた。私の拙い議論に乗った上で、いろいろコメントをくださるお二人の指導は的確で、いつも進むべき方向を教えていただいた。この論文を読み返すと、章によって春木先生の顔が浮かんだり、大森先生の顔が浮かんだりする。

LCCC 研究会の三藤博先生、由本陽子先生には、研究会での発表のたびにコメントをいただいた。お二人ともお忙しい中、毎回研究会に来てくださり頭が下がる思いである。いつも議論の展開を厳しくチェックしてくださり、独りよがりな議論になりがちな私の発表を正してくださった。

大阪外国語大学では堀川智也先生、沈力先生（本務校は同志社大学）の授業に参加させていただいた。ただコメントが鋭いというだけでなく「言葉を研究することは楽しいんだ！」ということ体を一杯で表現しておられるお二人からは、理想的な研究への取り組み方を教えていただいた。

大阪大学言語文化研究科では、発表の際に岡田伸夫先生を始め多くの先生から有益なご指摘をいただいた。ご指導いただいた先生方すべてのお名前をここに挙げることはできないが大変感謝している。

学外の研究会にも目を向けたい。とある言葉の会の岩男考哲氏、建石始氏には、研究会で発表の機会を与えていただいただけでなく、いつも有益なコメントをいただいた。また、お二人を通じて益岡隆志先生の集中講義や研究会にも呼んでいただき、様々な大学の大学院生とも知り合うことができた。

大阪大学に入学して、多くの大学院生たちに出会えたことも忘れてはならない。本論文の第4章の各節でそれぞれ紹介してあるが、各国の留学生からは興味深い例文をいただいた。また、同期の山本大地氏とは、よきライバル、よき相談相手として常に切磋琢磨してきた。対象とする言語は違えど研究姿勢は同じで、たびたび交わした議論は忘れられない。そして、本論文の草稿に隅々まで目を通してチェックをしてくれた布尾勝一郎氏には専門

外ならではの視点で多くの示唆をいただいた。

最後になったが、数量詞という研究対象に出会えたことが、私の研究活動を決定する大きな要因であったと思う。様々な分野へと広がっていくこの興味深い対象があったからこそ、この論文を書き続けることができた。私の名前が‘かずなり（一成）’であることにも何か不思議な縁を感じてしまう。この名前を私に与え、あらゆる援助を惜しみなくしてくれた両親に感謝している。

2006年11月

用例出典

- (朝) =朝日新聞朝刊
(1・2の)『1・2の三四郎2』(小林まこと/講談社)
(うぶめ)『姑獲鳥の夏』(京極夏彦/講談社)
(女社長)『女社長に乾杯!』(赤川次郎/新潮文庫)
(川)『日本の川を旅する』(野田知佑/新潮社)
(教養)『教養としての言語学』(鈴木孝夫/岩波新書)
(こちら)『こちら葛飾区亀有公園前派出所』(秋元治/集英社)
(ゴルゴ)『ゴルゴ13 さいとう・たかをスペシャル』(さいとうたかを/小学館)
(さぶ)『さぶ』(山本周五郎/新潮社)
(三四郎)『三四郎』(夏目漱石/角川文庫)
(3匹のこぶた)『3匹きのこぶた』(絵本/大創産業)
(島)『課長島耕作』(弘兼憲史/講談社)
(俊寛)「俊寛『羅生門・鼻』(芥川龍之介/新潮社)
(柔道)『柔道部物語』(小林まこと/講談社)
(新源氏)『新源氏物語』(田辺聖子/新潮文庫)
(青春)『青春の蹉跎』(石川達三/新潮社)
(手)『白い手』(椎名誠/集英社)
(ニッポン)『「はてな?」のニッポン』(彭飛/祥伝社)
(日本語)「日本語教育における数詞・助数詞」『日本語学』5巻8月号
(田中望・新聞英世/明治書院)
(楡家)『楡家の人びと』(北杜夫/新潮社)
(ネット:セーラ)『セーラーの赤いスカーフ』前編 堀井忍
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Orion/6931/Red1.html>
(ネット:はてな)「人力検索はてな」<http://www.hatena.ne.jp/1083296448>
(ネット:ブログ1) <http://blog.livedoor.jp/masayuki1982/>
(ネット:ブログ2) <http://www.aist.go.jp/NIRE/publica/news-96/96-07-1.htm>
(鼻)「鼻」『羅生門・鼻』(芥川龍之介/新潮社)
(華岡)『華岡青洲の妻』(有吉佐和子/新潮社)
(バンド)『バンドネオンの豹』(高橋克彦/講談社)
(避暑地)『避暑地の猫』(宮本輝/講談社)
(ブッダ)『ブッダ』(手塚治虫/潮ビジュアル文庫)
(坊)『坊ちゃん』(夏目漱石/新潮社)
(マスタ)『MASTER KEATON』(浦沢直樹・勝鹿北星/小学館)
(三上)『三上文法から寺村文法へ』(益岡隆志/くろしお出版)
(右や左)『もし「右」や「左」が無かったら』(井上京子/大修館書店)
(みんな)映画『みんなのいえ』(三谷幸喜脚本/東宝)
(モッキン)『モッキンポット師の後始末』(井上ひさし/講談社)
(山本)『山本五十六』(阿川弘之/新潮社)
(落日)『遠き落日』(渡辺淳一/集英社)
(羅)「羅生門」『羅生門・鼻』(芥川龍之介/新潮文庫)
(流転)『流転の王妃の昭和史』(愛新覚羅浩/新潮文庫)
(読売)『読売新聞ウェブ版』

*出典の明記してないものは作例

参考文献

- アジェージュ, クロード (1982) 『言語構造と普遍性』 (日本語訳: 東郷雄二・春木仁孝・藤村逸子 1990) 白水社
- 飯田朝子 (1998) 「数量詞遊離は統語論の問題か? : --三原 (1998) “動詞のアスペクト論” の妥当性を考える--」 『幻語』 第 28 号 pp.19-23 MAYL 月刊機関誌
- 飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』 町田健監修 小学館
- 飯田朝子 (2005) 『数え方でみがく日本語』 筑摩書房
- 庵功雄 (1994) 「定性に関する一考察—一定情報という概念について—」 『現代日本語研究』 1 号 pp.40 - 56 大阪大学文学部日本学科
- 井口厚夫・井口裕子 (1994) 『日本語文法整理読本 解説と演習』 名柄迪監修 バベル・プレス
- 池内正幸 (1985) 『名詞句の限定表現』 大修館書店
- 池上秋彦 (1971a) 「形式名詞 (述語項目)」 松村明編 『日本文法大辞典』 明治書院
- 池上秋彦 (1971b) 「数詞 (述語項目)」 松村明編 『日本文法大辞典』 明治書院
- 池上秋彦 (1972) 「代名詞の変遷」 『品詞別 日本文法講座 名詞・代名詞』 pp.123 - 162 明治書院
- 池上禎造 (1940) 「助数詞攷」 『国語国文』 十卷三号 pp.1-27
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社
- 泉井久之助 (1978) 『印欧語における数の現象』 大修館書店
- 井上逸兵 (2002) 「可算性」 辻幸夫編 『認知言語学キーワード事典』 研究社
- 井上和子 (1975) 「構造と生成」 『国語学』 101 号 pp.1-18
- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』 大修館書店
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったら——言語人類学への招待』 大修館書店
- 井上京子 (1999) 「助数詞は何のためにあるのか」 『月刊言語』 28 卷 10 号 pp.30-37
- 井上京子 (2003) 「意味の普遍性と相対性」 『認知意味論』 pp.251-294 大修館書店
- 今里典子 (2004) 「非類別詞/類別詞言語を決定する要因について」 西光義弘・水口志乃扶編 『類別詞の対照』 pp.39 - 57 くろしお出版
- 岩田一成 (2004) 「日本語数量詞の位置と意味」 『日本言語学会第 129 回大会予稿集』 pp.177 - 182
- 岩田一成 (2005) 「日本語数量詞の代名詞的用法」 『自然言語への理論的アプローチ—意味編—』 pp.11-18 大阪大学大学院言語文化研究科
- 岩田一成 (2006a) 「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」 『日本語文法』 6 卷 1 号 pp.38 - 55
- 岩田一成 (2006b) 「日本語数量表現 N の QC 型に関する一考察」 『自然言語への理論的アプローチ—意味編—』 pp.1-10 大阪大学言語文化研究科
- 岩田一成 (2006c) 「日本語数量詞名詞的用法の位置と意味」 『関西言語学会第 31 回大会ハンドアウト』
- 宇都宮裕章 (1995a) 「数量詞の機能と遊離条件」 『共立女子大学国際文化学部紀要』 7 号 pp.1-26 共立女子大学
- 宇都宮裕章 (1995b) 「日本語数量詞体系の一考察」 『日本語教育』 87 号 pp.1-11
- 江副隆秀 (1987) 『外国人に教える日本語文法入門』 創拓社
- 大木充 (1987) 「日本語の遊離数量詞の談話機能について」 『視聴覚外国語教育研究』 10 号 pp.37-67 大阪外国語大学
- 大津由紀雄 (1996) 『探検! ことばの世界』 日本放送出版協会
- 岡村和江 (1972) 「代名詞とは何か」 『品詞別 日本文法講座 名詞・代名詞』 pp.79-121 明治書院
- 沖森卓也編 (1989) 『日本語史』 おうふう
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」 『日本語教育』 14 号 pp.42-60
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再論」 『人文学報』 160 号 pp.1-23 東京都立大学
- 奥津敬一郎 (1986) 「日中対照数量表現」 『日本語学』 5 卷 8 号 pp.70-78

- 奥津敬一郎 (1989) 「数量表現」 井上和子編『日本文法小事典』 pp.200-204 大修館書店
- 奥津敬一郎 (1996a) 「連体即連用? 第3回」『日本語学』15巻1号 pp.112-119
- 奥津敬一郎 (1996b) 「連体即連用? 第4回」『日本語学』15巻2号 pp.95-105
- 織田稔 (2002) 『英語冠詞の世界』 研究社
- 尾谷昌則 (2002) 「Quantifier Floating in Japanese : From A Viewpoint of Active-Zone/Profile Discrepancy」『日本認知言語学会論文集』第2巻 pp.96-106.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』 岩波書店
- 加藤一郎 (1972) 「名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 名詞・代名詞』 pp.25-54 明治書院
- 加藤重広 (1997) 「日本語数量詞に見る認知とテキスト戦略」『月刊言語』26巻11号 pp.91-95
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 加藤万理 (2005) 「日本語の制限・非制限修飾に関する一考察」『日本語文法』5巻1号 pp.3-19
- 加藤美紀 (2003) 「もののかずをあらわす数詞の用法について」『日本語科学』13 pp.33-57
- 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』 講談社選書メチエ
- 金谷武洋 (2004) 『英語にも主語はなかった』 講談社選書メチエ
- 神尾昭雄 (1976) 「言語論から見た言語の異常」『月刊言語』5巻11号 pp.42-52
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックス」『月刊言語』6巻8号 pp.83-91
- 河合隼雄 (1994) 『昔話の深層』 講談社
- 川端善明 (1967) 「数・量の副詞」『国語国文』36巻10号 pp.1-27
- 神崎高明 (1994) 『日英代名詞の研究』 研究社出版
- 木枝増一 (1937) 『高等国文法新講 品詞篇』 東洋図書
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における固体数量詞と内容数量詞」『国語学』186集 pp.29-42
- 木村英樹 (2002) 「“的”の機能拡張—事物限定から動作限定へ」『現代中国語研究』第四期 pp.1-13
- 切替英雄 (2006) 「アイヌ語の1を示す数詞」『言語研究』129号 pp.227-242
- 金水敏 (1986a) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』 pp.602-624 明治書院
- 金水敏 (1986b) 「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論集』 pp.467-490 明治書院
- 金水敏 (1989) 「代名詞と人称」『講座 日本語と日本語教育4』 pp.98-116 明治書院
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 pp.85-116 講談社
- 金水敏 (2005) 「歴史的に見た「いる」と「ある」の関係」『日本語文法』5巻1号 pp.138-157
- 金田一春彦 (1957) 『日本語』 岩波新書
- 金田一春彦 (1988) 『日本語新版 下』 岩波新書
- 金田一春彦 (1991) 『日本語の特質』 日本放送出版協会
- 國廣哲彌 (1980) 「総説」國廣哲彌編『日英語比較講座 第2巻 文法』 pp.1-21 大修館書店
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 久野暲・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』 くろしお出版
- 郡司隆男 (1997) 「文法の基礎概念2」『言語の科学5 文法』 pp.79-118 岩波書店
- 見坊豪紀 (1965) 「現代の助数詞」『言語生活』166号 pp.54-60
- 顧海根 (1981) 「中国人学習者によくみられる誤用例 (二)」『日本語教育』44号 pp.57-69
- 興水優 (1998) 「日本語と中国語」玉村文郎編『新しい日本語研究を学ぶ人のために』 pp.146-168 世界思想社
- 小林昌博 (2004) 「数量詞の形式と量化の領域：日英語の対照の観点から」佐藤滋・堀江薫・中村涉編『対照言語学の新展開』 pp.125-135 ひつじ書房
- 阪田雪子 (1971) 「と (語彙項目)」松村明編『日本文法大辞典』 明治書院
- 坂原茂 (2000) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」坂原茂編『認知言語学の発展』

- pp.213-249 ひつじ書房
- 坂原茂 (2002) 「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』大堀壽夫編 pp.105 - 134 東京大学出版会
- 坂原茂 (2006) 「トートロジとカテゴリ再構成のダイナミズム」『関西言語学会第 31 回大会ハンドアウト』
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』(復刻版) くろしお出版
- 佐治圭三 (1969) 「時詞と数量詞」『月刊文法』2 巻 2 号 pp.157-165
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店
- 澤田美恵子 (2000) 「「とりたて」という概念の創出」『日本語学』19 巻 5 号 (四月臨時増刊号) pp.110-119
- 篠原俊吾 (1993) 「可算／不可算名詞の分類基準」『月刊言語』22 巻 10 号 pp.44-49
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 鈴木一彦 (1997) 『日本語文法の本質』東宛社
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高見健一 (1998a) 「日本語の数量詞遊離について：機能論的分析 (上)」『月刊言語』27 巻 1 号 pp.86-95
- 高見健一 (1998b) 「日本語の数量詞遊離について：機能論的分析 (中)」『月刊言語』27 巻 2 号 pp.86-95
- 高見健一 (1998c) 「日本語の数量詞遊離について：機能論的分析 (下)」『月刊言語』27 巻 3 号 pp.98-107
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』研究社
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』pp.211-233 くろしお出版
- 田窪行則・木村英樹 (1997) 「中国語,日本語,英語,フランス語における三人称代名詞の対照研究」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』pp.137-152 くろしお出版
- 建石始 (2003) 「談話のストラテジーとしての後方照応」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.47 - 52
- 建石始 (2006) 「非指示的名詞句における数詞「一」の独自性」『日本語文法学会第 7 回大会発表予稿集』pp.187-194
- 田中敦子 (1987) 「国語助数詞試論」『国文目白』26 号 pp.33-41 日本女子大学国語国文学会
- 張麟声 (1983) 「日中両語の助数詞」『日本語学』2 巻 8 号 pp.91-99
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
- 塚本秀樹 (1986) 「数量詞の遊離について—日本語と朝鮮語の対照研究—」『朝鮮学報』第 119・120 輯 pp.33-69 朝鮮学会
- 築島裕 (1965) 「日本語の数詞の変遷」『言語生活』166 号 pp.30-37
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『寺村秀夫論文集Ⅰ (1992)』所収 pp.3 - 20 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1—」『寺村秀夫論文集Ⅰ (1992)』所収 pp.157-207 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 2—」『寺村秀夫論文集Ⅰ (1992)』所収 pp.209-260 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 3—」『寺村秀夫論文集Ⅰ (1992)』所収 pp.261-296 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」『寺村秀夫論文集Ⅱ (1992)』所収 pp.139-184 くろしお

出版

- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- 東郷雄二 (2005) 「フランス語の隠れたしくみ 13.数量表現と意味の重み」『ふらんす』 80 巻 4 号 pp.72-75
- 中川正之・李浚哲 (1997) 「日中両国語における数量表現」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』 pp.96-116 くろしお出版
- 西江雅之 (1978) 「クラスと数」『月刊言語』 7 巻 6 号 pp.34-41
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房
- 野田尚史 (1992) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 3—: 解説」『寺村秀夫論文集 I』 pp.372 くろしお出版
- 橋本進吉 (1938) 『改制 新文典別記口語篇』 富山房
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』 岩波書店
- 橋本萬太郎 (1978a) 「性と数の本質」『月刊言語』 7 巻 6 号 pp.2-12
- 橋本萬太郎 (1978b) 「言語類型地理論」『橋本萬太郎著作集第 1 巻 (2000)』 pp.29 - 160 内山書店
- 橋本萬太郎 (1981) 『現代博言学』 大修館書店
- 春木仁孝 (1986) 「指示形容詞を用いた前方照応について」『フランス語学研究』 20 号 pp.16-32
- 堀川智也 (2000) 「数量詞連結構文の本質」『国語と国文学』 77 巻 2 号 pp.44-57 東京大学国語国文学会
- 堀口和吉 (1982) 「基数詞」日本語教育学会編『日本語教育事典』 pp.109-110 大修館書店
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生熊心理学から見た文法現象』 東京大学出版会
- 益岡隆志 (1982) 「文法関係と数量詞の遊離」『国語学論説資料 文法・文体』 19 pp.39-60 論説資料保存会
- 益岡隆志 (1990) 「モダリティ」近藤達夫編『講座 日本語と日本語教育 12』 pp.71-96 明治書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版
- 松本克己 (1993) 「「数」の文法化とその認知的基盤」『月刊言語』 22 巻 10 号 pp.36-43
- 松本曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系」『言語研究』 99 号 pp.82-106
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院
- 水口志乃扶 (2004a) 「「類別詞」とは何か」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』 pp.3-22 くろしお出版
- 水口志乃扶 (2004b) 「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』 pp.61-77 くろしお出版
- 水野義道 (1993) 「日本語「の」と中国語“的”」『日本語学』 12 巻 11 号 pp.72-79
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』 松柏社
- 三原健一 (1998a) 「数量詞連結構文と結果の含意 (上)」『月刊言語』 27 巻 6 号 pp.86-95
- 三原健一 (1998b) 「数量詞連結構文と結果の含意 (中)」『月刊言語』 27 巻 7 号 pp.94-102
- 三原健一 (1998c) 「数量詞連結構文と結果の含意 (下)」『月刊言語』 27 巻 8 号 pp.104-113
- 三保忠夫 (2000) 『日本語助数詞の歴史的研究』 風間書房
- 三保忠夫 (2004) 『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』 風間書房
- 三保忠夫 (2006) 『数え方の日本史』 吉川弘文館
- 宮地敦子 (1972) 「数詞の諸問題」『品詞別日本文法講座 名詞・代名詞』 pp.56 - 78 明治書院
- 宮本正興 (1993) 「名詞のクラス」『月刊言語』 22 巻 10 号 pp.28-35
- 三輪正 (2005) 『一人称二人称と対話』 人文書院
- 森重敏 (1958) 「数詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』 27 巻 12 号 pp.12-33
- 森田良行 (1985) 『誤用文の分析と研究—日本語学への提言—』 明治書院

- 森田良行 (1998) 『日本人の発想, 日本語の表現』 中公新書
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』 23 pp.96-112 学習院女子短期大学
- 矢澤真人 (1988) 「数量の表現」金田一春彦, 林大, 柴田武編『日本語百科大事典』 大修館書店
- 安田尚道 (1978) 「古代日本語の数詞をめぐる」『月刊言語』 7 卷 1 号 pp.75-82
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館出版
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館出版
- レイコフ, ジョージ (1987) 『認知意味論』 (日本語訳: 池上嘉彦・河上誓作他 1993) 紀伊国屋書店
- ロドリゲス, ジョアン (1608) 『日本大文典』 (日本語訳: 土井忠生 1955) 三省堂
- 渡辺実 (1952) 「日華両語の数詞の機能」『国語国文』 21 卷 1 号 pp.97-109 京都大学国文学会
- 渡辺実 (1996) 『日本語概説』 岩波書店

- Bolinger, D. (1967) English Adjectives: attribution and predication. *Lingua* 18. pp.1-34.
- Brown, S. R. (1863) *Colloquial Japanese*. Presbyterian Mission Press.
- Downing, P. (1984) *Japanese Numeral Classifiers: Syntax, Semantics, and Pragmatics*. Ph. D. diss.. University of California, Berkeley.
- Downing, P. (1986) The anaphoric use of classifiers in Japanese. In Colette Craig ed.. *Noun Classes and Categorization*. pp.345-375. John Benjamins.
- Downing, P. (1996) *Numeral classifier systems: The case of Japanese*. John Benjamins.
- Foley, W. A. (1997) *Anthropological Linguistics*. Blackwell Publishers.
- Givón, T. (1981) On the development of the numeral 'one' as an indefinite marker. *Folia Linguistica Historica* 2-1. pp.35-53.
- Givón, T. (1983) Topic continuity in discourse: an introduction. In T.Givón ed.. *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study*. pp.3-41. John Benjamins.
- Greenberg, J. H. (1978) Generalizations About Numeral Systems. *Universals of Human Language Volume 3 Word Structure*. pp.250-295. Stanford University Press.
- Hinds, J. (1975) Third person pronouns in Japanese. In Fred Peng ed.. *Language in Japanese society*. pp.129-157. university of Tokyo press.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *language* 56. pp. 251-299.
- Imai, M. and D. Gentner (1997) A crosslinguistic study on constraints on early word meaning: Linguistic influence vs. universal ontology. *Cognition* 62. pp.169-200.
- Iwasaki, S. (2002) *Japanese*. John Benjamins.
- Kim, A. H. (1995) Word order at the noun phrase level in Japanese. In Colette Craig ed.. *Word Order in Discourse*. pp.199-246. John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar vol.1:Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1987b) Nouns and Verbs. *Language* 63-1. pp.53-94.
- Langacker, R.W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1-1. pp.5-38.
- Lucy, J. (1992) *Grammatical categories and cognition: A case study of linguistic relativity hypothesis*. Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics 1*. Cambridge University Press.
- Martin, S. E. (1954) *Essential Japanese*. Charles E. Tuttle Company.
- Martin, S. E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University.

- Miyagawa, S. (1989) *Syntax and semantics 22 : Structure and Case marking in Japanese*. Academic Press.
- Naganuma, N. (1951) *Grammar and Glossary*. 開拓社.
- Naito, S. (1995) Quantifier Floating. 高見健一編『日英語の右方移動構文』ひつじ書房.
- Quirk, R. [et al.] (1985) *A Comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Traugott, E. C. (1995) Subjectification in grammaticalisation. *Subjectivity and Subjectivisation*. pp.31-54. Cambridge university press.
- Watanabe, A. (2006) Functional projections of nominals in Japanese:syntax of classifiers. *Natural Language & Linguistic Theory 24*. pp.241-306.